

---

# **未来のキミを救いたい 鷹野信也編**

水鏡樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来のキミを救いたい 鷹野信也編

### 【Zコード】

N5026B

### 【作者名】

水鏡樹

### 【あらすじ】

鷹野信也はいたつて普通の高校生だった。何気ない日々をすごしていた信也は、骨折で入院した最愛の女性 山倉優美という女性をお見舞いに行く。そこで信也は、本音を出せない優美の苦しみに気づく。優美を支えると約束し、信也はめでたく優美と付き合つこととなる。だが、幸せはそうあっては続かなかった。

## プロローグ（一）（前書き）

このたびは数ある小説の中から『未来の君を救いたい』を選んでいただき、ありがとうございます。

この小説は『鷹野信也編』『コトア＝ミリス編』の一通りがあります。同じ時間帯を信也の視点、コトアの視点からとった、A面B面型の小説となっています（プロローグ、エピローグは除きます）

どちらから読んでもらっても、かまいません。片方だけ読んでは、話の全貌が見えませんので、もつ片方を読んだときに新たな発見、驚きがあると思います。

また、一つを同時に読んでいくといつのもいいと思います。ただ、話は分かりやすくなりますが、その分発見や驚きは、納得といった感覚になると感じます。

かなり長い話になりますが、最後までお付き合いしていただければ幸いです。感想などありましたら、ぜひお聞かせください。

## プロローグ（1）

書き終えた一通の手紙　それは僕に与えられた特権であり、大切なつながりだった。

室内の蛍光灯と朝日の光が溶けあって同一化した頃、僕はおもむろにペンを置いた。

その特権を僕に与えた人物以外、事実を知るものはいない　いや、一人だけ知っている人物がいる。

ここへ来る以前からお世話になり、いまでは同僚でもあるミリア＝ミリスだ。

なぜミリアだけが知っているのか　その答えは、ミリアがこの特権に大きくかかわってくる人物だからだ。

「信也君、いる？」

玄関から聞こえてくる声に反応して、僕は立ち上がった。  
部屋の中は殺伐としており、今まで座っていた木製の机を除けば、家具はテレビとビーチオ、ベッドしかない。

それもすべて白や黒を基調とした、地味な色合いのものばかりだ。  
「いるよ、どうぞ」

机の上の手紙を拾い上げながら、声をかける。すると、きしんだ音をたてながら、玄関の扉がゆっくりと開きだした。

わずかに開いた隙間からひょいと顔を覗かせたのは、どんぐり眼で藍色のウエーブがかかった短髪の女の子だった。彼女がミリア＝ミリスだ。

その容貌は初めて会つた三年前から、まったく変わっていない。

「誰もいないよね？」

「もちろん」

室内を確認してから、ミリアが中へと入ってきた。首から足首までを覆つた純白のローブを着こなしている。

ただ、ミリアのローブはお茶でもこぼしたのか、すその辺りに少し

しみがでていた。

右腕についた緑色の腕章が、白いローブと相成つて執拗に目立つている。

これが今ミリアの格好であり、僕達の仕事場の制服だった。以前からミリアはこの制服をダサいと嘆いていたが、僕は結構気に入っている。

ただ、今日の僕は制服を着用していない。

なぜなら今日は非番で、着替える必要がないからだ。

「もうできる?」

「ちょうどいま、書いたところだ」

僕は手紙を渡すと、ミリアは何度も額きながらポケットへと手紙を入れた。

「うんうん、確かに預かりました」

「今年も頼むよ」

手紙の入ったポケットを叩き、血漫げに鼻を鳴らす。

本来なら、この手紙を届ける仕事は、ミリアにとつて年に一度の大役のはずだ。

それでもミリアは毎年緊張したようす一つ見せず、すこぶる機嫌がいい。

「相変わらず機嫌がいいね」

「フフッ、分かる?」

「僕にとつては大事な日だけど、ミリアにはめんどくさいだけじゃないのか?」

「実はそうでもないんだよねえ……」

腰に両手をあて、含み笑いを発するミリアに、唇をひきつらせる。

僕はくるりときびすを返すと、日光の注ぐ窓を全開にした。

目の前に広がるのは青空と住宅街、それに季節の変わり田で紅葉になりつつある多種多様な木々だ。

「あれから、もう二年もたつんだね」

そばまで寄ってきたミリアが、微笑み混じりに話しかけてくる。

僕は少し冷たい風に体をさらしながら、小さく相槌を打つ。

「それじゃあ、仕事が終わったら行ってくるわね。なにか伝えたいことはある?」

ミリアに尋ねられて、少し考え込んだ。

口をへの字に曲げてしばらくなたち、ミリアが笑う光景を予測しながら答える。

「この間さ、大学病院で見かけたって話しただろ?」

「ああ、すっごい喜んでたよね、信也君」

「あの時のこと伝えといってくれないかな? その、かわいくなつてたつて……」

本来なら直接伝えたいところだが、僕にはその手段がない。ミリアから目をそらしながら伝言を頼むと、予想通りミリアは笑い出していた。それも腹を抱えてだ。

「そ、そこまで笑わなくてもいいだろ!」

「いやいや、さすがプレイボーイの信也君だね! 『いつまでもす!』

「う、うるさい!」

ベッドの上に転がっていたクッショוןを投げつけるも、ひらりとミリアはかわしてみせた。そのまま慌てて僕の元から離れていく。「ちゃんと伝えておくからね。安心してよ信也君」

「さつさと仕事に行け!」

一個田のクッショൺを握った時点でのミリアは僕の家から飛び出していった。去り際の笑い声だけがしばらく耳に残る。

開きっぱなしの扉を閉めて、ベッドへと腰掛ける。頭の中に背中までのつややかな黒髪と切れ長の目、スラッシュとした鼻に潤いを帯びた唇の、最愛の女性の顔が思い浮かぶ。

山倉優美　　それが彼女の名前だ。高校で同じ学年になつた僕たちは、二年生で初めて同じクラスになつた。

シルクのような純白の肌に身を包み、優しさと慈しみを含ませ持つたまるで女神のような女性だつた。

だからといって、物静かなわけではなく、クラスを引っ張っていくムードメーカー的な存在も担っていた。

活発で、考えをハッキリ言える　それが出会った頃の山倉に対するイメージだ。

そんな山倉の太陽を思わせる笑顔や、苦しみを包み込み、安らぎを与える慈母の心に引かれる生徒　僕にとってはライバル　は多かったようだ。

うつすらと濡れたピンク色の脣、光沢が滝のように流れる黒髪。だが、山倉がだれかと付き合っているという話は聞かなかつた。山倉と僕が急速に仲良くなつたのは、山倉が階段から転げ落ちて、骨折してしまつた事件が原因だつた。

教室で弁当を食べていた僕の元へ、トイレに行つていた親友の三村が全速力で駆けつけてくる。

山倉が階段から落ちたという話を聞いた僕は、急いでその場所へと向かつた。人だかりができている踊り場の中央で、山倉が顔をしかめているのが目に入つてくる。

青い顔で耐え忍ぶ苦痛の表情は、いま思い出しても胸が苦しくなる。気がつくと、僕は野次馬根性丸出しの生徒をかきわけて、山倉を抱えていた。

一目散に保健室へと運ぶと、保健医の先生が骨折しているとの判断と共に救急車を呼んだのだ。

翌日登校した僕は、そのまま山倉が入院したという話を三村から聞く。それがすべての始まりだった。

「三年……か

ぼやきつつ、ギュッと手を握り締める。この手が山倉に触れることは当分ないだろう。また、それが僕の望みでもあった

## プロローグ（2）

しんみりとした部屋の雰囲気で、自分の気配を交わらせて一体化させる。ふわりと浮かんだような感覚に包まれ、ふいに襲つてくる眠気にうとうとしかけた瞬間だった。

「信也君！」

豪快にあけられた玄関の扉は壁へとぶつかり、爆音を響かせる。一気に眠気が飛び散つた僕はパツと目を全開にしながら、わたわたとのけぞつてベッドの上へと倒れてしまった。

「な、なんだよミコア……」

玄関で頭を搔きながら、悪氣もなしに微笑んでみせるミコア。ポケットからなにやら取り出すと、それを僕に差し出してきた。

それは一本の青いビデオテープだった。背表紙には『鷹野信也十七歳』とかかれているだけで、内容についてはなにも触れられていない。

「なんのテープだ、これ

「あの一週間が収められたテープだよ。それよりちょっと前の話も入つてるらしいけど、久しぶりに見たら面白いんじゃないかなって」

「あの一週間のテープ？ そんなものがあつたのか……」

驚き目を丸くしている僕に、なぜかミリアが自慢げに胸を張つている。別にミリアが録画、編集したものではないだろうに……。

「じゃあ、ここに来るきっかけも入つてるってことだよな？」

「まあ、そうだろうねえ」

「……それって面白いか？ まあ懐かしいかもしれないけど

手の上でビデオテープを弄んでいると、ミリアが僕の肩をポンと叩いた。

「いまだから落ち着いて見られるつていうのもあるんじゃない？」

「まあ、確かに……」

「わたしも一緒に見たいんだけどね。仕事がなかつたら……あつー

突然声を上げて、慌てて玄関へと走り出すリリア。後ろ手で僕に手を振りながら、

「あんまり遅くなるとトライに怒られちゃう… それじゃあね信也君

！」

そのままこちらが声をかける間もなく飛び出していく。またもや玄関の扉は開けっ放しのままだ。

「まったく、そそつかしいのも昔から変わらないよな……」

玄関の扉を閉めて、再びベッドへと腰を下ろす。手に握られたビデオテープをまじまじと見つめた後、小さくつめき声を漏らしていた。

「確かに今日は非番で、特に予定があるわけでもない……」

ビデオテープに引っ張られるようにギックリにいれ、再生ボタンを押す。最初は砂嵐が流れたテレビから、意味のある映像が流れ出した。階段から落ちた山倉を、必死に保健室へと運んでいく僕と、保健室の先生が山倉の様態を確認し、救急車で山倉が病院へ運ばれていく姿が映し出される。あの時の映像が、ありのまま映し出された。

机と一対になっていた椅子をテレビの見やすい位置へと移動させると、腰を下ろしてテレビへと集中する。

胸のうちはすでに、三年前の自分がついた。

10月24日(一)

十月二十四日 金曜日

男女共に紺色の制服を着ているせいか、教室内のほとんどが紺色と化していた。

男子は灰色一色のズボン、女子は赤と黒のチェックのスカート。生徒間で不平の集まつている制服だ。

朝礼の直後、本来なら生徒は、一時間目の準備をしなければならない時間帯である。

だが、そんな作業に追われる生徒は一人もいない。少なくとも僕たち一年四組のクラス内には。

人気ドラマの話題、ゲームの情報交換。豊富な話題に花を咲かせている。

普段なら僕もその話に参戦するのだが、今日はだけは勝手が違っていた。

校内での「シップ集めを得意とし、ニュースキャスターとの異名を持つ親友 三村光輝のもとへと向かったのだ。

「山倉、大丈夫なのか？」

「ああ、なんでもその後入院したらしいぞ」

「入院つて……そんなにひどかったのか？ どこの病院に入院してるんだよ…」

まるでお前のせいだと言わんばかりに、僕は光輝の襟首をつかんでいた。顔をわずかにゆがませながら、光輝は僕の手を振り払う。

「おいおい、落ち着けって。心配しなくても大丈夫さ。病院は吉沢総合病院だし、命に別状があるわけじゃない。右足の骨折だけさ」

「そつか……」

安堵の息が、僕の口から自然と漏れる。吉沢総合病院とは、同級生の吉沢果歩の両親が経営している病院で、部活動なので大怪我をした生徒が運ばれる病院だ。腕も確かにようだし、これで少しは安

心できる。

僕が黙々とうなずいてみせると、光輝はあきれたように鼻を鳴らし、僕の肩に手を回してグイッと引き寄せた。

そして、耳元で三村の声が鳴る。

「なあ、お見舞いに行くつもりだら？」

「はっ？」

思わず怪訝な顔つきになつた僕を三村は、意味不明な笑顔と共に背中で手を弾ませる。

「わかつてゐるつて。皆まで言ひなよ」

「いや、世まで言つとかじやなくてさ」

「心配するなつて。おれに任せとけばすべからくこへれ」

「三村、落ち着けつて」

だが、どうやら落ち着いていなかつたのは三村だけではなかつたようだ。

「授業が始まつてゐるのに、いい度胸だな？ 三村に鷹野」

がつちつとつかんだ両手に力が込められ、骨のきしむ嫌な音を発する。

苦痛で顔をゆがめる僕らに、笑顔を送つてきたのは、国語の教師である権田原先生だった。どうやら授業開始のチャイムを聞き逃したらしい。

由いＴシャツにジャージという、教師だからこそ許されるゆるい格好は、いつもとなら変わらない姿だ。

あだ名は消防訓練 略して消訓だ。なぜそんなあだ名がついたかといふと……。

「たるんどる。一人ともバケツを持って廊下に立つてー！」

これだ。いまどきバケツに水を入れて持つ罰なんて、漫画の中ですらみかけない。

事実は小説よりも奇なりといつが、この罰はある意味古すぎて新しい気がする。

「たくつ、お前のせいだぞ、三村」

両手に水のたっぷり入ったバケツを持ち、チラツと三村を一瞥する。そんな僕の思いをよそに三村は、

「よしよし、まずはお見舞いの品だよな。定番となると花束だけど、菊の花はダメなんだよな……」

一人でつぶやき続ける三村を横に、僕は天を仰ぐしかなかつた。

一日の授業が終わり放課になると、三十分かけて僕は吉沢総合病院に来ていた。建物自体は三階建てだが、横に長く広がっているため、かなりの大きさだ。

田の前にそびえたつ、吉沢総合病院の存在に、僕は小さくため息をついた。

意を決していたというよりも、気がついたらここに居たと言つたほうが正しいかもしない。

「それじゃあな鷹野。ついでに告白も済ませとけよー。」

「人事だと思つて、よく言つよ」

「なに言つてんだよ信也。ここでの告白は必然だろ」

「分かった。じゃあついでに吉沢さんの親父さんに、三村の気持ちを……」

そこまで言つた時点では、三村が僕の口を塞ぐ。三村の好きな女性は吉沢果歩なのだ。

「ぼうはひはは？」

口をふさがれたまま『どうかしたか？』と三村に尋ねる。三村は手を放すと、なだめるように両手を下に向けて上下させた。

「悪かつた。ブレイクブレイク、ここは穢便に話を進めようじゃないか」

「僕はいつだって穢便だよ」

微笑んで見せると、それ以上三村は何も言わなかつた。代わりに先ほど花屋で買った、抱えるほど大きなスミレの花束を僕に渡す。

「まあ、告白は好きにしろ。それよりも元氣づけてやるほうが先だしな」

「ああ、頑張つてみるよ」

覚悟を決めた僕は三村とその場で別れ、スミレの花束を抱えて病院へと入っていく。

いかにも清楚といった白を基調とした受付を無視してエレベーターヘと向かう。三村の情報によると、山倉の病室は三六号室らしい。

何故そこまで知っているのか謎だったが、言われた通りに三六号室へと向かつた。

途中で幾人かの看護婦や患者とすれ違つたが、ほぼ全員が僕というよりも僕が抱えている花束を凝視していく。

わずかに頬を染めながら、僕はめげずに廊下を進んでいった。

三六号室の前で表札を確認すると、間違いなく山倉優美と書いてある。

三村の情報の正確さに半ばあきれつつも、すぐさま頭の中を切り替えて深呼吸をする。

意を決した僕は、扉を拳で一回叩いた。

10月24日(2)

「……だれ？」

中から聞こえてきたのは、間違いなく山倉の声だった。だが、いつもの元気な声ではなく、むしろ無理やり出したといった感じがした。

「あ、あの、同じクラスの鷹野だけ……」

「鷹野君？ ちょ、ちょっと待つてね！」

少しの間が空き、辺りがシーンと静まり返る。手に持っていたスマートフォンを抱えなおしていると、

「どうぞおー！」

中からうつむいて変わった声が聞こえてきた。今度こそ山倉特有の元気な声だ。

ゆっくりと扉を開けて、中へと入る。室内はあまり広くなく、部屋の半分をベッドが支配していた。他には小型テレビと丸椅子が二脚、それに加えて小さな棚しかない。

「やつほー、いらつしゃーい！」

ベッドの上で寝そべつたまま、山倉は両手を僕に振ってきた。吊られた右足にはめられたギブスが痛々しい。

いつもは背中まで流れる黒髪も、いまは邪魔になるのか頭の後ろでまとめられている。

着ている水色のパジャマは廊下ですれ違った患者も着ていたので、病院から配布されたものだらう。

「これ、お見舞いの花」

「わああ！ こんな大きな花束初めて！ ありがとう鷹野君ー。」

頭を下げて、ワインをたしなむように香りを堪能する。その一連の流れの動作も、胸中が痺れるほど愛くるしかつた。

「それにしても、わたしの好きな花がスマートフォンだつて、よく知つてたね？」

「あ、ああ、うん、まあね？」

実を言つと、スミレを選んだのは三村だった。多分といつか絶対に、三村は山倉の好きな花を知つていて選んだのだろう。

花束を棚の上に置いて、微笑む山倉。小さく鼻をすすつてから、丸椅子を指差した。

「座つたら？」

「あ、うん……」

一人きりの状況に手を震わせながら、緑色の丸椅子を持つてきて座る。

どこか目を潤ませて、いるような山倉に氣おそれ、部屋の空気がわずかに重かつた。

「それで、具合はどうなの？」

横目で山倉の右足を確認しながら告げる。

点滴をしているわけでもなく骨折だけ。入院しなければならない要素はどこにも見当たらなかつた。

「うん、大丈夫だよ。検査のためにって一日だけ入院したの。だから明日には退院だよ」

「あ、そうだつたんだ」

「クラスのみんなにも、心配かけちゃつたかな？」

返答の代わりに、僕は微笑んでみせた。肯定しても否定しても、

山倉にとつては気分のいいものではないだろう。

「骨折は？ひどいの？」

「そうでもないよ。複雑骨折ってわけでもないし。でも、修学旅行までには治らないだろうなあ」

「それはさすがに無理だろうね……」

僕が告げると、山倉は大袈裟にがっくりとうなだれていた。

修学旅行は来週の月曜日から水曜日にかけて行われる。それを考えればさすがに無理としか言いようがなかつた。

「でも、明日で退院なら修学旅行に行くことはできるじゃないか」

「そうだよね。もうすぐ誕生日もくるし、骨折なんかでぐずぐずし

てられないって」

山倉の誕生日は三村の情報によると、十月二十八日らしい。来週の火曜日 つまり修学旅行中に山倉は誕生日を迎える。

「でも周りの人には迷惑かけちゃうかな？」

「大丈夫だよ。そんなことでいちいち田へじら立てる、心の狭い奴なんていないや」

バクバクと鳴り響く心音を聞きながら、平静を装いつつ元気づける。

それが功を奏したのか、山倉は満面の笑みで僕に頭を下げる。

「うん、そうだね！ ありがとう鷹野君。少し落ち着いたよ」

落ち着いた？

今のは心配をかけるかけないのはなしであつて、落ち着く落ち着かないの話ではない。

なんでもない言葉ではあるが、それをきっかけに全てのロジックが自然と組み合わさつていった。

山倉「うしくない声、鼻を小さくする、目を潤ませる、そして落ち着く」。

それらが共通する行為として思い浮かぶのは、涙を流す つまり泣くこと。

僕が来る前から、山倉は泣いていた。原因は分からないが、最愛の人が悲しむ姿など見てはいられない。

「あの方、山倉」

「んっ？」

山倉の唇が震えている。いつも潤んでいる唇も、いまは乾ききつていた。

思い切って山倉の悩みを聞いたかった。助けになりたかった。だが、僕の口から出たのは陳腐な否定だけだった。

「いや、なんでもないよ……」

結局なにもいえない自分の弱さに、ほとほと泣きたくなる。

それでも、山倉の心の傷をえぐるような事態を考えれば、ましなの

かもしだれない。

「ところどさ、鷹野君」

「んつ、なに？」

思考をいつたん打ち切り、山倉との会話へと切り替える。  
「どうして鷹野君がお見舞いに来るの？ クラスの代表とかそういうやつ？」

「ハハ、確かに普段は特に仲がいいわけじゃないもんね」「いや、そういうつもりじゃなくてさ。どうしてのかなって、單純に好奇心だよ」

「そつか。でもクラスメイトが入院したんだから、お見舞いぐらい当前じやないかな？」

瞬時に建て前を築き上げつつ、山倉へと答える。もちろん平静を装いながらだ。

「でも、他にはだれも来なかつたよ？」

「みんな部活とかで忙しかつたんだよ」

「じゃあ鷹野君は暇だつたんだ」

「まあね」

「そつか……」

山倉は僕から視線を外すと、窓の外へと顔を向けた。僕もそれに続く。

外は夕暮れ時で、ひつじ雲による暗くも鮮やかな色彩が、空を覆いつくしていた。

ふと、山倉に視線を戻す。山倉はまだ窓の外を見つめていた。顔に赤い日差しを浴び、瞳が輝いている。

物悲しさだけを浮かばせて、山倉はきつく口を塞いでいた。

そこで僕はようやく失言に気がついた。暇だから来たなどと言えば、暇つぶしだと思われてもおかしくない。

「あの、山倉……」

「ん、なあに？」

声に反応した山倉は、再び笑顔へと戻っていた。

人前では笑顔を造り、表向きだけ元気に振るまつ。本当は泣きたいのにもかかわらず。

そんな山倉の悲しみが、自分の悲しみのようじて、強く胸を締め付けられる。

目の前の愛しい山倉を、悲しみから開放させたかった。

「本当は、違うんだ」

「なにが？」

「ここに来た理由さ。暇つぶしなんかで来たんじゃない。それにクラスマートだから来たわけでもない」

「どうしたの？ 急にまじめな顔になつて」

しばらくの沈黙の後、意を決した僕は告白した。

「僕は、山倉が好きなんだ」

「……えっ？」

「だから、今日は僕が個人的にお見舞いに来たんだ。理由は山倉が好きだから。山倉のことのが心配でたまらなかつたから」

山倉はうつむき、顔を真っ赤に染めた。両手をもじもじ動かしながら、照れくさそうにしている。

「わ、わたしのこと……が？」

無言で頷く。すると山倉は僕に向かつて頭を下げてきた。

「ありがとう。気持ちはとても嬉しいよ。でも、他にもいい人はいっぱいいるよ？ わたしなんか体力だけの女だし。だから……」

「体力だけの女なんかじゃない。山倉は素敵な女性だよ」

「だ、だって」

「一年生の頃から山倉を、ずっと好きだつたんだ。この気持ち、簡単には変わらないよ」

しばらくしてから、山倉は視線だけを上向かせた。

「でも、わたしは……」

「他に好きな人がいる？」

「いや、そういうわけじや……」

「おれのこと、嫌いかな？」

「そんなことない！ 今日も来ててくれて、すげく嬉しかったよ！」

「じゃあ、どうして？」

困った顔で、体を振るわせる。僕の告白はいたずらに、山倉を苦しめる結果になってしまったのかかもしれない。

「山倉、返事は急がなくていいよ」

「えつ？」

「今はゆっくり休んで、いつか結論が出たときにでも聞かせてくれればいいさ」

「でも……」

僕は立ち上ると、山倉に背を向けた。といつよりも、これ以上話していると涙腺がおかしくなりそうだった。

病室の扉へと近づき、ノブを握る。

そこで背後から声がかかった。

「待つて、いかないで！」

振り向くと、今にも泣きそうな顔で必死に腕を伸ばしてくる山倉がいた。

「鷹野君に聞きたい。わたしの一いつの質問に答えてほしいの」

僕は頷くと、元の椅子へと戻つていった。

山倉がゆっくりと、それでいて確かな口調で僕に尋ねてくる。

「じゃあ一つ目ね。わたしなんかのどこが好きなの？」

間髪いれずに、僕は答えていた。

「クラスの雰囲気を変える明るさと、困った人を放つておけない優しさ。それに不安や悩みを吹き飛ばすその笑顔かな？ 今までその笑顔に何度か助けられたんだ。苦しかったり、つらかつたり、悲しかったり、そんな時も山倉の笑顔で不思議と心が安らぎ、軽くなるんだ。きっとなんとかなる。頑張ろうって気持ちになれる」  
お世辞にも上手いとは言えないが、なんとか自分の感情を伝えようと努力する。

山倉は特になにも言わず、次の質問を発していた。

「じゃあ二つの質問。付き合つていいくことになつたとして、わた

し達はどう変わつていくの?」

またも間髪いれず答える。山倉の質問は僕の山倉を想ひ気持ちを伝えればいいだけだ。

「さつきも言った通り、悩みや悲しみに埋もれている時にはその笑顔で支えて欲しい」

「それをわたしに望むのね?」

「うん。だけど無理はしなくていいんだ。山倉以外にはできないし、一緒に笑つていけたらそれでいい」

褒め言葉がこそばゆいのか、山倉は頬を染めてかすかに口もとを緩めていた。

「束縛する気もないし、普段はいつもどおりでいいんだ」

「うん、分かった。それだけかな?」

問い合わせてくる山倉に、一呼吸ほどの間を空ける。小さいながらも力を込めた声が、僕の口から吐き出された。

「いや、もつと重要なことがある」

「もつと重要なこと……なに?」

怪訝な面持ちで首をかしげる山倉に、おもいきりてぶつかっていく。山倉を苦しみから解放せられるのは僕しかいない。そう言い聞かせながら。

「山倉を救いたい」

「えつ?」

「苦しんでいる山倉を、本当の山倉を救つてあげたい」

「べ、別に苦しんでなんかいないよ。いつも元気な優美ちゃんだもん」

両手の人差し指を頬にあて、にっこりと微笑む。あくまで元気な姿を演じようとする、いつもの山倉がそこにいた。その手をおもむろに掴み、僕は山倉を凝視した。突き刺すような眼差しを送られ、山倉の体が止まる。

「さつきまで、泣いてたでしょ?」

「な、なんのこと?」

「田を潤ませて、泣き出したいのを我慢してさ。強くて元気な自分を演じてない？」

「それは……」

顔を背ける山倉の素振りは、あきらかに僕の言葉を肯定していた。「僕の前では演じなくていいんだ。元気で明るくて優しい山倉は好きだけど、無理だけはして欲しくない。だれだって、つらい時や悲しい時はあるから」

無言のまま聞き入る山倉に、僕は続ける。

「泣きたい時には泣いて、笑いたい時に笑えばいい。飾つていない山倉の側にいてあげたい。それが山倉を救うことに繋がると考えるから」

「鷹野君……」

「間違つてるかな？」

「ううん、間違つてない。すげく、心に響いたよ」

頭を下げる山倉の田元から、我慢していたであろう一粒の涙がこぼれていった。

10月24日(3)

「鷹野君の言つ通り、さつきまで泣いてたの。わたしのお母さんね、来てくれてないんだよ？ ひどいでしょ……」

小さな声を絞り出して、山倉は独白を始めた。慌てる僕が慰めの言葉を探し当てる間にも、独白は進行していく。

「一日ぐらいの入院で、顔を出す必要なんてないって言つてわわたし、一人娘なんだよ？ もう少しどとぞ、大事にしてくれたつていいと思わない？」

「うん……」

山倉は僕の目を見ずに、淡々と思いを口にしていく。

「わたしのお母さんね、お金の亡者でね。会社ばかりで滅多に家にも帰つてこないの。なんでもお金お金。今日の入院費用だつて、お金はアンタが払いなさいよ！ だつて？ 信じられる？」

「でも、お金を稼いでいるのは山倉のためでもあるんじゃないかな？」「わたしの……ため？」

「そうだよ。お金がないと苦労するよ。うちも貧乏だわ……」

「お金で買える幸せなんていらない！」

冗談混じりの戯言を一喝され、僕はようやく自分の失言に気がついていた。

「お金なんて、最低限あればいいの！ 度を超えるお金なんて人の心を狂わせるだけ！ そのせいでお母さんは狂つた！ お父さんも、お父さんもそのせい……」

山倉の父親は、数年前に離婚したといつ話を聞いている。そして昨年、山倉の前で亡くなつたらしく。

がっくりと力尽きた山倉は、ベッドに体を預けていた。僕の全身を覆つていた後悔と懺悔が、否応にもその存在を増していく。

『山倉ごめん！ 僕が考えなしだった…』

頭の中で叫び続ける言葉も、口から発されなかつた。

しばらくして、山倉はベッドから起き上がる。流れる涙は量を増し、川を形成して流れていった。

「ごめん。わたしの家庭の事情なのに、鷹野君に怒鳴つてもしょうがないよね？」

僕は無意識の内に山倉を抱きしめていた。

「いいんだ。苦しみを吐き出してくれて、頼りにしてくれて嬉しいよ」

「うん、ありがとう。すこしく楽になつた」

僕と山倉は無言で抱き合つていた。震える山倉の体を確かに感じながら……。

山倉の震えが止まる。山倉が顔を上げると、すでに涙は止まっていた。

いつもと同じ笑顔。でも、どこか違う。

それは、とても満足しているといった、すがすがしいものだつた。「鷹野君、わたしなんか好きになつてくれてありがとうございます。わたしも、鷹野君なら自分を偽らず、本音で話せそうだよ」

山倉が手を伸ばし、優しく僕の手を握つてきた。自分の顔が、蛸のよう赤く変色していくのがわかる。

「本当のわたしに気がついてくれたのは、鷹野君が初めてだよ」「みんなだつて気がついてるさ」

「ううん、みんなは元気なわたししか知らないから、悩みなんてないと思つてる。だからこそ元気な自分を、演じなきやいけなかつたの」

「でも、もう演じる必要はないよ」

返事の代わりに、ギュッと手に力が込められた。それに応えてこちらも握り返す。

「改めてお願ひする。わたしとつき合つて。そして支えて。精一杯わたしも頑張る。だからいつも笑つていられるよう、ずっと一緒にいてね」

目に涙を浮かべつつ、山倉が告げる。

次の瞬間、そんな健気な彼女をもう一度抱き締めていた。

二度目の抱擁でも最初は体を震わせていたものの、今度はすぐに力を抜いて身を任せてくれた。

「もちろんさ。これからもずっと山倉を支えて、いつでも救つてあげるよ。もう一度と、ため息なんて吐かせはしない」

「うん、ありがとう。でも、もしかしたら鷹野君に……」

「えっ？」

「な、なんでもない。お願ひだから、助けてね」

「無理しないで、吐き出していいんだよ」

僕の提案に、小さく首を振る。まだ、すべては吐き出せないのかもしれない。

「大丈夫、本当に大したことじゃないから」

「そう？ だつたらいいけど……」

「それよりも鷹野君。明日休みだよね？」

話題を変えて、瞳を輝かせる。

「土曜日だからね。休みだよ」

「だつたらさ、迎えに来てくれない？ 好きな男の子が待つてくれるつていうシユチュエーションに憧れてたんだ！ ごめん、待つた？ いや、今来たところだよ……みたいなやつ」

「ハハハ……」

「ちょっと、何がおかしいの？」

抗議をしてから、ぷつくりと頬を膨らませる。笑いをこらえながら、僕は山倉の提案を了承していた。

「それじゃあ明日……午前十時ぐらいになるらしいから。それよりちょっと前までには来ててね！」

「僕のほうが遅れて来ちゃって、立場が逆になるつてのもあり？」

「なし！」

あつさりと却下され、一人で笑い飛ばす。僕はそのまま山倉に手を振り、病室をあとにした。

病院の廊下を歩いている間も、僕の胸は高鳴りっぱなしだった。

上がりっぱなしのテンションで、通り過ぎる人たちに元気よく挨拶していく。

病院から出ると、外はすでに薄暗くなりつつあった。楽しい時間とこののは、どうしてこうも過ぎるのが早いのだろう。

「よし、どうだつた？」

どこで待つていたのか三村が僕のそばへと駆け寄つてくる。

「三村、わざわざ待つてくれたのか？」

「そりや、たきつけたものとしての責任もあるからな。で？」心の底から湧き上がる笑いを、抑えることができなかつた。三村の肩をバンバンと叩いた後に、グッと引き寄せる。

「サンキュー、三村」

「おおっ！？　まじかよ！？」

「ええ、本当に！？　優美がオッケーだつて言つたの！？」

いつの間にかそばにいたのは、花の入つた籠を持つた吉沢果歩だつた。きょとんとしている僕に、三村が説明してくれる。

「クラスの代表で、お見舞いに来たんだつてさ。感謝しろよ？　信也がいるからつて、少し待つてもらつてたんだからな」

「そうだつたのか、ありがとう吉沢」

「つうん、それは別にいいんだけどさ。でも驚いたなあ……優美の心を開かせるなんて」

吉沢は感心しながら、僕の全身をくまなく見つめる。

「頼りがいのある男とは思えないけどなあ」

「ほつとけ！」

「フフ、でも優美が認めたんだから、きっと人の心が分かる素敵な人なんだろうね。わたしからもよろしくお願ひするよ。優美のこと守つてあげてね？」

言いながら吉沢は病院へと入つていった。

「よかつたな、信也」

僕の髪の毛を、ぐしゃぐしゃにかき混ぜつつ、三村からの祝福の嵐を受ける。

「これで安心しておれも吉沢にアタックできるってわけだ」  
笑いとばす三村に、ふとした疑問　といつよりも確信だ　が

浮かぶ。

「なあ、三村

「ん？」

「僕を待つてたのって、責任とかじゃなくて吉沢がいたからだろ？」

やはり図星だったようで、三村の笑いが止まる。

「ま、まあそとも言つな。結果オーライつてやつを

「お前なあ……」

「いいじゃないか！　おれも吉沢にアタックしてオッケーもらつた  
暁には、ダブルデートといこうぜ！」

「じゃあ三村がフ卜れたら、僕と山倉のデートを見せびらかせるよ  
「くそつ、余裕がありやがる……」

顔をしかめた三村の肩を抱き寄せ、僕たちは病院に背を向けた。  
明日の一大イベントを胸に、僕の足取りはかろやかだった。

10月25日(一)

十月二十五日 土曜日

僕は家を勢いよく飛び出すと、病院に向けて一直線に進んだ。晴れ渡った透き通る青は、退院日和と言つていいだろ。

学校からの道のりとは違ひ、ここから吉沢総合病院まではそう遠くない。家から数分のところにある商店街を抜けば、すぐ正面に吉沢総合病院が見えてくる。

商店街では、活氣ある声が方々から聞こえてきていた。それらの声がすべて、僕を応援する声に聞こえてくるから不思議だ。

商店街を抜けると、十字路の信号へとたどりついた。それを渡れば吉沢総合病院はすぐそこだ。

不運にも歩行者信号は、赤色を点灯していた。

あせる気持ちをおさえ、僕は信号が青になるのを待つた。と、道路を挟んだ向こう側に、話に夢中になつていてる主婦が一人、目に入った。その一人の足元で、少女がフラフラしている。そのフラフラは少しづつ横断歩道へと近づいていき、道路へと飛び出していた。

『危ない！』

声には出ず、頭の中で叫ぶ　が、そそぐちょうど歩行者信号が青に変わっていた。

「ふう、やれやれ」

冷や汗が沸き起つるのを肌で感じながら、僕は横断歩道を渡り始めた。山倉との再会を前に、交通事故など見たくはない。

だが、一安心した僕の期待を裏切るかのように、再び魔の手が子どもへと襲い掛かろうとしていた。

少女の様子を伺いながら、横断歩道を渡りつと一步踏み出す。

その視線の隅に、向こうの車線を走る大型トラックが入ってきた。本来ならよくある光景で、問題があるはずもない。

だが、その大型トラックは信号が赤であるにもかかわらず、止まる気配がなかつた。

もちろん少女はその光景に気がつかず、歩道に戻ろうともしない。

「危ない！」

今度は頭の中ではなく、口から発される。

即座にその場から駆け出すと、道路上で少女を思い切り突き飛ばした。

道路の外に飛ばされた少女が立ち話をしていた二人の主婦の横に倒れる。そこで初めて二人は異変に気がついていた。

ほつとしたのもつかの間、得も知れない衝撃が僕を弾き飛ばして

いた。細い針金のように、あっさりと体がひしやげる。

そのまま体が重力に反して浮かび上がり、空中で激しく回転していく。

無重力を体験し、目の前はビデオのスローを思わせる残像とぶれ。

そのまま僕は、地面へと叩きつけられていた。

頭から落下したのか、割れるような激痛が頭部を執拗に襲撃してくる。

次に腕、最後に足へとその激痛は移っていき、最終的には痛みが全身を覆つていった。

うめき声をあげるだけでも精一杯で、立ち上がるなどもつてのほかだ。痙攣を繰り返す体に苛立ちが溢れかえる。

最初の衝撃で思わず閉じてしまつた目を開くと、視界の上の方に、トマトケチャップを思わせる液体が、心臓の鼓動に合わせてドクドクと流れだしていた。

「だ、大丈夫！？」しつかりして！

「大丈夫なわけ、ないだろ？」

「痛いよお、うわあん！」

「僕だつて痛いよ。

「早く救急車を、早く！」

「そうだよ、早くしてくれ。山倉が僕を待つてゐんだ。

頭の中で本日最大のイベントが幾度と泣く回転する。

僕は懸命に全身へ命令を送った。山倉を迎えるためだけに。だが、その命令が細部に達しても、実行に移されるだけの余力は残されていなかつた。

「やま、く……」

懸命に愛しの女性を呼んだ。だが、それが声になつていてかどうかさえ、今の僕には判断できなかつた。

近いはずなのに、遠くから人々のどよめきと、救急車のサイレンが聞こえてくる。

そのざわめきはあるで、聖母の歌う子守唄のようだつた。

襲つてくる氣だるい眠気が妙に心地よく、視界がぐにゅりと歪んでいく。

僕はそのまま静かに目を閉じた。睡魔の甘美な誘いに応じるようにな。

10月25日(2)

気がつくと、僕は薄暗い一室に突っ立っていた。部屋の中はひんやり四本、すべてに火が灯っている。

そのろうそくに囲まれるように、ベッドが一つ、その上にはシーツをかぶせられた物体が横たわっている。

近づいてみると、それは人間の形をしているようだ。どうやらここは死んだ人間が連れてこられる、靈安室らしい。

その人物は顔に布がかけられているため、だれかは分からなかつた。だが、死んでいるのは明らかだろう。

それよりも重要なのは、僕がどうしてここにいるかということだ。

「もしかして、山倉の病室と間違えた？」

もしそうだとしたら、恥ずかしいとかいうレベルを富士山一つ分超えている。

頬が赤くなつていいくのを自ら感じながら、僕は廊下へとつながる扉へと向かった。

いつたん立ち止まり、背後の死体へとお辞儀をする。

「無事、成仏できるといいですね」

死体は何も答えない。当然だ。それでも僕は、満足感らしきものを得ていた。

苦笑しながら、扉のノブをつかむ。今の時間はわからないが、山倉が僕を待っているのは間違いないだろう。

だが、僕の思惑を裏切る事態が起こっていた。

掘んだはずのノブが、するりと手から逃れしていく。

「あれ、おかしいな？」

ぼやきながら、何度もノブを握り直しするも、結果は変わらなかつた。

正確には、手がノブを貫通するという現象が起こっているようだ。

「なんなんだよ、まったく」

仕方なく扉自体を押してあけようとする。

だが、扉に触れた感触はいつさいなく、手が扉へとめり込んでいったのだ。

「うああ！」

慌てて手を引っ込める。手に異常は見当たらないし、当然扉に穴が開いているわけでもない。

今度はゆっくりと感触を確認しながら、両手で扉を押す。結果はかわらず、扉に手はめり込むだけだ。

そして、それらの現象が、一つの仮定を生み出す。

「そんな……まさか」

頭を思い切り左右に振り、浮かび上がった結論を消去しようと試みた。

だが、記憶というテープに録音された仮定は、脳内で何度も再生を繰り返す。僕の意思などお構いなしだ。

僕はおもむろに、背後を振り向いた。相変わらず永眠している死体は一言もしゃべらない。

ただその死体の正体を、僕は分かりかけていた。

「う、嘘だ！」

思わず僕が叫んでしまった瞬間に、背後の扉が思い切り開いた。廊下の光が部屋の中へと差し込み、死体がスポットライトを当てられたかのように照らされる。

扉のほうへと改めて振り向くと、そこには最愛の女性が呆然と立ち尽くしていた。

「鷹野君……」

薄暗い中でも分かるような、血の氣の引いた顔色でつぶやく。

骨折した足を引きずり、スポットライトの中心へと歩み寄る。すぐそばにいる僕の横を通り過ぎて。

「山倉！ 僕はここだ！」

「鷹野君、起きてよ、返事してよ！」

そのまま死体へと寄り添い、耳をつんざく絶叫を放つ山倉。

その拍子に、顔にかかつっていた布が地面へと落ちた。

そこには予想通りの顔があつた。毎朝洗面台の鏡に映る見慣れた顔だ。

「支えてくれるって約束したのに！　どうしてこうなるのよ！　鷹野君つてば！」

山倉へと近づき、肩へと手を乗せられなかつた。やはり僕の手は山倉の肩をすり抜け、体へとめり込んでいく。

「わたしのせいだ。わたしが迎えに来てなんて言つたから！　わたしがわがまま言つたから鷹野君が！」

「違う！　それは違うよ！」

すぐさま否定するも、その言葉も届かないようで、まったく反応を示さなかつた。

山倉が僕の名前を呼ぶたびに、容赦なく体が締め付けられた。手先から全身へと、痺れが伝わっていく。

「おい、起きろよ、起きろつてば！」

僕は横たわつた僕へと近づき、その体を殴ろうとした。結果は分かつていたとしても、やらずにはいられなかつた。

淡々と漏れていく吐息が、少しづつスピードを増していく。ひたすらに泣き続ける山倉のそばで、僕はなすすべもなく膝をついた　ちょうどその時だつた。

「そろそろ自分が死んだつて、認めてくれたのかしら？」

背後から聞こえた声に振り向くと、全身を覆う白いローブに、緑色の腕章を着けた女性が、にっこりと微笑んでいた。

美人というよりも、幼い無邪気さの感じられる。歳は十代後半から二十代前半ぐらいで、そばかすが目に付く女性だ。

10月25日(3)

「諦めが悪いといつて、鈍感といつて……」

「だ、誰だ、あんた?」

「誰? 相手の名前を知りたい時は、まず自分から名乗るべきじゃないの?」

動搖している僕とは反対に冷静沈着な女性は、呆れたようすで前髪を軽くかきあげる。

確かに彼女の言うとおりだ。

「う、ごめん。僕は……」

言われたとおりに自分の名前を告げようとすると、その前に彼女が、

「鷹野信也君……でしょ?」

僕の名前を造作もなく当てた。目を丸くしているのが自分でわかる。その女性は顔全体で微笑むと、握手を求めてきた。

「わたしはミリア=ミリス。天界と地界を結ぶ中界で、案内人の仕事をやっているわ」

「中界? 案内人? なんだよそれ……」

ミリアの言つてることは、僕の頭では簡単には理解できなかつた。ミリアもそう判断したのか、更なる説明をしてくれる。

「天界と地界は、生きている人々 わたしたちは現界人って呼んでるけどね その現界人が言つてる天国と地獄みたいなもの。中界つてのはエンマ様が、天界と地界の仲介をするとこつてわけ。あ、別にダシャレジやないから」

ミリアはケラケラと笑つてゐるが、微笑み返す余裕などまったくなかつた。

「ほ、僕は死んでいない」

ミリアの断言を否定して、叫ぶ。今度はミリアが目を丸くする番だつた。

「あれ？ まだ認めてないの？」

「そうだ、こんな馬鹿げた話、あるはずがない。天界と地界にエンマ様のいる中界。迎えに来る使者だつて？ ありえないよー。」

「あのねえ」

呆れて物も言えないのか、頭をポリポリと搔くミコアを無視し、続ける。

「そうだ、これは夢だ。よくある夢だよ」

「よくはないと思うけど」

「まだ十代なんだぜ？ 死とは一番かけ離れた場所にいるんだぞ」

「一番かけ離れてるのは、十代よりも生まれたばかりの赤子じゃな

い」

「うるさいな、さつきからしつこいぞ。夢の人物なら、ちょっとは気を使えよ」

「んじや、気を使つて一言いいかしら？」

一度軽く咳払いをし、ミリアは、

「どんな事象でも起これば現実、そして現実とは紛れもない真実なの。分かる？」

腕を組みつつ、頷きながらサラリと告げた。

僕にとつて初めての経験である死も、ミリアにとつては日常茶飯事なのだろう。

「つてことは、やつぱり僕は……」

「そう、死んだのよ」

ミリアは僕の心情を意に介さず、端的に述べた。思わず泣きたくなつてくる。

「さつ、行きましょ？ わたしだつて他に仕事があるんだから」  
僕の手を無造作につかむと、ミリアは引っ張った。そのまままるすると引きずられながらも、我に返つたと同時に振り払う。

「なに、どうしたの？ もしかして地界に行くのが怖い？ 大丈夫だつて！ 信也君はいい子だから、きっと天界に行けるからさ」

「そうじやない。僕は行かないんだ」

「はあつ？」

呆れ果てた顔で、見下してくるミコア。それでも、断固として反論すべき場面だと信じた。

「僕は山倉を支えるって約束したんだ！」

「ふーん……じゃあ聞くけどさ、死んだ信也君が、どうやって優美ちゃんを支えるって言うの？」

「そ、それは……」

「確かに死んだ人を心に抱き続けて、それを支えに生きている人もいるらしいわ。でも、それは別に死んだ人が何かしてあげてるわけじゃない。生きている人が自分のために、自分で心にとどめているだけ」

「だ、だけど！」

「だけどもへつたれもないわ。あなたは死んでしまったから、優美ちゃんには触れないし、声も聞こえない。まあ、顔を見れば分かるけど、そこに横たわっている死体が信也君だってことは間違いないから」

「嘘だ！ そんなこと……」

「嘘？ どこからそんな結論が出てくるのかしら。実際に信也君は何も触れない。声も届いていない。全部わたしの言った通りになつてるじゃない。それなのに、わたしの説明が嘘だつて言えるの？」

我慢の限界だった。僕の涙が頬を伝つて床へと落下していく。

「うああああ！」

気がつくと僕は、部屋を振るわせるほどの声を発していた。涙をこらえようとするも、まったく止まりそうにない。

「さつさといくわよ！ いい、もう一度言うわ信也君。あなたは死んだの！ もうあなたが優美ちゃんにしてあげられることは、何もないのよ！」

脳を直接殴られたかのような、するどい衝撃が走った。

『僕にはもう、なにもできないんだ……』

脳内で繰り返される言葉と共に、僕の体は脱力感で包まれていっ

た。

10月25日(4)

ミリアに引っ張られながら、僕にできること、僕が最後にできること。それを必死に考えていた。

「ミリアさん……」

「ミリアでいいわよ。なに?」

「じゃあミリア。少しだけ、時間をくれないかな?」

最後にできること。それは最後のお別れだ。なにもできなかつた僕を想つて泣いてくれる山倉への、最後の言葉だ。

だが、ミリアはなにを思つたのか、突然大声で笑い始めていた。頭の中で何かが弾けたように血が上り、ミリアの襟元を無造作につかむ。

「な、何がおかしい!」

いらだつ僕の神経を、さらに逆撫でるよう、ミリアは半笑いで問い合わせた。

「おかしいわよ。死んだ人つてみんな同じこと言つんだもん。死んだ人間が喋つても、現界人には聞こえないんだよ? それなのにお別れだなんて 意味のない行為だよ」

「やつてみないと、分からなさいさ」

「正氣なの?」

「もちろん」

反論する気も失せたのか、ミリアは嘆息しつつ片手を広げ、

「五分間だけだからね!」

とだけ言つて、部屋の隅へと移動する。そのままミリアの消えてしまつた。

「ありがとうミリア。恩にきるよ」

ミリアを見送り、後ろを振り向く。未だに山倉は自分を責め続け、涙を流していた。

「ごめん山倉。約束、守れなかつたよ」

山倉の背後から、ぼそりとつぶやく。ミリアの言つたとおり、山倉には聞こえていないうだ。

それでも僕は続けた。続けずにはいられなかつた。

「支えてあげられなかつた。もう山倉に触ることすらできない。だけど、山倉を想う気持ちは本物だつたんだ。山倉を恨んだりなんかしないから、自分を責めないでほしい」

瞳から、さらなる涙がこぼれていぐ。ふがいない自分がやるせなかつた。

「死んでも、山倉を見守つているから。だから、もつ泣かないで……」

刹那、山倉が背後を振り向いていた。

「山倉！」

最後の言葉が奇跡を起こした そんな予感がする。

だが、あくまで予感は予感でしかなかつたようだ。

山倉は確かに僕の声に合わせて振り向いたが、焦点は僕を越えた、背後へと合わさっている。

山倉の視線の先へと振り返ると、そこには黒い革製のスーツに身を包み、ヘルメットを持った女性が立つていた。僕の母だ。

十代の頃に僕を生むも、父は僕がまだ小さい頃に亡くなつてしまつた。その後は女手一人で僕を育ててくれた、男勝りで大雑把で、いつも元気一杯の母。

そんな母親が涙を流すのを見るのは、今日が初めてだつた。

「信也……なんでこんなところで寝てるんだよ……」

フランフランと部屋の中に入ってきた母さんの体は、あっさりと僕の体をすり抜けた。そのまま山倉の隣へと立ち、

「ふざけるなよ信也。わたしを……わたしを一人にするつもりか！怒鳴りながら死体を何度も殴打する、何度も、何度も。

しばらくすると力尽きたのか、山倉の隣へと崩れ落ちた。顔をうつむけて、むせび泣く姿にも、なにもできない自分が腹立たしくてしかたがなかつた。

一番の親不孝者とは、親よりも先に死んでしまうことかもしれない  
そんな想いが頭をよぎる。

「母さん、ごめんなさい。ずっと大事に育てて、側にいてくれたのに、肝心なときに役に立たない僕を許してください……」

それが僕の最後の懺悔だつた。それ以上、何も言えなかつた。二人に背を向けて、涙を流し続けるのが精一杯だつた。

「お別れは済んだかしら？」

前方から、優しげな声がかかる。につこりと微笑んでいるミリアに、すすり泣きを抑えて頷いた。

10月25日(5)

「優美ちゃんか。いい子そうだね

「いい子そうじやなくて、いい子なんだよ。支えることのできない僕のために、こんなに涙を流してくれてる。苦しいけど、少し嬉しい気もするよ。おかしいかな？」

「さあ？ わたしには分からぬいし、関係のないことだわ」

友好的な雰囲気を、一瞬にして殺伐へと変遷させる。ムツとした

僕がミリアに一言、物申そうとした。その時だつた。

「まつ、いいじゃないの。すぐにまた一緒になれるんだからさー！」

僕の肩を叩きながら、平然と述べたミリアは、自分の失言に気がついていなかつた。僕の怒りがミリアへと集中していたからこそ、違和感を感じとれた。

もしも未練がましく山倉や母さんに氣を取られていたら、きっと聞き逃していただけない。

「すぐ？ すぐってどういう意味だよ？」

「そりゃあ……やっぱー！」

口を泳がせながら、自ら口を塞いでいる。

僕の質問 違和感は、やはり正しいものだったと確信した瞬間だつた。

「つ、つまりね、天界にいれば楽しすぎて早く時間が流れるから、一瞬で優美ちゃんと一緒になれるって意味よ。そういう、そういう意味……」

尻すぼみに小さくなつていつた声のせいで、最後のほうはなにを言つてるか分からなかつた。

だが、確かにのは一つ、ミニアは僕と、まつたく口を併せようとしなかつた。嘘をつくのが相当下手なタイプのようだ。

「それで？ 本当はどういう意味なんだ？」

「や、やだなあ信也君、いま言つたばっかりじゃない。ひょっとして死んだショックでぼけちゃつた?」

「フフフフフ……」

「ハハハハハ……」

乾いた笑いが二人の口から漏れる。背後では一人が泣いているため、笑い声と泣き声が交差するという奇妙な空間が出来上がつていた。

だが、それも束の間だった。とつさにミリアの襟首をつかみ、締め上げる。

「どうにうことだ! すぐつてどうにう意味だよ!」

「ちょつ、くるし、信也君!」

ミリアが涙を流しながら、僕の手を振り払おうと暴れ始める。それでも僕は力を緩めなかつた。

「だったら説明しろ! 何がすぐなのか、山倉がどうなるのかきちんと説明しろ!」

「説明、する、するから! 離してよ!」

言質を取つた僕は、そこで手を離した。紅潮した顔を前後に揺らし、何度も咳き込むミリア。

少し悪い気もするが、さつきの言葉の説明の方が重要だつた。

「で、どういうことなんだ?」

「こ、こつちは死にかけたのよ! 自分の行為に対してもお詫びはないわけ! ?」

「死にかけたって、もう死んでるんじゃないのか?」

「わたしは元々天界で生まれたから、最初からこうなのよ! どつちにしたつて天界や地界の住人が死んだらそれこそ本当の消滅! 二度と笑つたり遊んだり、できなくなるんだからね!」

ブツブツ文句を言いながら、ミリアは僕から顔を背ける。

「悪かつたよ、謝るからさ。でもそれじゃあ落ち着けないんじゃ……」

「大丈夫よ、天界じや滅多に起こらないし、殺した方も消滅するん

……」

だからやー。」

ざまあみるどばかりに舌を出すミリア。

といふことは、もし今の行為でミリアが死んでいたら。背筋に寒気が走り思わず身震いすると、ミリアの機嫌は完全に直つたようだ。僕の反応を笑い飛ばし、腕を引っ張る。

「さつ、エンマ様の所へ行きましょ！」

「ちょっと待て」

僕はミリアの手を振りほどくと、その場に立ち止った。ミリアの笑みが引きつったものへと変わっていく。

「そ、そんなに甘くはないわよね……」

「その通りだ。さつ、分かりやすく説明してもらおうか？」腕を組みつつ返答を待つ。その場に座り込み、頭を押さえていた

ミリアも、とうとう観念したようだった。

「分かつた、分かつたわよ！ 教えればいいんじょーーー？」

「そう、教えればいい」

満面の笑みの僕とは対照的に、ミリアは暗く沈んだ表情で自分の失言を後悔しているようだ。

「んじゃ、行きましょうか？」

「だから、その手はくわな……」

「そうじやなくて、説明に最適な場所へと案内するのよ。百聞は一見にしかずって言うでしょ？」

「本当だろうね？」

「この可愛らしきミリアちゃんが、嘘なんてつくと思つ？」

ミリアはわざとりしく、につこりと微笑んでいた。

さつき誤魔化そうとしたのは嘘とは言わないのだろうか……そんな考えも頭をよぎったものの、黙っていた。これ以上余計な時間を費やしたくはない。

10月25日(6)

「んじゃ、じゅぢよ

僕の手をつかんで進もうとするミリアを、軽く力を入れて振りほどく。

「小ちな子じもじやないんだからや。引つ張らなくてもついていくよ」

「そう、じゃあついてきてね」

ミリアはそのまま先ほどと同じように壁をすり抜けていってしまった。死んだ人間にしかできない芸当だらう。

「そっか、だからさつき手が扉をすり抜けたんだ……」

一人で納得しつつ、一步を踏み出そうとする。その一瞬に、山倉と母さんの姿が視線の隅を横切った。

振り返ると、山倉と母さんは並んだまま体を小さく震わせていた。涙はすでに枯れてしまったのか、瞳を拭うしぐさはない。

未練を振り切るよう視界から一人を外し、ミリアの後を追つて壁への一步を踏み出す。

すると、なぜか無警戒の頭に、鈍痛が響いていた。壁へと衝突したのと同じ感覚だ。

「あ、あれ？ どうこうことだ？」

頭を抑えて目の前の壁を凝視していると、同じように頭を抑えてミリアが出てくる。

「もうつ、どうしてついてこないのよー。迷子になられたら困るんだから、さつさと来てよね！」

どうやらぶつかったのは壁ではなく、よつすを向いに来たミリアだったらしい。

「死んでいる人同士はぶつかるってわけか」

再び腕を掴み引っ張るミリアに、今度はおとなしく引っ張られた。

壁から病院の廊下へと出ると、否応なしに薬品の匂いが鼻をくす

ぐつてくる。

だれも見えないのをいいことに、ミリ亞は足早に廊下を進んでいった。それも病院の出口とは逆方向　屋上へと向かっている。

「ミリ亞、どこに行くんだ？」

「中界だつていつてるじゃない。何を聞いてるんだか……」

ブツブツとぼやきつつ、ミリ亞が僕を引っ張っていく。どうやらぼやくところ行為はミリ亞の癖のようだ。

「さつ、ここから行くからね」

屋上に出てきたミリ亞が指差す。その先には、白くぼやけぎみの階段が空へと向かつてのびていた。

どこまでも続く虹色の階段の終点は、肉眼では確認できない。

「これを上つていいくのか？」

「大丈夫よ。現界でいうエスカレーターみたいなものだから。さつ、行くわよ」

立ち上る階段の一級目へと足を乗せると、ミリ亞の言つたとおりに、歩かずとも上方へと連れて行かれる。

少しづつ小さくなつていく町並み。地平線に日は沈みかけ、真っ赤に染まつた空が哀愁を誘う。

こんな高い場所から生まれ育つた町並みを見るのは初めてだった。同時に最後でもあるだろつ。

吉沢総合病院のすぐ隣にある駅からは、電車の走行音が聞こえてくる。

そそり立つ銭湯の煙突や、一年半ほど通い続けた高校など、思い出のある大きな建物を一つ一つ確認する。

そして最後に自分の家を網膜に焼き付けておいた。小さな家なのでほとんど見えなかつたが、緑色という特殊な屋根のおかげで、確認はできた。

瞳から、枯れたと思っていた涙がこぼれ落ちる。ミリアの言った通り、この街はもう僕の街ではない。あくまで過去の街だ。

そう考えただけで、急激に胸が苦しくなった。

「今まで、ありがとうございました」

温かく見守つてくれた人々、いつもそばにあつた街並みに、感謝の念を込めて頭を下げる。

「さてと、もういいかな？」

頭を上げると、背後からミリアが尋ねてきた。無言で頷くと、得意げに指を一本立てませる。

「それじゃあ今から天界と地界について説明するわね。地界の説明なんて信也君には不要だろ？ けど、一応ね」

僕の返事も聞かず、ミリアはなれた口調で説明を始める。どうやらこれも案内人としての仕事らしい。

「さつきも言つたけど、簡単に言うと天界と地界は現界人に天国とか地獄つて呼ばれてる場所ね。とりあえず殺人や銀行強盗でもしないかぎり、大抵は天界に行けるわ。天界での生活はまあ現界人の生活とかわらないかな？ 朝起きて、仕事に行って……」

「仕事って……死んでまで仕事しなきゃいけないのか？」

「死んでまでつて、信也君は仕事してるわけじゃないでしょ？」

ミリアにするどく指摘され、ウツと言葉が詰まる。確かに働いたことはないが、あまり働くという行為に好感を持つてないのも確かだ。

仕事で疲れたとぼやく母さんの姿は、もはや日常の風景として、脳裏にすり込まれてしまつていて。

「まつ、仕事をしなくとも大丈夫よ。最初はそう望む人がほとんどだしね。だけど考えてみなさいよ。目標もなく毎日ボーッと過ごすなんて退屈でしようがないと思わない？」

言われてみれば、確かにその通りかもしれない。仕事をしない一日というのは、学校に行かない一日と同じようなものだろう。たまにならそれも嬉しいが、毎日となればつまらなくなつてくる。「だから仕事つていつても暇つぶしみたいなものなの。心配しなくても大丈夫だつて！」

僕の背中に力いっぱい、平手打ちを浴びせた。痺れるような痛みが広がっていく。

「あと、天界の人間は将来的には生まれ変われるわ。いつになるかは分からぬけど、生まれ変わりたいという嘆願書を出せば、少しは早くなるらしいよ。もちろん、今までの記憶なんかは無くなるんだけどさ」

そこで一旦深呼吸をし、今までとは打つて変わって暗い声を出した。  
「問題は地界の方ね。悪い人と、あとは自殺した人かな？ エンマ様がよく言つてるんだけど 生きるための努力が報われず死んでしまう人もいるのに、自ら命を絶つなど言語道断 ってね。地界に落ちた人は鬼たちによつて半永久的に苦しめられるの。その方法は様々なんだけど、その苦しみから解放されるのは、鬼が勢い余つて殺してしまつた時だけだつて。怖いわよね！」

暗い声とはいえ、それを笑顔で説明するミリアの方が恐かった。  
「まつ、信也君は悪い子じやないみたいだから、天界に行けると思うけどね」

ミリアはケラケラと笑つているが、今の段階では天界や地界の様子よりも、山倉の未来に何が起くるかの方が気がかりだつた。  
話半分に適当に相槌を打つていると、ようやく階段の頂上が見え始めた。

「ついたついた。ここが中界です。ようこそ信也君！」

ようこそと言わても死後の世界なのだ。できれば歓迎されたくない。

10月25日(火)

愛想笑いを浮かべつつ、辺りを見回す。地面は生きている頃と変わらず、土の強い感触が靴のしたから伝わってくる。

「地面つて、雲じやないんだね」

僕がぼやくと、ミリアは半ば呆れつつ返答してきた。

「雲の上にあつたら、雲がないときには中界がないってことになるでしょ。ただ生きている人には見えないだけ」

言われて確かに納得する。

生きている人々にも見えるなら、とつゝの昔にワイドショーやスポーツ新聞を、大きくにぎわせているはずだ。

目の前には万里の長城を思わせる建物に、大きな赤い扉が造形されている。

扉の上の看板には『閻魔城 中界』と大きく書かれ、その横に小さく『日本支部』と書かれていた。迫力があるのかないのかよく分からぬ看板だ。

今のところ回りに人影は見当たらないが、ミリアの話から推測するに中界で働く人というのがどこかにいるはずだ。

そんな風に初めてみる死後の世界を観察していると、すぐ隣ではなぜかミリアが得意顔で胸を張っている。

「ここがエンマ様が働いている場所だよ。ここで天界行きか地界行きかを判定されるってわけ。それじゃあ、サッサとエンマ様に会つて天界へと行きましょうか！」

ズンズンと一人進んでいくミリアに、僕はついていかなかつた。怪訝な面持ちで振り返るミリア。

「どうしたの、早く行こうよ」

「ああ……つて言つとでも思つたの？」

冷ややかに告げると、ミリアは觀念したようだった。

「ちえつ、やつぱりダメか……」

「当たり前だよ」

「またもやミリアはブツブツ言いながら、正面の扉とは違つ方向へと歩き出した。

「それじゃあこっちに来て。わたし達の仕事場で話をするわ「仕事場なんて、僕が入り込んで大丈夫なのか？」

「それもそうね。んじゃこれをつけといて」

ミリアがローブのポケットから、緑色の腕章を取り出した。ミリアの左腕に着けられているものと同じものだ。

「これは中界で働く人の身分証明書みたいなものなの。色によってどの部署か区別が付くようになつてるわけ」

「これをつけておけば……」

「あなたも案内人として働いてると思つてくれるでしょうね。もつとも同じ部署で働いている人に見られたら危ないけど。とりあえず見習いだつて『こまかすしかないわね』

言いながら手渡された腕章を、服の上から着ける。はつきりいつて心細いことこの上ないが、ないよりはましだろう。

再び歩き出すミリアの後に、ひたすらについていくと、隅のほうに小さな　といつても、生きている人たちにとつては普通の大きさだ　黒い扉があつた。

扉には『関係者以外立ち入り禁止』という白地に赤い文字の看板が、敢然と張られていた。この先がミリアの仕事場なのだろう。

「じゃあ、行くわよ。下手な演技でバレないようね」

即座に脳裏に浮かんだのは、僕への弁解に失敗して、慌てふためくミリアの姿だった。

「それはこっちの台詞だよ」

僕のぼやきに頬を膨らませつつ、ミリアは扉のノブに手を掛けゆっくりと開けた。

「おいつ、資料が足りないぞ！」

「ビデオの編集作業、もつちよつと早くできないのか！」

「ちょっとだれか！　コピー用紙の買い出しに行ってきてよー！」

事務所に入ると大声が飛び交いながらも、赤、青、紫などの腕章をつけた人が、せつせと走り回っていた。

ミリアは天界の仕事は暇潰しのようなものだと言っていたが、ここに様子を見る限りでは、生きている人達よりも働いているような気がする。

「どうしたの？ ポケーツとつつ立つて。なんかあつた？」

「いや、忙しそうだなって思つて……」

僕にそう言われて、ミリアは辺りを見回す。

「そうちか？ いつもこんな感じだと思つけど……」

「どうやら天界の仕事も樂じやないらしい。」

「さつ、じつちよ」

言われるままに、仕事をしている人々の合間を縫つていくと、背後から声がかかった。

「おい、ミリア！」

目に見えてミリアの体が痙攣した。なんだか嫌な予感がする。背後から近寄ってきたのは、三十代前半ぐらいの男性だった。ミリアと同じ白いローブに緑色の腕章。どうやら仕事仲間らしい。「あ、力、カルバドスか」

「珍しいな。仕事が終わつてるのにまだいるなんて……」

「えつ、あつ、うん、ま、まあね」

やはりミリアは嘘をつくのが苦手らしい。この返答で、動搖しないことに気づかないほうがおかしいだろう。

カルバドスと呼ばれた男性もそう考えたらしく、首をかしげていた。そして僕の顔と腕につけた腕章を交互に確認する。

「ん？ だれだこいつ……案内人の腕章をつけてる割には見かけない顔だな」

「あ、この子はね、そのう……」

指先をクルクルと回転させながら、にっこりと微笑む。この光景は危険としか言いようがない。

「あ、あのですね」

一步踏み出しながら、口を挟む。カルバドスの注意が僕へと向けられた。

「僕は鷹野信也といつものです。このたび命を落としたため、こちらで案内人の仕事をすることになります。それで仕事をミリアさんに教わってたところなんです」

「なんだ、そうだったのか。そつならそつと早く言えよミリア」ミリアは頭を搔きながら、乾いた笑いを発している。これ以上なにも言いそうにないのが幸いだ。

「おれはミリアの同僚……つまり君とも同僚になるカルバドスってもんだ。まあこれからよろしく頼む」

「こちらこそ、若輩者ですがよろしくお願いいいたします」

「おお、礼儀正しい子じやないか。ミリア、しっかり仕事を教えてやれよ?」

ミリアの肩でカルバドスの手が弾み、そのまま豪快に笑いながら去つていった。

「ふう……」

額にかいていた汗を拭つて、ミリアを確認する。どうやら相当なピンチだつたらしく、がつくりとうなだれて霸氣がない。

「ミリア、大丈夫か?」

「なんとかね、相手がカルバドスで助かつたけど……とんだ貧乏くじだわ」

諦めたように首を左右にふり、ミリアはまた仕事場を進んでいった。

その後はなんとか知り合いに出会いに出会わず、目的地にたどり着いたようだった。

10月25日(8)

小むな一室へと入ると、ミリアは即座に鍵を閉めた。そして安堵の息を漏らす。

「さてと、適当に座つてて」

部屋の中央に置いてあるソファーをあいださすと、ミリアは備えつけのパソコンでなにやら入力し始めていた。

言われたとおりに座り、中の様子を確認する。青いソファーとテレビ、ビデオにパソコン。それ以外のものはいつさいないシンプルな部屋だ。

「お待たせ」

パソコンから離れて僕の元へと歩み寄る。手には一本のビデオテープが握られていた。

「なんだよ、それ」

「優美ちゃんの死ぬ瞬間が、収められたビデオテープよ」

「山倉が死ぬ瞬間！？」

ソファーから立ち上がり、ミリアの手からビデオテープをひつたくる。ラベルのところには『山倉優美 享年十七歳』と書かれていた。

「中界には現界人の一生の映像があるのよ。その映像を見て生前の資料を作成したり、死んだ瞬間だけを編集してまとめたり、それが中界の人達の仕事ってわけ」

「それが、死んだ瞬間をまとめたビデオだつてことか？」

ミリアは肯定の代わりに、につこりと微笑んでみせた。

「そういうこと。本来これはわたしたち案内人が見て、死んだ人たちを迎えるにつたり、死んだ場所を確認するのに使うんだけどね。時には死因を説明して、死んだことを認めさせることもあるけど」「じゃ、じゃあ、僕が死んだ瞬間の映像もあるのか？」

「もちろんあるわよ。見なくてもわたしが教えてあげられるけどね。

なにがあつたか知りたいの？」

興味はあつたが、僕は首を横に振った。大型トラックに轢かれたのは覚えていいるし、今となつては山倉の死因のほうが重要だ。

ビデオをミリアに返すと、

「それじゃあ再生するからね」

と、備え付けのビデオデッキへと入れる。砂嵐状態だったテレビが真つ暗になると、目の疲れそうな、ぼんやりとした映像が浮かび始めた。

なにかの会場らしいが、天井付近からの映像になつてているためにどこなのかはよく分からなかつた。

「ここには信也君たちが、修学旅行で行く予定の、サーラス会場だよ」ミリアの説明を聞いてから、改めてテレビを見やる。確かに舞台らしき場所にスポットライトが当たられており、そこを囲むように観客席が備えてあつた。

そういうえば、修学旅行の一回目にサーラス見学というのがあつた気がする。

『ツーリスト』という名のサーラス団で、精密製の高い演技とダイナミックな迫力が人気を呼び、今では世界で三本の指に入るといわれているそうだ。

旅行の行き先と公演日時が重なつたため、氣を利かせて校長先生が、人数分を予約したという話を聞いている。

「それで、山倉はどこに？」

「あとで説明してあげるから、今は映像を見ときなさい」

一喝され、しぶしぶテレビへ視線を戻す。

次々と繰り出されるサーラス団の妙技に、観客席から歓声と拍手が巻き起こっている。

刹那、会場の隅から光が差し込み、スピーカーであるうかされた音声が、会場内に響いていた。

「会場の皆様！ 落ち着いてください！ ただいま場内に爆弾が仕掛けられているのを発見いたしました！ すぐさま避難していただ

けるよう、お願ひ申し上げます！」

楽しそうなサークルの時間は、突然の爆弾宣言により終止符が打たれた。一瞬にして阿鼻叫喚に包まれた会場から、脱兎のごとく逃げ出していく人々の影。

「まだ時間はあります！ 落ち着いてください！」

団員の声も叫び声にかき消され、あまり意味を成してないようになれる。

しばらくすると、会場内から人々がいなくなつた。少なくともテレビ画面内には。

「よし、全員退避したか！」

サークルの責任者らしき人の声が聞こえてきた。それに答える「はいっ、団長！ いや、まだあそこに女の子が！ 早く逃げるんだ！」

一時の間が空いて、同じ声が聞こえる。

「どうやら骨折で動けないようです。助けに行きましょう！」

「ダメだ。もう間に合わん。早く退避しなければ我々も命を落としてしまう」

「で、ですが！」

「緊急避難だ。これ以上、団員を危険な目に遭わせるわけにはいかん！ 退避しろ！」

それを最後の言葉に、複数の足音が小さくなつていぐ。

それから十秒ほどして、轟音と共に画面内が赤黒い光に包まれる。そこで映像は終わりだと告げるようになり、砂嵐へと戻つていった。

「ど、ということなの、分かつた？」

「いや、頭の整理だけで精一杯だ」

正直に感想を告げる。するとミリアは詳しい状況について説明してくれた。

「現場には爆弾がいくつか設置されてて、そのうちの一つをサークル員がみつけた。境界ではテロ目的とか、ツーリストに対する恨みとか、いろんな推測が飛び交つたけど、結局は目的不明のまま

事件は迷宮入り。だけど、中界で仕事をしているわたし達には分かるのよ」

ミリアはコンピュータを再び動かし、中界のデータを呼び出して

いた。僕をコンピュータの元へと呼び、内容を確認させる。

そこには、まったく知らない男のデータが並んでいた。死因の部

分を指差すミリアに従い、声を出して読み上げる。

「自殺をしたいが一人で死ぬのが怖いという理由で、サークルの会場に爆弾を仕掛け、その爆弾で死亡！？」

胸に衝撃が走り、コンピュータから二、三歩あとずさる。ミリアはぐるりと僕のほうを振り返り、冷たく言い放つた。

「現界ではこの人も爆弾に巻き込まれたと思われていたけど、そうじゃなかつた。この人は自らの意思で爆弾を仕掛け、爆弾によって死ぬことを望んでいたのよ」

「それが山倉の死因……」

「そういうことね。まつ、偶然とはいえサークル団員が爆弾を見つけてくれたおかげで、死者は三人で済んだんだけどさ」

平然と答えるミリアに、思わずつかみかかりそうになるのを必死にこらえる。

「ミリアは、何も悪くないのだ。

「優美ちゃんはサークル見学のとき、一番前の席にいたの。普段の優美ちゃんならすぐに逃げ出せたでしょうけど、骨折が原因で入り口まで逃げ切れなかつた」

「……なんで山倉が一番前の席って知ってるんだ？」

浮かんだ疑問をそのままぶつける。先ほど見たビデオの内容ではサークル会場の全景を映しており、山倉の席までは確認できなかつたはずだ。

だが、ミリアは事もなげに答えていた。

「普通にわたし達が見るときは、死んでしまつ人をアップにしてみるからね」

「だったら最初からそつちを見せてくれば早かつたじゃないか！」

僕が反論すると、ミリアの瞳からフツと輝きが消える。冷たくに  
らみつけてきたミリアの視線で、全身に鳥肌が広がつていった。  
「見たいんだ。信也君の大好きな優美ちゃんが、爆弾でバラバラに  
吹き飛ぶ瞬間を。普段から人の死に触れているわたしですら、吐き  
そうになつた映像を」

無意識のうちに、僕の喉がこもつた音を鳴らす。そんな瞬間など  
見るのはもちろん、想像すらしたくなかった。

「ごめん……」

「いいのよ。分かつてくれれば」

口ではそういう言いながらも、言葉にはとげがある。もう一度僕が謝  
ろうとするが、ミリアはポンと手を打つた。

「そうそう、信也君が死ぬ瞬間のビデオを見た時はね。ありがちな  
死に方だねえって笑いながら、お煎餅をかじつてたわ

「な、なんだよそれ！」

「だつて交通事故でしょ？ まつ、子どもの命を救つてるんだし、  
無駄死にじゃなくてよかつたじゃない」

僕の肩を軽やかに叩きながら、ミリアはケラケラと笑つてみせた。

10月25日(9)

そのまま反論する間を作らず、僕の手を引っ張つていく。  
「これで優美ちゃんが死ぬ理由は分かったでしょ？ エンマ様のところへ行こっ！」

部屋から出て足早に仕事場を駆けていく。幸いなことに帰り際にミリアの知り合いと会うことはなかつた。

必死に考え込んでいると、そのまま最初の赤い門へとたどり着いていた。

「さつ、いよいよエンマ様とご対面ね！」

立ち止まつたミリアに意を決すると、縁の腕章を返しながら、恐る恐る尋ねた。

「なあ、ミリア。どうにかして山倉を救えないかな？」

突然の申し出に、ミリアはあいた口がふさがらないようだ。

「じゃあ聞くけど、信也君は優美ちゃんを救う方法があると思う？」  
逆にミリアから問われて、僕はあっさりと言葉を失つた。もしそんなことができるのなら、すべての人間は老衰でしか死なくなるだろう。

「もし可能性があるとするなら、優美ちゃんが死ぬ理由を知つてい人だけね。もっとも現界人限定だし、いるわけないんだけどさ」  
予想通りとはいえ、ショックは隠せなかつた。もうすぐ山倉が死ぬ  
それは確定事項らしい。

「さつ、行くわよ」

山倉の死に捕らわれて意識の飛んでいた僕を、再びミリアが引つ張つた。さきほどまで閉じていた巨大な赤い扉は、わずかな隙間を作つてている。

中に入ると、白いロープに縁の腕章をつけた人と、腕になにもつけてない人が一人一組で座つていて姿が多く見られた。なにもつけていない人は僕と同様に死んでしまつた人達だろう。

どうやらここはエンマ様の判決を受ける前の待合室のようだ。

五十人はゆうに座れる椅子が所狭しと配置されており、中央に聳え立つ太い石柱が、妙にとげとげしい圧迫感を与えてくる。

奥には入り口と同じ大きさの扉が、敢然とその姿を見せつけていた。

辺りで順番を待つてゐる二人組みを観察すると、案内人と会話をすする人、僕と同じく辺りを物珍しく見回す人、ただ呆然としている人など多種多様だ。

ミリアは多々ある椅子の中から、一つの椅子を選んで座つてゐた。僕も慌ててその隣へと腰をかける。

「ねえ……」

待ち時間の間、暇つぶしに天井を眺めていると、ミリアの耳打ちが入る。

視線を向けると、目を潤ませながらミリアは両手を合わせて哀願していた。

「さつき見せたビデオだけど、他の人には絶対に内緒だからね？ 部外者に機密事項である死因のビデオを見せたとなれば、こうなっちゃうんだから」

指一本をまっすぐに伸ばし、素早く首筋を横切らせる。仕事を首になるのか、実際に首と胴体が離れるのか 真相は分からなかつたが、悪い結果を生むのだけは間違いないだろう。

返事もせず、再び天井を見上げる。紅に染めた木で造られた屋根裏は、死ぬ前に溢れ出した鮮血を蘇らせた。

「ねえ、ちゃんと聞いてるの？ 信也君には無関係かもしけないけど、わたしにとつては死活問題なんだからね！」

「ああ……」

横から肩を揺さぶられ、天井を眺めたまま適当に相槌を打つ。

この色があと数日で、山倉の体から溢れ出るのか 。

頭をよぎった一つの疑問は、ほんの数秒で愚問だと理解できた。なぜなら、僕が実際に死んでいるから。

人間はいつ死んでもおかしくない。僕はそれを身をもって経験してしまった。あのビデオは本物で、山倉はサークル会場で死んでしまったのだ。

自然と涙が滲み出でてくる。ミリアはすぐに一緒になれるから嬉しいだろうと考えているようだが、そんなわけがない。

愛する人が死んで、嬉しいと思う人間がどこにいるのか。助けたい、どうにかして山倉を救いたい。約束を果たすのは今しかない。だが、つねる想いは空回りするばかりでなにも変わらなかつた。ミリアの言つた通り、死んでしまつては何もできはしない。それは靈安室で嫌というほど痛感している。

想いだけは全身に広がっているものの、想いだけでは誰も救えない。行動できなければなにも変わらないのだ。

その大切な行動という名の翼は、すでに折れてしまつていて。飛べない鳥がどうやって、死にそうな仲間を救えるというのか。

「信也君、順番が来たみたいだよ」

ミリアに声をかけられ、ようやく我に返つた。流れる涙を、慌てて拭う。

辺りにいた二人組みの姿は、先ほどとは違う人々へと入れ替わっている。

奥に進むと、そこには入り口と同じ大きさの扉があつた。度重なる来客のためか、すでに扉には隙間が開いている。

「失礼します！」

僕と話しているときにはありえないはつきりとした喋りで、ミリアが先に入つた。

「失礼します……」

くぐもつた声で、僕もそれに続く。  
中に入ると正面には なにもなかつた。

灰色の壁が目の前に広がるだけで、エンマ様はおろか、猫の子一匹の姿も見えない。

10月25日(10)

「どうなってんだ?」

「ミコアに訪ねると、ミコアは返事をせずに斜め上を見上げた。

「……え?」

そこには、巨大なエンマ様の姿があった。灰色の壁と思ったものは、どうやらエンマ様の机らしい。

だが、想像とは違うエンマ様だった。

確かにでかい。身長は三十メートルは軽くありそうだし、黒目がちの大きな双眸と裂けた口は、相手を凍結させてもおかしくない迫力を感じさせる。

だが、その他の部分はかなり貧弱だった。

顔も体も腕もか細く、全身の肌は青白い。前歯には治療済みの銀歯もある。

「なあ、ミコア」

「何よ、もう」

「あれが、エンマ様か?」

「他にだれがいるのよ」

イライラしながら、ミコアが僕の問いに答える。

「だつてさ、もつとこう肌も赤黒くて、牙が生えてて、筋骨隆々で

……

「の方は紛れもないエンマ様、この中界を統べる偉い人よ」

「でもさ、金槌で腕をおもいきり叩いたら、ポキッとかいつて折れ

ちやいしがだぜ?」

「そんなの無理よ。だつて……」

「内緒話で花を咲かせるのも結構だが、そろそろ仕事に移つてもよいかな?」

最後に聞こえたのは、姿に似合わないドスの利いた低い声だった。

「も、申し訳ありません、エンマ様!」

慌ててミリアが頭を九十度に下げる。

「これじゃ、どっちがエンマ様と初対面か分かんないな……」

「ミリアの慌てぶりに失笑していると、

「ほら、信也君も頭を下げて！」

僕の頭を乱暴に押さえつける。なにを慌てているのか分からぬものの、とりあえずは大人しく従つておいた。

「さて……君が鷹野信也君だな？ 自己紹介をしてもいいが、すでに話は聞いているだろう？」

「ええ、まあ……」

「ならば省略させてもらうとしよう。一人一人に自己紹介するなど、大変だからな」

ざつくばらんな紹介を済ませると、エンマ様は灰色の壁に見える机の上に積まれた大量の紙の中から、一枚の紙切れを取り出す。紙切れといつてもエンマ様の体格に合つたもので、人間大の大きさは樂にありそうだ。

その紙切れの上から下まで目を通して、うんうんと何度も頷いてみせる。

「ほう、今どき珍しいほどの好青年だ。文句なしで天界行きだ。よかつたな」

「ほらね、言った通りだつたでしょ？」

なぜか自慢げに胸を張るミリア。まるでミリアのおかげで天界行きが決まつたかのような態度だ。

「ほら、天界はこっちよ。早く行きましょ」

微笑んだミリアが、僕の肩を叩く。

だが、僕は未だに迷っていた。このまま数日後に来る山倉を笑顔で迎えることが、僕にできる最高の行動なのか。と、突如脳裏に電撃が走る。確かに僕は行動という翼を折られた。だが、それは生きている人々の世界での話だ。

死者の世界では、僕の翼はまだ大きくはばたくことができる。ダメだ、やっぱりこのまま天界になんて行けない！

「えつ？」

ミリアが事の重大さに気がつく前に、素早く行動に移る。山倉を救うことに繋がらなかつたとしても、まだできることがある それが嬉しくてたまらなかつた。

「エンマ様！ お願いがあります！ 山倉を助けてあげてください！」

「わっ、ちょっ、バツ、なつ、何を言つてんのよ！」

慌てて僕の口を塞ぐとするミリアをかわしつつ、僕は土下座した。どこからか鈍い音が聞こえてくる。

頭を床にこすりつけ、懇願を続ける。わずかな可能性でも、ゼロではないと信じつつ。

「エンマ様なら一つぐらい、死ぬ定めの人を助ける方法を知つているでしょ！ お願ひします！ 僕は地界に落ちてもかまいません！ 山倉を殺さないでください！」

「ミリア、これはどういうことだ？」

僕の質問よりも、現状を理解することの方が先と考えたのか、ミリアへと問いただす。

声は冷静ではあるものの、胸の内は怒りで一杯らしい。それを表すかのように、エンマ様の全身が変化していった。

肌の色が赤黒く、大きく裂けた口から牙が生え、全身が筋骨隆々になる。僕が というよりも、生きている人が想像している恐ろしいエンマ様だ。

大地を揺るがす振動、全身を押さえつけるような強烈な圧迫感。これでこそ中界を統括するエンマ様というものだろう。

「えつ、その、ア、アハツ、アハハハハ」

引きつったミリアの笑いは、まるで子どものおもちゃだった。それも子どもの遊ぶ意思とは関係なく動き続ける壊れたおもちゃだ。「ミリア、ごめん。僕は山倉が死ぬのを指をくわえて待つてるなんて無理だ。山倉を救うつて、約束したんだ」

「アハ、アハハハハ、ハア……」

ようやくゼンまいの力が途切れたのか、ミリアは力なくその場に膝をついた。小さく何度も体を震わせながら、しぶみかけの風船のように細かく息を漏らしている。

「お願いします！　お願いします！　どうにかして山倉を死なずに済むようにしてください！」

再び床に頭をこすりつけ、何度もお願いしますを連呼した。

「分かった分かった、話だけでも聞こうではないか」

僕の想いが通じたのか、エンマ様からそんな言葉が漏れる。頭を上げてみると、エンマ様の顔は固く険しかった。だが、簡単に引くわけにもいかない。

大量に積んである紙の中から、再び一枚を取り出す。その紙を眺めながらエンマ様は質問をしてきた。

「君はなぜ、この山倉優美という女の子を救いたいのかね？　言つておぐが、自分が好きだからというのは理由にならないからな。愛する人が死ぬというのは、だれにとつてもつらいものだ」

もしかしたら……そんな想いを胸に抱きながら、僕は懸命に答えた。山倉を救える可能性を生み出せるかどうか　すべては僕にかかるっている。

「山倉はいつも明るくて、笑顔で　だけどそれは、自分を犠牲にしてまで他人の幸せを考えての行動なんです。自分が苦しくてもそれを黙つて耐えて、僕たちのために力を尽くしてくれて　そんな山倉が死んで嬉しい人なんているとは思えません！」

お世辞にも上手とは言えない言葉に感情をあらん限り乗せて、エンマ様へと気持ちを訴える。エンマ様はそんな気持ちを知つてか、真剣な眼差しで話を聞いていた。

「そんな優しくて頼もしい山倉が、臆病で自殺願望を持った、人の命の重さもわからない男の巻き添えで、死んでしまうなんて納得できません！」

その時、うなだれていたはずのミリアからの視線を感じた。もしかしたら僕の話に聞き入つて、感動しているのかもしない。

そのおかげで、僕は少し落ち着きを取り戻せた。声のトーンを下げてから続ける。

「山倉は、とつてもいい子なんです。生きていれば絶対に生きている人達に良い影響を与えてくれます。そんな彼女が死んでしまったら、世界にとって大きな損失です！」

「フフ、フハハハハ！」

今まで黙つて聞いていたエンマ様が、突然大声で笑い出していた。口から吐き出された息が、僕の髪をなびかせる。

「おっと、すまない。世界の損失などと大きなことを言つので、ついな」

謝りながらも、まだエンマ様の口元はほほりんでいるのを、僕は見逃さなかつた。

エンマ様は腕を組むと、座っている椅子へとよりかかつたようだ。椅子の姿は確認できないが、のけぞるような仕草に合わせて金属のきしむ音が聞こえてくる。

10月25日(1-1)

「なるほど、君の気持ちは十分に伝わった」「じゃあ！」

喜んだのもつかの間、すぐさまエンマ様は首を横に振った。  
「だが、決まっている死は変更できない。ミコアもやつれていた  
だらう？」

ミコアを見やると、目に涙を浮かべながら頷いている。エンマ様  
の話を聞くまでもないといつた態度だ。  
自然と肩が落ちていく。分かつていただとはいえ、自分の無力さが  
はがゆかつた。

山倉が数日後に、ここへ来る。

僕はいつたいどんな顔で、山倉を迎えるべきだらうか？  
ふいに浮かんだ疑問の答えを、数日の間に導き出すことができる  
のだろうか？

頭の中で渦巻く疑問に、動きを止める。すると、突然エンマ様は  
フツと笑つてみせた。

「決まっている死は変更できない。その代わりに、死を回避するチ  
ヤンスを君にあげたいと思つ。どうかね？」

「エンマ様！」

声を上げたのは僕ではなくミコアだった。

目を見開いて、小ちく何度も首を振つてゐる。信じられないとい  
つた感じだ。

「そうだな、一週間もあれば十分だらう。今から三日前　十月一  
十一日まで時間を戻そではないか。それから山倉優美が死ぬ二十  
八日までの一週間、君は山倉優美を救うために全力をつくすとい  
のはどうだ？　もちろんいくつかの条件はあるが、悪い話ではある  
まい？」

悪い条件どころか、これ以上の条件はないだらう。通常ではあり

えないチャンスというのは、ミリアを勘ぐれば容易に理解できる。

「は、はい！ ゼひやらせてください！」

「一つ返事で返答すると、エンマ様は満足げに頷いた。

「彼女の運命を知る君なら、助けてあげられるだろう。では今から、条件について説明する」

喉の奥で、ゴクリと音が鳴る。どんな無茶な条件で受け入れなければ、山倉を救えないのだ。

「まず一つ目。君は一時的に生き返ることになるが、それはあくまで一時的だ。山倉優美の死ぬ二十八日には、再び君はここに来る。山倉優美を救えても、救えなくてもだ」

これは当然といえば当然の条件だ。本来ならすでに死んでいる僕が、完全に生き返るなどありえない まつたく期待していなかつたといえど嘘になるが。

「次に山倉優美を救えなかつた場合、君には地界に落ちてもいい。もちろん天界に行く予定の山倉優美には一度と会えないだろう。愛する人を救えるチャンスを逃すというのはそれだけで罪であるし、考えが変わつて天界で一緒に暮らせばいい などと考えてもらつては意味がないからな」

「そんな妥協は、絶対にありません！」

エンマ様も冗談だつたのだろう。僕の抗議に反論も否定もしなかつた。ただ、肯定もしなかつたところは少し気がかりだつた。

「一つ言つておくが、地界は甘くないぞ？」

「えっ？」

「ミリアからも説明があつただろうが、詳しく話してやる。まず地界に落ちた人間は舌を抜かれる。地界の人間同士で喋つたり、愚痴をこぼしたりできないようにな。そして無意味な肉体労働を毎日繰り返し、少しでも手を休めれば鬼達の鞭が飛ぶ。もちろん簡単には殺したりしないが、それでも勢いあまって殺す時がある。それが地界に落ちた人間の、安らぎの瞬間だ。それをきちんと理解していくほしい」

僕は思わず生睡を飲んだ。手足が震えだすも、首だけは縦に振つた。

「そして三つ目、これが最後の条件であり、最も重要な条件だ」

再び喉が音を鳴らし、両腕が震えだすだけだった。

「天界、地界、中界など、死後の世界について語るのをいつさい禁止する。それに伴い、山倉優美の運命についても他言できない」

「山倉本人に伝えても行けないのですか？」

「当然だ。これを破ればその時点で君は中界へと強制送還される。もちろんにも知らない山倉優美は死に、君は地界行きだ」

僕は黙つて頷いたが、頭の中ではどうすれば山倉を救えるかという問答で一杯になつていた。

山倉が修学旅行で死ぬなら、修学旅行に行かなければよい。これは誰でも思いつく単純な救助方法だ。

そのために僕は、山倉を説得するつもりでいた 身に起こる不幸を説明して。

もちろん簡単には、信じてもらえないだろう。もつすぐ死ぬから修学旅行に行つてはいけないなんて戯言を、瞬時に信じるとは思えない。

ただ、山倉の性格ならば納得してくれるとこつ自信があつたたとえ疑心暗鬼にとらわれていたとしても。

必死で訴えてくる言葉を、山倉が無碍にするとは思えない。修学旅行が終われば分かると説得すれば、納得できずとも受け入れてくれるはずだ。

だが、山倉に死の運命について話せないとなると、話は変わつてくる。

真摯な気持ちが通じるのは、それに相応する理由があるときだけだ。理由もなしに修学旅行に行くなどと言えば、それは単なる嫌がらせだ。山倉だって相手にしないだろう。

だからといって、条件を飲まないわけにはいかないのも確かだつ

た。

山倉が死ぬのは今の時点では百パーセント確定事項だ。それを回避するには、エンマ様の出した条件を飲むしかない。

「わかりました。条件は守ります！ そして山倉を救つてみせます！」

意を決して、エンマ様を見上げる。エンマ様も僕の返答を聞き、満足したようだった。

そのためか、今までの赤黒い体からゆづくつと最初の青い貧弱な体へと戻つていぐ。

「よく言った。では特に質問がなければ三日前に君を送るが？」

エンマ様の問いに、僕はある人物の存在を思い出していた。視線を移すと、ミリアは涙を目に溜めながら、手を組んで僕に祈りを送つている。

そんなミリアにつけて微笑んでみせてから、僕はエンマ様へと告げた。

「特にないです」

「信也君！」

「冗談だよミリア。あの、ミリアが罰を受けることになるんじゃ……」

…

エンマ様はあごひげに触りながら、ミリアを一瞥した。

「心配せずともよい」

「よ、よかつた……」

安堵の声が、ミリアのほうから聞こえてくる。それは僕も同じだつた。たとえ山倉を救えたとしても、今回の事件が原因でミリアが死んでしまつては夢見が悪い。

だが、エンマ様の言葉には続きがあった。

「大した罰ではない」

「えっ、えええ！」

安心してしまつた分、驚きも大きかったようだ。僕を指差して、口をパクパクさせていると、見事にエンマ様の雷が落ちていた。

「機密事項を漏洩しているんだ。罰があるのは当然だ」「…」

「うう、うう……」

僕へ向けられた指が、力なく下がっていく。どうやら観念したようだ。

「では、三日前に君を送り届けよう。一週間必死で頑張るんだぞ」  
エンマ様が手をかざすと、僕の体が光に包まれていった。気だるさが全身に少しづつ広がり、まぶたが重くなっていく。

「帰ってきたら覚えてなさいよ！」

ミリアの叫びが、意識を失う直前の耳へと届いていた。

10月22日(一)

十月二十一日 水曜日

気がつくと僕は、レンタルビデオ屋にいた。周りにはカップルや学校帰りの学生が、ビデオやCDをあれこれ探索している。

そんな様子を眺めながら、僕はふと思考を張り巡らせる。最初に考えたのは時間が戻ったという記憶についてではなかつた。

「今までの記憶は、夢だったのか？」

疲れが溜まつていて、白昼夢を見たという可能性もある。いや、

その可能性のほうが高いだろ？

天界に地界、中界にドジな案内人、改めて思い出しても馬鹿げている。

額に手を当てて思考を繰り返す。まるで夢だという検察側と、夢ではないという弁護側が裁判を行つてゐるようだ。

結論が出ないまま、レンタルビデオ屋の中を歩く。そういうえば今日は、いま話題の洋画を借りに來ていたのだ。

大量に並ぶその洋画のビデオを、手にとつてみる。だが、おかしなことに、拍子を見ただけで内容が把握できてしまつた。

どこで主人公がピンチになるか、どうやって切り抜けるか、ラストはどう終わるか 一つ一つ説明できる自信があつた。

だが、僕は今日この洋画を借りにきたわけで、一度だつて見ていないはずなのだ。

「やつぱり……さつきまでの出来事は……」

もう一度だけ、脳を回転させる。とりあえず、今日の日付の確認をした方がいい。

レンタルビデオ屋のカウンターには、今日の日付と返還予定期が書かれた、プラスチック製のカレンダーが置いてあつた。

そこには十月二十一日 水曜日と記されている。やはり今日は洋画を借りに来た日に違ひない。

となると、考えられるのは、すでに洋画を見ており、夢でなく本当に死んでいて、時間を戻されたという可能性……。

「いやいや、そんな馬鹿な……」

まるで自分に言い聞かせるように、声を出して囁く。自分の記憶違いなだけかもしれない。

いろいろと悩んだ結果、僕はその洋画を借りて、家へ帰ることにした。その内容を確認すれば、全ては明らかになる。  
もしもまったく知らない内容なら、僕の思い過ごしであるということ証明になるし、もしも予想通りの内容なら、その時は……。

カウンターで手続きを終わらせ、家へ帰るために足早に出口へと向かう。

と、なぜか背後から、明らかに僕に向かつて近づいてくる足音があつた。

顔を向けると、そこには一人の女性が歩いていた。肩までの黒髪は手入れが行き届いているのか、ふんわりとしたボリュームをもつていた。

宝石のように輝く瞳と、モデルを思わせる完璧なスタイル。素足で履いている高いヒールが大人の魅力を存分に感じさせた。

その女性の視線は、確実に僕を捕らえている。だが、僕にとつてその女性は赤の他人であり、見覚えもなかつた。

10月22日(2)

「あの……何か?」

恐る恐る問い合わせると、女性は一ヶ口と微笑んでいた。友好的な態度にこちらも微笑み返す。

だが、次の瞬間には女性の蹴りが、僕のすねを的確にヒットしていた。

「つっ！」

声にならない悲鳴を上げ、蹴られた脛を押さえる。そんな僕を女性は仁王立ちで見下ろしていた。

「ふんっ、ざまあみなさい！」

「ひ、人違いじゃないかな？ 僕はあなたのこと知らないんだけど

……」

怒りが胸の内で躍っていたものの、冷静に対処する。なにかの間違いに決まっているのだ。

だが、女性の自己紹介は、僕が明白な関係者であることを示していた。同時に蹴られた理由も。

「わたし、ミリア＝ミリスだよ」

「ミ、ミリアだって！？」

「そっ、なんでわかんないかなあ……」

そういうて、ブツブツとなにやら咳き始める。この行為は明らかにミリアのものだ。

だがミリアの姿は、中界にいた頃とは声も姿も似ても似つかなかつた。これでミリアだと分かれば相当な日利きだ。

「なんで、なんでここにいるんだよ？」

「これがエンマ様の言う罰なのよ。現界で一週間の間、信也君のサポートをしながら一緒に暮らすんだって」

罰の対象が一緒に暮らす いつたいどんな家だと思われてるのだろうか そんな考えが浮かぶと同時に、一緒に暮らしている人

物の顔が浮かび上がる。

「一緒に暮らすつて……母さんにはなんていうんだよ」

一瞬、靈安室で死体を殴打する姿が脳裏に浮かんだ。涙が流れそうなのをグッとこらえて、ミリアの返答を待つ。

「えっと、なんでもわたしは信也君のお姉さんになつてゐる感じよ」

「姉じやなくて妹の間違いじやないのか?」

「ちょっと、それどういう意味!?」

ミリアが心外だとばかりに、頬をふっくりと膨らませる。

そして仕返しとばかりに、口元を緩ませながら、

「まつ、いいわ。とりあえず、信也君が死んだのは間違いないから簡潔に述べる。一時中断していた裁判は、一瞬にして弁護側の勝利で終わっていた。

「それから、わたしはサポートでこの世界に来たから、これから起くる未来や、信也君や優美ちゃんの運命、全部知つてるからなんでも話していいって。中界とか天界の話もね。そんなわけで、これら一週間よろしく!」

そう言つと、ミリアは元気よく右手を差し出してきた。

死んだという現実は悲しいが、この一週間を乗り切るために、ミリアが頼りになるパートナーであるのは確かだ。

「ありがとう、助かるよ」

素直にお礼を言いつつ、握手を受ける。心中ではエンマ様へのお礼も続いた。

だが、ミリアは口元に手をやると、僕の感謝の念を打ち碎く一言を告げた。

「まつ、こつでも相談してよ。わたしはバカنسだと思つて楽しんでおくからさ」

「気楽に考えすぎでないか?」

「気楽に考えてるわよ。信也君が成功しようが失敗しようが、わたしには無関係だもん」

全身を強打されるような衝撃を受ける。本当に頼りになるんだろ

うか……。

失敗した暁には、どうにかしてミリアも道連れにしなければならない などと、ひそかな企みを胸に秘めつつ、出口へと向かって歩き出す。

「ちょっと、どこ行くのよ」

「山倉の家さ。可能性は低いかもしれないけど、うまく話せば修学旅行へ行かないよう説得できるかも知れない。いや、しなくちゃいけないんだ！」

「そそっ、その意気よ。わたしが協力するんだから成功間違いなし！ 大船に乗つたつもりでいなさい！」

「その自信はどこから来るのだろうか 泥舟でないことを切に願う。

僕とミリアの二人はレンタルビデオショップを後にした。キヨロキヨロするミリアを適当にあしらいながら、早足で目的地である山倉の家を目指す。この調子では山倉の家にさぞかし驚くことだらう。

「ここが……優美ちゃんの家？」

「ああ……」

予想していた通り、ミリアは田を丸くしていた。

身長の倍はあるアーチ状の正門は、アコーディオンドアによつて進路を防いでいた。玄関まで伸びる道は両脇が木々で囲まれており、林道を思わせる。

ただ大きいというよりも、巨大といふ言葉のほうがよく似合つている。

山倉は山倉の両親が一代で作り上げた会社の令嬢なのだ。

「ここに優美ちゃん、一人で住んでるの？」

「よく分からぬよ。なんだか複雑な家庭環境みたいだし」

「そんなことも知らないの？」

「悪かつたな」

嘆息氣味に、ミリアが首を振る。どうやら呆れていようだ。

山倉と僕は生前、特に仲がよかつたわけではない といつより

も、これからといつ時に死んでしまったのだ。

ただ病院での会話を聞く限りでは、山倉と両親が時間を共有して

過ごしているとは思えなかつた。

家も三村から場所を聞いていただけで、実際にくるのは一回目、

インター ホンを押すのに至つては今日が初めてだ。

「今から山倉を説得してくるから、ミリアは先に帰つてろ」

「ええ！？ それはないでしょ…」

「ミリアがいると話がややこしくなるだろ。ミリアの紹介とか関係とか説明が難しいし、なんで一緒に来たのかも分かんないだろ？」  
「やだつ、ここにてわたしも優美ちゃんを見る！」

「うなると、ミリアはここでも動きそうになかつた。仕方なく僕はミニアの肩に手を乗せながら、山倉の家を見上げる。

「じゃあ、こいつよ。ここ//ミリアがいてもおかしくない、上手な言い訳を思いつけたらいいともいよいよ」

「えつ、えつ？」

「山倉にミニアのこと、説明しないってわけにも行かないだろ？  
僕が納得できる言い訳を考えてくれ」

「い、いいわよ。受けてたとうじやないの」

「うーんと唸りながら必死に考えるミリア。当然そんな言い訳を簡単に思いつくはずがない。それは短い付き合いで、十分に把握できている。

「ブー、時間切れだ」

このあいを見計らつて告げると、ミニアは必死の形相で懇願してきた。

「あと一分……いや、三十秒でいいから…」

「ダメだ。先に帰つて待つててくれ」

ミニアはふてくされながらも、しぶしぶ来た道を引き返し始めた。  
「さあ……」

ミリアが立ち去るのを確認してから、改めて山倉の家を見上げる。山倉を救うのは僕しかいないという想いが、ふつふつと沸き起つて

始めていた。

10月22日(3)

一度咳払いをしてから、震える手でインター ホンのボタンを押す。押してから親が出てきたらどうじょうといつ迷いが生じたが、聞こえてきたのは山倉の声だった。

「どなたですか？」

「あ、あの、同じクラスの鷹野信也だけだ」

「……信也君？ ちょっと待ってね」

ドタバタと音がしてから、ブツンと通信が途絶える音が聞こえる。しばらく待つていると、普段着であろうトレーナーにジーパンという格好で、駆けてくる山倉の姿が見えた。

「あっ、本当だ」

僕の顔を見るなり、山倉が微笑みながら呟いた。

「まさか、嘘だと思つてたの？」

「いや、なんていうかさ。突然の訪問だったから信也君の名前を語る誰かかなつて気がしたの。悪気はないから気にしないでね」

確かに突然の来訪だった。先に連絡を入れておいたほうがよかつたかもしれない。

山倉の電話番号は知らないが、三村に聞けばきっと知つている。

「ごめん、ちょっと急いでたから」

「別にいいよ。ちょうど退屈してたし。で、何の用？」

迷惑はしていないが歓迎もしていない そんな面持ちで僕を見つめてくる山倉。いぶかしげな視線が、突き刺さつてくる。

「その、頼みがあるんだ」

「頼み？ わたしにできるなら……もしかして、好きな女の子相手に、恋のキーピッド役でもやらせるつもり？」

口に手をやり、楽しそうに微笑んでいる。

だが、恋のキーピッド役なら、間違いない山倉以外を選ぶだろ

う。

「いや、やうじやないんだ」

「うーん、じゃあなんだろ？ 勉強はダメだよ？ わたし苦手だから」

「勉強でもないんだ」

「他にわたしができそつなことなんてないけどなあ。何を頼みたいの？」

考え込むのをやめて尋ねてくる。僕は意を決すると、両手を合わせた。

「修学旅行に行かないでほしいんだ」

「はひつ？」

まったく予想だにしていなかつたのか、すっとんきょうな顔で固まつてしまつている。

僕は瞬間的に土下座をして、頭を地面にこすり付けていた。

「理由はいえないけど、修学旅行に行かないでほしいんだ！..」簡単に理解してもらえないのは分かっている。それでもどうにかして納得してもらわなければならなかつた。

「いや、その……とりあえず頭上げてよ」

「うん……」

山倉が僕の肩をつかむ。それに合させて僕は体を起こした。

「鷹野君はわたしに、修学旅行へ行つてほしくないんだ」

「うん……」

「他の人は行つてもいいの？」

「うん……」

理由を話せないとはいえ、陰鬱な返事をしたのがいけなかつた。

山倉は節目がちこ

「要するに、鷹野君はわたしが嫌いなの？」

口の中でも「も」と、力なくつぶやく。

「ちがうー。やうじやないんだ！」

「じゃあどうこう」と、なんでわたしだけ修学旅行に行つちゃいけないので？

「理由はいえないけど、修学旅行に行くと大変なことが起きる。それだけは間違いないんだよ！」

「じゃあ聞くけど、どうして他の人は行つてもいいわけ？ 大変なことが起ころんだったら、みんな行かないほうがいいと思うけど」山倉の言つことほもつともな意見だった。本当の理由を言えない現状では。

「わたし、修学旅行をずっと楽しみにしてたんだから。理由もなしに行くなつて言われてもね……」

予想通りの展開だつた。やはり本当の理由を話さなければ納得してもらえそうにない。

もちろん本当のことを話した瞬間、僕は中界へと強制送還されることになるのだが。

「やつぱり、そうだよね……」

うつむいた僕の視界に、山倉の両足が入つてくる。

『あれ？』

胸中に違和感が沸き起つた。そしてそれが突破口へと変わるように、そう時間はかからなかつた。

「骨折しない！」

「へつ？」

山倉の肩をがつしりとつかむと、顔を赤らめていた。

「ちょ、ちょっと鷹野君？」

「山倉、骨折しないんだよな？」

「骨折？ してないけど……」

僕は後ろを振り向き、山倉に見えないようガツツポーズをしていった。すぐにまた、山倉と顔を合わす。

「『めんね、修学旅行に行くなんて変なこと言つちやつて。忘れていいからさ』

「そ、そつ……」

「それじゃあまた明日、学校で会おうねー！」

「えつ？ あ、うん、また明日……」

呆然としている山倉に手を振り、そのまま自宅へと走つていった。  
僕の作戦が可能かどうかを、ミリアに相談するためだ。

10月22日(4)

すでに辺りは暗くなっているが、建ち並ぶ家から漏れる光のおかげで、真っ暗にはなっていない。

山倉の家から自宅まで、走って帰ると十分ほどで着く。

田の前にある我が家も、なぜか無性に懐かしい気がした。

「待つて、信也君」

僕が家中へ入ろうとするとい、背後から声が聞こえた。ミリアである。

「なんだ、まだ帰つてなかつたのか？」

「うん、いろいろあつてね、信也君を待つてたんだよ」

「僕を？」

「自分の家になつてゐつていつても、ちよつと不安だからさ。信也君と一緒になら、さすがに追い返したりはしないでしょ」

「そりやそうだけど。こんな時間に見知らぬ女の子を連れ込んだら、それはそれでボコボコされそうだなあ……」

僕は自分で言いながら、少し怖くなっていた。ミリアが姉になつていなかつたら、僕は母さんにどんな田で見られるだろうか……想像しただけで鳥肌が立つた。

「ただいま」

「た、ただいま」

僕の背後から、おどおどした挨拶が聞こえる。

玄関に入ると、すぐ田の前には一階に上がる階段と、風呂やトイレへと通じる廊下がある。

右手には居間へと通じる扉、左手にある扉の先にはダイニングキッチン。

と、そのダイニングキッチンのほうから母さんが姿を現していた。

「おう、帰つたか。遅かったな？」

「うん、ちょっと寄り道してたから

「学校が終わつたらすぐに帰れとは言わないが、あんまり道草くつてんじゃないぞ?」

母さんに注意され、頭をかきながら愛想笑いを浮かべる。

乱雑な黒い短髪に、白いシャツと紺のジーパンの格好、黄色のHプロンをつけているのは、夕食の支度の途中だからだろ。つ。

大雑把な格好から想像できるように、母さんは男勝りな性格だつた。いつも僕に男らしくない、父さんを見習えと愚痴を言つ。

ただ、僕を大切に思つてくれているのは間違いなかつた。僕が死んだ時に流れた涙が、その証だ。

父さんはと「う」と、僕が小学校に入る前に亡くなつたらしく。となると、父さんも中界に行き、エンマ様の審判を受けたのだろう。曖昧な記憶しかない父さんも、そう考へると妙に親近感が沸いてくる。

母さんは台所へ戻るうとしたが、僕の後ろに隠れているミコアを発見すると、ピタリと足を止めた。

「なんだ、美利亞も一緒だつたのか。お前もいいかげんブラブラしてないで、母さんに楽させてくれよ」

見慣れた娘を諭す口調で、母さんはそのまま台所へと去つていつた。どうやらミリアがここで生活するのに、支障はないようだ。

「よかつたな、ミリア」

「ま、まあわたしはエンマ様の言つことを信頼してたけどね」

ケラケラと笑い飛ばすミリアに、

『じゃあ一人で家に入つてもよかつたじやないか』

という無粋なツッコミをいれようかとも考へるも、口を開いたところで止めておいた。変にヘソを曲げてもらつては、後々困るのは自分だらう。

「ねえ信也君、家中を案内してよ」

「その前に一つ、家中では僕のことを信也と呼び捨てにしてくれ。僕もミリアを姉さんと呼ぶから。弟を君付けで呼ぶ姉はあまりないだらうし」

「わかったよ、信也」

ふざけ気味に返答するミリアに、一抹の不安を感じる。それでも、理解したものと判断することにした。

もつとも、ミリアを信頼していたわけではなく、君付けをしたところでの、今回の目的に影響はないだろ？と判断したからだ。

「じゃあ、ついてきてよ」

僕は廊下を進み、風呂場とトイレを軽く説明すると、一階へと上がつていった。居間は基本的に母さんの部屋で、僕が入るのをあまり喜ばない。ダイニングキッチンは夕食のときにでも教えればいいだろう。

一階に上ると、まっすぐ伸びた廊下の左右に二つの扉がある。手前のドアが僕の部屋だ。

もう一つは父さんの部屋だったが、父さんが死んでからは物置になつている。

ふと、そこで疑問が浮かんだ。ミリアは二つで寝るのだろ？

とりあえず僕は、自分の部屋をのぞいてみた。薄汚れた緑色のカーペットに、普段見慣れた机とインターネット用のパソコン。ベッドは一つ、もちろん枕も一つだけだ。どうやら二つではないらしい。

「どうかしたの、信也。キヨロキヨロして」

知らず知らずのうちに、落ち着きがなくなつていたようだ、心配そうな面持ちでミリアが尋ねてくる。

「いや、姉さんはここで寝るのかなって。もしかして廊下かな？」

「なんでそうなるの？」「二つが信也の部屋なら、反対じゃないの？」

「いや、そつちは物置……」

僕の話を聞かずに、ミリアは反対側の扉の前へと立つた。ふわふわの髪がボールのように弾んでいる。

ミリアは扉を開けると、そのままポカーンと口を開けた状態で固まつてしまつた。

「どうしたんだよ？」

「わ、わたしの部屋……」

「は？」

ミコアに続き、部屋の中を覗き込む。その変わった、僕の動きも完全に止まってしまった。

物置だったはずの一室が、きちんと整理された、生活観のある部屋へと変貌を遂げていたのだ。

ただ、家具に高そうなものではなく、むしろ質素で地味なもののが多かった。

「わ、わたしの部屋……わたしの部屋ー！」

同じ言葉を繰り返しながら、フラフラと部屋の中へと入っていく。「いい部屋じゃないか。でも、物置の荷物はどうにこいつたんだ？」だが、部屋の中を見回しても、それらしき物は見当たらなかつた。

「わたしの部屋だよー！」

振り返ったミコアが絶叫する。

「そんなに何度も言わなくていいよ。廊下で寝ずに済んでよかつたじゃないか」

「違う、わたしの部屋なの！　わたしが中界で使つてる部屋ー！」

「へつ？」

「わたしが中界で暮らしてゐる部屋が、そつくりそのままここにあるのー！」

これはエンマ様の仕業だな　僕は瞬時に悟つていた。となると、物置の荷物はいま中界にあるのだろうか？

「住み慣れた環境でいいじゃないか

「そ、それは、そうだけれど」

「それよりも、物置にあつた荷物、後で返してくれるよう、ひやんとエンマ様に伝えておいてよ

ブツブツとなにやら呟きだすミコア。これが出るとなことを語つても聞こえなくなる。

「信也、美利亜ー。ご飯ができたぞー。」

一階から母さんの声が聞こえてくる。僕は仕方なくミコアを引つ

張り、  
一階へと降りていった。

10月22日(5)

ダイニングキッチンにたどり着くと、テーブルには母さんの料理が並んでいた。

今日のメニューはどうやらおでんと味噌汁らしい。

「今日はミコアの大好物だからな。しっかり食べて母さんを楽させてくれよ」

「飯を茶碗へとよれて、ほがらかに笑う。どうやら今日は機嫌がいいようだ。

「それにしても姉さんの好物が、おでんだつたとはね  
あくまで仲のよい姉弟を装いながら、尋ねる も、よく考えたらこの質問自体、この年齢まで一緒に暮らしてきた姉弟としてはあり得ないだらう。

だが、ミリアは僕の言葉を無視し、大量に盛られたおでんとこじめっこをしていた。

「どうかした？ 早く食べなよ」

「どうしておでんなのよ……」

「姉さんの好物なんでしょ？」

ミリアは突如、僕の胸倉をつかんだ。

「な、どうしたんだよミリ……姉さん」

「おでんが好きなんていつ言ったのよ……」

「いや、それは……」

それは母さんの記憶にあるんだらう といいかけて、僕は止めた。どう考えてもミリアの様子がおかしい。

「もしかして？」

恐る恐る尋ねると、ミコアは嗚咽を吐き出すようになり、

「おでん、大嫌いなの……」

予想通りの言葉を口にしていた。

「じゃあ、なんで母さんはおでんを姉さんの好物だなんて言つたん

だろ

「知らないわよそんなの……あつ！」

僕の胸倉からパツと手を離し、祈るように組み合わせる。そのまま天井を見上げて、諦めたようにため息を吐いた。

「……エンマ様の仕業だ」

「エンマ様が？ なんでそんな手の込んだことを……」

「いつも言つてるのよ、好き嫌いがあるようじや立派な案内人にはなれないって」

「どういう理屈なんだ、それは」

僕の言い分を無視して、ミリアはブツブツとつぶやきながら大根、白滝、牛筋など順番につついている。

「なんだ、行儀が悪いな。そんなに待ちきれないなら先に食べててもいいぞ」

屈託のない笑顔を向けられ、ミリアは困ったように愛想笑いを発していた。気の毒だがどうしようもない。

「んじゃ、先に食べとくね。いただきます」

「い、いただきます」

「おう。おでんのおかわりたっぷりあるからな。しつかり食べよう！」

いきなり出鼻をくじかれ、飲みかけた味噌汁をミリアが吹きだす。それ以降は何事も起こらず、食事は進んでいった。表向きは。僕は見逃さなかつた。ミリアが母さんの皿を盗んでは、僕の皿におでんを移しているのを。

「い、ごちそうさま！」

当然、ミリアの方が食べ終わるのも早かつた。だが、母さんは軽く首をかしげている。

「なんだ美利亞、もういらないのか？」

「う、うん、もうおなか一杯！」

「いつもだったら鍋一杯に作つても、一晩でたいらげるじゃないか。どつか具合でも悪いのか？」

「鍋一杯のおでん……」

想像してしまったのか、ミコアの口がぱつくりと動いた。そのままドタドタとダイニングキッチンから出て行ってしまった。

「いりひー！ ちやんとうま！」

「こりひー、信也！ ちゃんと食べないとダメだろ！ オでんなんてほとんど残ってるじゃないか！」

そのほとんどはミコアのものだと言えるわけもなく、一杯になつた間に無理やり詰め込む。皿を空にしたところ、ようやく母へやソーファさんは僕を解放してくれた。

一階に上がってミコアの部屋をノックすると、

「どうぞ……」

か細い声で、返事が聞こえる。中に入るとベッドの上にミコアが突つ伏していた。

「信也君……」

顔を上げたミコアの瞳が、いままで以上に輝いて見えた。うつすらと浮かんだ涙が原因らしい。

「ほら、また君付けする」

「そんなことより、なにか食べ物。おでんの臭いを忘れられるような、美味しくていい香りの食べ物を、ちょうどよいよ」

「おかげで僕はおなかが破裂しそうなぐらい満腹だけじね。そんなことよりも……」

「そんなこと！？ 信也君にとってわたしの空腹よりも大事なことがあるってのー！？」

「ある」

はつきり言つてみると、どうやらミコアは観念したようだった。

「じゃあ、その用事が済んだらなにか食べ物持ってきてよ」

「分かつてるわ。確かリングがあったから、剥いて持ってきてやるよ」

「リング……じゅる」

垂れたよだれを袖で拭う。なにを持つてくるかは黙っていたほう

がよかつた。

「それで、わたしになんの用？」

ようやくミリアはこらいうの話を聞く体勢になつた。やつと話を進められそうだ。

「山倉について聞きたいんだ。山倉は骨折していたせいで、サークル会場から逃げ出せなかつたんだよな？」

「そうだよ。あの足で走るなんて無理だつたでしょ？ からね。それがどうかしたの？」

心の中でガツツボーズをする。僕の予想は間違つていなかつた。

「だったら、山倉が骨折してなければ逃げ出せるはずだよな？」

「そうだと思つけど……」

「山倉が骨折するのは明日なんだ。それも昼休みに階段から転げ落ちたのが原因でだ」

「どういふこと？」

「つまり明日、山倉の骨折を防げばいいことだよ。やつすれば山倉は問題なくサークル会場から逃げ出せる」

ようやくピンと来たのか、ミリアが何度も頷く。だが、すぐにしかめつ面になつてしまつた。

「でもどうやって助けるのさ？」

「それを今から考えるのさ」

「なんだ、ダメダメじゃない」

僕の精神がグサッとナイフで刺されたような感覚に捕らわれる。言つておりだが、そこまではつきりといわれたくはなかつた。特にミリアには。

「とにかく、山倉の骨折を防げば大丈夫だよな？」

自身ありげに尋ねるも、ミリアはなぜか神妙にしている。

「うーん、骨折してるときよりは助かる可能性は高くなるんじゃないかな？」

「なんで断定できないんだよ？」

半ば逆切れ気味に、ミリアに問いかける。

だが、ミリアは冷静な面持ちを崩さなかつた。

「わたし達の知つてゐる未来とこれから起つる未来は別なのよ」「どういふことだ？」

今度はこゝちが、ミリアへと尋ねる番になつてしまつた。  
「わたし達が知つてゐる未来だと、優美ちゃんが骨折して、信也君  
が交通事故で死ぬ。それから、サークル会場で優美ちゃんが、爆発  
に巻き込まれる」

「そうだ。それは変わらないだろ？」

「変わるかもしれないわよ。つていうか、変えなきや優美ちゃんは  
救えないでしょ」

言われてハッとする。当たり前のことが理解できていない自分が、  
恥ずかしくなつた。

山倉を救うといふことは、山倉が死ぬといつ未来を変えるといつ  
ことだ。つまり、僕の知つてゐる未来とこれからの中を、違うも  
のにしなければならないのだ。

「小さい部分まで広げると、今日わたし達は優美ちゃんに会いにい  
つたじゃない？」

「ミリアは会つてないだろ？」

「い、細かいことはいいの！　でもわたしたちが知つてゐる未来：

…正確には過去だけじね。信也君は優美ちゃんの家を訪ねてないで  
しょ？」

「ああ、訪ねてない」

「ほら、もう変わつてるじゃないの」

僕は無言で頷いた。これから先どんなことが起つるか、正確には  
分からぬのだ。

「だから優美ちゃんの骨折を防ぐことが、優美ちゃんの死を防ぐこ  
とに繋がるかもしれないし、繋がらないかもしない。たとえ骨折  
していなくても、何らかの理由で逃げ遅れる可能性だつてある」

「うん、そうだね。ミリアの言つとおりだ」

初めてミリアの話に感動を覚えた瞬間だつた。ここにミリアがい

なければ、僕はとんでもない過ちを犯していたかもしない。そう思つと背筋がゾッとした。

「だけど、変わる未来はわたし達がかわったことだけだからね。今ままだと優美ちゃんは間違いなく骨折するよ」

「でも僕がかわれば、その未来も変えられる」

「そういうこと…わたし達の行為は要約すると未来を変える行為つてわけ」

「ありがとう、ミコア」

頭を深く下げる。顔を上げるとミコアは得意げに腕を組みながら、頷いている。

僕はミコアの部屋を後にして、自分の部屋へと戻った。僕の行為は山倉の死という悲惨な未来を変える行為だ。その第一歩として、山倉の骨折という未来を変えなければならない。

「よし、やるぞ！」

気合を入れて、腕を振り上げる。

直後、入り口を叩く音が聞こえてきた。

「ちょっと、信也君！ リンゴはどうしたのよ！」

高まつていたテンションが、一気に落ちていく。ミコアの空腹なんですかり忘れていたのだ。

約束どおりリンゴを剥いて、ミリアへと渡す。それから自室へと戻り、早めに寝た。

電気を消して、布団へともぐる。山倉の笑顔を思い浮かべながら、僕は夢の中へと落ちていった。

10月23日(一)

十月二十三日 木曜日

授業は完全に上の空だった。先生の声は耳の中をつきぬけ、どこかへと消えていってしまう。

僕はノートを取るふりをしつつ、記憶の整理をしていた。そうしなければ、山倉を救う決定的なチャンスを逃してしまった。

山倉が骨折したのは昼休み

これは間違いなかった。

正確な時間は覚えていないが、僕に山倉の骨折を伝えに来たのが三村である。それも確かだった。

昼食時、僕と三村はいつも一緒に弁当を食べる。三村が弁当を食べ終わり、トイレへ行くと言つて教室から出て行き、僕は教室で待つていた。

それから数分後、三村が山倉の階段から落下したという事実を伝えに、血相を変えて教室へと戻ってきたのだ。

そしてとうとう昼休みになった。だが、山倉を助けるプランはまだ半分しか完成していない。

「なんだ、信也。ボーッとして。山倉のことでも考えてたのか?」

「ああ……」

歩み寄ってきた三村の足元で、ガチャーンと音がする。どうやらちやかすつもりが肯定されたため、思わず弁当を落としてしまったようだ。

顔を上げると、山倉が三村いとしの吉沢を含む数人と、教室を出て行くところだった。

山倉たちはいつも屋上で食事を取る。今日も同じようにして過ごすはずだ。

「お、おい、ちょっと待てよ

三村の制止を背に、山倉へと歩み寄る。

「山倉、ちょっとといいかな?」

山倉が田を見開いて見返してきた。僕の田の前を長い髪が、流れるように通り過ぎていく。

なぜかその横では、吉沢が警戒心を露にしていた。

「ああ、鷹野君。昨日は大丈夫だつた?」

「はつ?」

「いや、修学旅行に行くなとか言つて、その後一人で頷いて帰つたでしょ? 調子でも悪いのかなって」

どうやら山倉に突飛な行動をとる、おかしな人物だと誤解されでいるようだ。

「それはもういいんだ。それよりも、階段の上り下りには注意したほうがいいよ。すべて転んだりしたら危ないからね」

「あ、う、うん……ありがと」

立ち去りながら、山倉はしきりに首を傾げていた。これではおかしな人という認識を強くしただけの気がする。やはり僕が現場に行かないダメだ。

自分の机へと戻ると、三村がポカーンと口を開けて、僕を迎えた。

「なんだよ三村、はどうが豆鉄砲を食つたような顔して

「お前、はどうが豆鉄砲を食つた顔、見たのかよ?」

「いや、見てないけど」

もちろん、三村が言いたかった重点はそこではなかつた。

「お前、いつの間に山倉と仲良くなつたんだよ? ちょっと今まで見てるだけで幸せとか言つて、話しかけるのもやつとだつたくせに」

三村に言われてハツと氣がつく。そういうえば以前は、今のように切羽詰つた状態ではなかつたので、山倉の笑顔を見ているだけで幸せだつた。

だが、そんな悠長にしている暇はない。僕の行動一つ一つが、山倉の命を左右するかもしれないのだ。

「なあ、なにがあつたんだよ? 僕の情報網に引っかかるないなんて……」

「なんでもないって。しいて言えば心境の変化ってやつかな？」「なんだよ、心境の変化って」

小さく微笑んで、三村の質問をかわす。

中界に行つて、少しあは成長したのかもしない そんな気がした。

だが、死んでようやく成長するなど、悲しい話だ。

三村が弁当を広げる。僕は席を立ち上がる、教室から出て行こうとした。

「おい、飯も食わないでどこに行くんだよ」

「後で食べる。今はお腹がすいてないんだ」

「後で食べる時間なんかないだろ。それよりもいい話があるんだ」

「あ、おい！」

僕の肩に手を回し、席へと連れ戻す。自慢の情報について語りだす三村を前に、落ち着きがなくなつていいくのが自分でも分かつた。三村が食事を終えるまでには、まだ時間はある。だからといってギリギリに行って間に合わなければ、田も当たらない。

「おい、聞いてるのか？」

「ああ、三組の足立先生のカツラが数十万するって話だろ？」

正直に言つと、三村の話などまったく聞いていなかつた。だが、僕にとってこの光景は一度目である。

三村は田を丸くして僕を凝視していた。

「いや、今は一組の山下先生と二組の高山先生ができるという噂の話だつたんだけど、どうしてカツラの話、知つてるんだ？ 次に話そうと思つてたのに」

背中にサーケット鳥肌が立つていく。内容は把握していても、話してくれた順番までは覚えていなかつたのだ。

「お前、もしかして俺を超える情報網を持つてんじや……」

「そ、そんなわけないだろ！ ちょっとトイレに行つてくるー！」

追求される前に、教室から飛び出す。三村は僕を追つて来なかつた。

帰つてきながら話を聞けばいいだけで、追う必要はないと判断したのだろう。

ようやく教室から脱出できた僕は、足早に山倉の骨折する階段へと向かった。

ほとんどの生徒はまだ昼食中で、廊下に人影はほとんどなかつた。

「ここだよな……」

屋上へと続く階段の前に立ち、見上げる。山倉たちの姿はなかつた。

空腹を我慢しつつ、階段の手すりへと寄りかかる。時間が分からぬ以上、積極的に動かないほうがいい。

あとは山倉が降りてくるのを待つだけだ。

昼食を取り終わった生徒が、ちらほらと姿を現す。

屋上へと上っていく人影は何人があるものの、降りてくる人影はまだなかつた。

10月23日(2)

緊張から高鳴り続ける動悸が、胸を何度も殴打する。三村の昼食の進み具合から来たほうが、緊張を持続させずにすんだ気がする。だからといって、緊張をきるわけには行かないのも事実だ。

階段を見上げ、ひたすら山倉を待つ。

刹那、階段を猛スピードで下りてくる山倉の姿が現っていた。

「山倉！」

呼んだ瞬間、僕の瞳はあり得ない光景を捉えていた。

それは、山倉の背中を、力いっぱい押す人影の存在だった。すさんだ茶色の髪に、同じような色とツヤの肌。放課後によく屋上でたむろしてゐる、不良連中の一人 隣のクラスの間宮涼子だ。

「えっ？」

僕の呼び声に反応して、動きを止めていた山倉は、次の瞬間には階段から宙を舞つていた。

「きやああー！」

山倉の滑らかな黒髪が、扇状に大きくなびく。

「山倉！」

僕は階段を駆け上ると、山倉の落下しそうな地点で陣取つたつもりだった。

だが、そんな余裕もなく、山倉が覆いかぶさつてくる。

「くっ！」

落下してくる山倉をがつしづとつかみ、安心したのもつかの間だつた。

僕の両足が、あつさりと階段から離れる。山倉が落ちてくる勢いを殺せなかつたのだ。

そのまま山倉と僕の体は、再び空中へと投げ出される。何もできないうま、僕と山倉は踊り場へと落下していく。

「きやうー！」

「んぎゅう！」

僕の体は廊下と山倉でサンドイッチにされた。背中全体を一度に打ち付けた衝撃が肺に響き、僕の呼吸を止める。

喀血したと錯覚するような、乾いた息が口から吐き出された。直後に喉を襲つた不快感が咳を連発させる。

「た、鷹野君！」

目の前にいる山倉が、心配そうに僕の様態を確認する。

「大丈夫！？ しつかりして！」

山倉は即座に僕の体を抱えると、どこかへ向かつて走り出した。情けないうめき声を上げながら、僕の意識は混濁していった。どことなくデジヤヴのような感覚に捕らわれながら……。

気がつくと、視界には白い天井が広がっていた。体を覆うように柔らかな生地の感触がある。

左右を見渡すと、白いカーテンが周りを囲んでおり、辺りの様子を確認することができない。

起き上がろうと体を動かすと、直後に背中とお腹に激痛が走る。その痛みが、ゆっくりと僕の記憶の回路を修復していった。

「山倉！」

絶叫に近い呼びたてが、自然と飛び出す。

すると、閉まっていたカーテンが軽い金属音をたてて開く。そこに山倉の姿があつた。

「鷹野君、気がついたんだね」

婉然と微笑みかけてくる。僕は山倉の足を即座に確認していた。ギブスどころか、シップの一つも張られていらない。

「山倉、骨折とかしてないよね？ 特に足とか」

「うん、大丈夫。鷹野君が下敷きになってくれたおかげかな？」

「そつか。よかつた。本当によかつた。ハハハハ」

こみ上げてきた笑い声を、抑えられなかつた。訝しげに僕を見る

山倉に、大丈夫だと手で合図する。

山倉が僕の寝ているベッドへと、腰をかけた。黒髪の脇からのかく首筋に、僕の心臓が太鼓を連打するかのよつた鼓動を生み出す。

「いじは、保健室？」

「うん。背中を強く打つてるって言つてた。しばらくは痛いだらうけど、安静にしどければ大丈夫だつて、保健の先生が言つてた」

「先生は？」

「職員会議とかで、出て行つたつきりかな」

保健室で山倉と一人つきり 鼓動がよりいっそう早さを増していくつた。

「でも、よくあんなところにいたよね」

山倉はそんな僕の気持ちも知らずに、足をぶらぶらと揺らしていく。

「なんとなく、山倉に危険が迫つてているような気がしてさ」

「フフツ、変なの。昨日のことといい、未来を知つてゐみたい」

「まさか、そんなはずないだろ？」

「そうだよね。単なる偶然だよね」

二人して笑いあいながらも、僕は背筋に冷たいものを感じていた。あまり調子に乗つて語らないほうがよさそうだ。

ともかくにも、山倉の骨折を防げた。助けたといつよりも助けられた感じで格好は悪いものの、結果的には目的は達せられた。これで山倉の死ぬ可能性は低くなつた。確率はゼロではないが、百からは遠のいてくれている。

だが、その原因が山倉の背中を押した生徒にあるところのは、大きな衝撃だつた。

だからも愛されている山倉に、恨みもあるのだろうか？

「本当にありがとうね、鷹野君」

「気にしなくていいよ。それよりも、さつき階段から落ちたとき、誰かに背中を押されてなかつた？」

山倉は意表をつかれたのか、一瞬だけ顔を曇らせていた。だが、すぐさま顔を緩ませると、

「そんなわけないよ。なに言つてるの？」

はぐらかそうとしてきた。少なくとも僕はそう感じていた。

「いや、確かにこの田で見たんだ。山倉の背中を押した誰かがいたんだ」

「気のせいだつて。そんなことされてたら、わたしだつて黙つてないよ」

山倉の信頼を得ていない僕に、本音は吐き出されなかつた。どうにかして信頼を得なければ、苦しみはいつまでたつても山倉を襲い続ける。

僕は山倉に、告白する決心を固めつつあつた。山倉の苦しみを排除するには、信頼できる人物になるしかない。

「あの、山倉」

「ん？ どうかした？」

心配そうに、山倉が僕のようすを伺つてくる。山倉を支えるために、意を決して、告白を口にしようとしたまさにその瞬間だつた。

『支えてくれるつて約束したのに！』

脳裏に靈安室の山倉が、フランク・シユバックする。

『わたしのせいだ。わたしが迎えに来てなんて言つたから！』

「大丈夫鷹野君？ まだ傷が痛むの？」

脳裏で絶叫する山倉と、心配そうに覗き込む山倉が同時に声を発する。

手も当てていないので、心音が聞こえた。

先ほどまでとは違う、巨大な太鼓が力一杯に打ち鳴らされるような動悸だ。

今なら山倉を支えられる。それは確かだ。

山倉は前と同じように、一つの質問をしてくるだろう。それでも同じように、僕の気持ちをぶつければ、山倉の信頼を得られる。

今はそれでいいかもしれない。だが、その後はどうなる？

五日後、僕は死ぬ。たとえ山倉を救えたとしても、絶対に変わら

ない現実だ。

僕が死んだあと、山倉はどうなる？ いたずらに僕が山倉の支えになれば、靈安室の再現になるのではないか？

泣き叫ぶ山倉なんて、もう一度と見たくない。僕が山倉にとつて普通の友達なら、僕が死んでも、深く思いつめたりしないはずだ。ならば、山倉の支えにはならず、命を救うためだけに、全力を尽くしたほうがいいのではないか。

瞬時に結論へとたどり着いた僕は、無理やりに笑みを作っていた。「なんでもないよ」

「そう？ 本当に大丈夫？ わたしにできることがあつたら、いつでも言つてね」

「ありがとう。助かるよ」

お礼を述べると、山倉はベッドから立ち上がつた。その動きにあわせて、バラのよつなかぐわしい香りが漂つてくる。

「そろそろわたし帰らないと。鷹野君はどうする？」

「僕はもう少し休んでから帰るよ。一人でも大丈夫さ」

「そつか。それじゃ、また明日！」

元気一杯に手を上げると、山倉は部屋から去つていった。

「これで、これでいいんだ」

手を振りながら山倉を見送る。込みあがる山倉に対する想いが、一筋の涙となつてこぼれ落ちた。

数分の間を空けてから、僕は教室へと戻つた。すでに教室には誰もいない。

窓から差し込んでくる夕日が、やけに眩しかつた。

荷物をまとめていると、飾られた一輪の花が視界へと入つてくる。再びこみ上げそうな想いを振り切ると、僕は教室から飛び出していた。

学校を出た後は、背中の痛みも忘れて帰路を駆け抜ける。

僕の行動は間違つていない そう胸中で連呼しながら……。

10月23日(3)

家の前で息を整えてから、念のために瞳を拭つた。袖に残った小さな染みが、正しい判断だつたと教えてくれる。

「ただいま」

「おう、お帰り」

家に入ると、母さんが出迎えてくれた。ミリアの姿は見当たらぬい。

ミリアについて聞いて口を開くと、それより早く母さんが尋ねてきた。

「信也、美利亜をみなかつたか？」

「姉さん、まだ帰つてないの？」

「ああ。遅くまで出歩くなつて口がすっぱくなるほど言つてゐるのに、なにを聞いてんだかな。まったく、鍵をかけて外に締め出してやろうか」

天井を見上げて、僕はため息をついた。母さんを怒りせるとこ

行為が、どんな災難を呼ぶか、ミリアは分かつていないので。

だいたい、僕のサポート役として来ているミリアに、出歩く用事などないはずだが。

「信也、悪いけど探してきてくれないか?」

「僕が?」

「いいだろ? どうせ暇なんだし」

暇ではない。勉強はどうでもいいが、山倉を救うために全力を尽くすという使命がある。

かといって、ここで母さんを敵に回すのは頭のいい行動とはいえない。

「わかった。行って……」

僕が嫌々ながらも承諾しようとしたところで、背後から扉の開く

音がした。

当然、帰つてくる人間は一人しかいない。

「ただいま！」

元気よく、そしてタイミング悪く、ミリアが帰宅の挨拶を飛ばす。予想通り、母さんの力ミナリがミリアへと落ちていった。

「美利亞！ こんな時間までどこまつつき歩いてたんだ！」

「えっ？ 信也もいま帰つたんじや……」

「信也は学校に行つてたんだ！ いつまでもぶらぶらしてお前とは違うんだよ！ 罰として明日は外出禁止！」

「えっ、えええ！？」

元気一杯だつたミリアの顔が、いつきにしほんでいく。エンマ様に罰について宣告された場面の再現だ。

「まったく、この年齢になつてまで外出禁止を使うとは思わなかつたぞ！ 信也も言つことを聞かないほうだつたが、美利亞は輪をかけてひどい！」

確かに僕も、よく外出禁止を受けた。

大抵は僕のいたずらが原因だったが、たまに母さんの虫の居所が悪かつたために、理不尽な外出禁止を食らう場合もあつた。

その内容は単純明快で、外出してはならないといつもの。学校にも行けない。

そして母さんが仕事で家にいなくても、僕が外出すれば、すぐに察知する。その理由は未だに解明されていない。

だが、そんな罰を受けていたのも小学生まだだ。

中学生になつてからは、母さんの恐ろしさを悟つており、無意味ないたずらなどしなくなつた。

「いいか、もう何度も言わせるな。早く家に帰れ！ 働いてわたしに樂をせろ！ わたしの言つことを素直に聞け！」

「何度もつて、言われたことないのに……」

「なんか言つたか！？」

体を震わせながら、涙目で頭を乱雑に振りまくる。

ミリアの整つた黒髪が、僕の顔に当たつているにも気がつかず。

「とにかく、今日はもう夕飯を作る気分じゃない」

「あちや……」

「信也、なんか言つたか！」

僕も負けじと、全力で首を振つていた。

「カツチラーメンでも食べとけー。ちゃんと片付けもしろよー。」

母さんは鼻を荒々しく鳴らすと、自分の部屋である居間へと引っこ込んでいった。

勢いよく閉められたふすまが、ビンタのよつなするビンタ音を発する。

「信也君のお母さん、すいねえ……」

ようやく母さんの雷から解放され、ミリアが顔全体をふくらませてこころ。

「まったく、こつちはいい迷惑だよ。ミリアのせいに夕飯がカツチラーメンになっちゃったじゃないか」

「わ、わたしのせいなの？」

「機嫌が悪くなると、母さんは『飯を作らないんだ。そんな時は、決まってカツチラーメンなんだぞ』『カツチラーメンって……なに？』

予想外の反応が返ってきて、一步だけ足を引いてしまつた。どうやら中界にカツチラーメンはないようだ。

「つたく、食べさせてやるよ」

ダイニングキッチンへと移動すると、ミリアを席へと座らせる。カツチラーメンを一つ持ってきて、お湯を入れる。その後三分待つてから、蓋を開けさせた。

「わふっー。」

興味津々で覗いていたミリアの顔を、濃厚な湯気が襲い掛かる。

あたふたしてゐるミリアに苦笑しながら、先に食べる。まずはないものの、手料理に比べれば、どうしても劣ってしまう感が否めなかつた。

だが、ミリアは初めて食べたカツラーメンに舌鼓を打っていた。  
「美味しいじゃない！ しかもお湯入れるだけでいいなんて。仕事に疲れた夜にはピッタリね」

丸い瞳を細長く伸ばし、「ううとり」としている。

はたから見ればモデル級の美少女であるミリアが、カツラーメンで感動している。そのギャップが妙におかしかった。

食事を終えた僕たちは、素早く一階へと上がった。もちろん片付けは済ませてある。

僕が自分の部屋へと入ると、ミリアが続いて入ってきた。

「どうかした？」

尋ねると、ミリアは手を吊り上げていた。

「どうかした？ ジヤないでしょ！ せっかく今日も信也君に協力してあげようとしてるのに！」

また弟に君づけしている。だが、何度も無駄のよつなので、諦めた。

「今日は特にないよ」

「報告とかあるでしょう？ 例えば優美ちゃんの骨折は防げたの？」

「ああ、それは大丈夫だよ。ただ……」

「ただ？」

僕は黙っていた。ミリアが顔を覗きこんできても。

「どうしちゃったのよ。急にしおらしくなっちゃって。優美ちゃんを必ず救うって宣言したのは嘘だったの？」

無意識の中に、僕はミリアをにらみつけていた。ミリアの得意げな笑顔が怯えへと変わる。

嘘なわけがない。山倉を救いたいという気持ちはいまも同じだ。なのに、心の中心に空洞が開いているのはなぜだ？

「なあ、ミリア」

「なに？」

「僕は、あまり山倉と仲良くしない方がいいよね？」

「なんでもうなるわけ？」

ミコアが困惑しながら、逆に聞き返してきた。そこで保健室の出来事と考えをミコアへと伝えてみた。

ミコアなら僕とは違う答えを出せるかもしれない そう期待しながら。

「簡単なことじゃない。優美ちゃんを見守りながら、仲良くならなければいい。信也君の言つ通りだと思つよ」

「そう、だよね。だけどなにかしつくつこないんだ」

「なにがしつくつこないのよ」

「いや、なんだろうな。自分でも分からんのだ」

「なによそれ、変なの」

ミコアが勢いよく、ベッドへと腰掛ける。

はつきりしない態度の僕に、いらっしゃっているようだ。

「もしかしてさ、優美ちゃんの気持ちとか関係なしに、信也君が仲良くしたいだけじゃないの？」

またも脳裏に衝撃が響いた。ミコアの何気ない一言は、いつも僕の脳細胞を活発にさせてくれる。

僕と仲良くなれば、山倉は苦しむ可能性がある。そういうのなら、山倉と距離を置けばいいだけの話だ。

だが、それを僕の心は拒否している。せめて一週間だけでも、山倉との思い出を作りたい。

それが心に空洞を作つていてる理由 交通事故で死んでしまった僕の未練なのだ。

「どうしたいのかは知らないけどや。あまりいろいろなことに手を出すと、肝心の優美ちゃんの命を救うつていう、最初の目的がおろそかになるよ。今は自分のやるべきことをやれば、それでいいんじゃないかな？」

ミコアのいつとおりだ。山倉との恋愛にかまけていいる場合ではない。

肝心なのは山倉を救うこと。その一点だけだ。

「うん、ありがとうミコア。なんだかふつきたよ

「まったく、信也君たら、わたしがいなににもできないんだから

子どもをあやすよ、ていつも、微笑むミリア。抗議したいのは山々だつたが、確かに今の時点ではミリアの言った通りだ。

きっと中界での経験が、生きた人間には理解しがたい死者の心理を、容易に汲み取らせるのだろう。

「困ったときはいつでも相談しなさいよ。わたしは信也君のパートナーなんだから」

「頼りになるパートナーで助かるよ」

「……なんか、言い方に棘があるような」

「ないない。本当に頼りにしてるって」

燐然としながらも納得したのか、ミリアは部屋から出ていった。ミリアを見送ると、僕は机の上のパソコンを立ち上げて、調べ物を始めた。

山倉と仲良くならずに守ること、まず山倉を突き落とした奴らをどうにかするべきだと考えたのだ。

僕の調べ物が効果を発揮すれば、山倉に手を出すものはいなくななるし、発揮しなくともハッタリにはなる。

調べ物をノートに書き込みながら、頭へとつめこんでいく。寝る前にもベッドの中で復唱した。

明日の行動次第で、また未来は変わる。山倉を救うための未来が、着々と形成されていくのだ。そう考えると、興奮してあまり眠れなかつた。

十月二十四日 金曜日

学校の授業は瞬く間に過ぎていき、放課後になつた。

はつきり言つてしまえば、すぐに死ぬ身として、勉強をする気が起きなかつた。勉強などする暇があれば、山倉を救う術を考えたほうが、有意義に過ごせる。

今日の目的は、すでに決まつている。家に帰つたり、部活に出る生徒が、昇降口へと向かう中、奴らは人気のない場所 体育倉庫へと集合する。

奴らとは、この学校のはぐれ女子の集まりだ。山倉を突き落とした間富涼子もその一人になる。

学校の生徒達は、奴らが放課後に体育倉庫へと集まると知つている。女だからと甘く見ると、痛い目にあうことも。

部活動に使う道具の数々も、いまは部室へと押し込められているところだ。

だからといって、僕はひくわけにはいかなかつた。

連中が、故意に山倉へと嫌がらせをしているならば、それを止めなければならない。

「よしつ！」

気合を入れると、僕は体育倉庫へと向かつた。一度は死んだ身だ。なんでも来い と何度も呟きながら。

体育倉庫の建物が見えてくる。同時に、見慣れた人影が体育倉庫の前でうろうろしているのが目に入つてきた。山倉である。

山倉は入り口の前をいつたりきたりして、ノックをしようと手をかまえた。その動きが止まり、またうろうろし始める。

どうやら山倉も僕と同じ考え方らしい。

だが、僕一人でならともかく、山倉一人はさすがに無茶だ。

「山倉？」

何も知らないフリをしつつ、声をかける。

「う、うあああ！ な、なんだ。鷹野君か。ど、どうかしたの？」  
わかりやすい動搖の仕方だった。まるで猫にみつかったネズミの  
ようだ。

「山倉じゃ、こんな所でなにしてるの？ これは変な噂が多いから  
近づかないほうがいいよ」

「う、うん、分かつて。だけど……」

「気まずそうに僕の顔を伺いながら、たまに体育倉庫へと皿をやる。  
その潤んだ瞳が、僕の決意を強いものにしていた。

山倉を落ち着かせるようと、僕はできるだけ安らぎを山倉へ、  
柔らかく微笑むと、山倉の手を握った。

「それじゃあ、行こうか」

「えつ？ どこへ？」

「体育倉庫の中さ。間宮涼子に話があるんだろ？」

一度はおびえた目つきになつた山倉も、最後には深く頷いていた。  
錆びた鉄の扉を開ける。戦車の走行のような仰々しい音をたてて、  
ゆっくりと開いた。

中からカビとたばこの混じつた、異様な臭いが漏れてくる。僕と  
山倉は顔をしかめていた。

「あれ？山倉じゃない。そつちは鷹野？」

「来るところ間違つてない？」

そんな言葉が、体育倉庫の中から聞こえてくる。

開いた扉から差し込む光が、体育倉庫内を部分的に照らす。

そこには女生徒四名の姿があった。全員が全員、こちらをにらみ返している。間宮涼子の姿はもちろん、連中のリーダー格である亀山春香もいる。

他の三人は学校の制服だが、亀山だけは派手な色彩の私服で身を包んでいた。

亀山は親が暴力団だという噂で、学校指定の制服などに身を包まず、気分で服装を変えてくる。

それを見ても、先生たちは遠巻きに見るだけで、注意をしそうともしなかった。

一步、前に出ようとすると、すると山倉が手を出して僕を止めた。自分一人で説得するつもりなのか。とりあえずは山倉に任せた。

「間宮さん。あなたに話があるの」

「あたしに？ なんの話さ」

全員の視線が間宮へと集中する。それでもまったく悪びれていな

い間宮に、僕は自然と拳を握り締めていた。

だが、山倉はまったく気にしたようすもなく続けた。

「昨日、わたしのこと突き落としたよね？」

「ああ？ 変な言いがかりはよしてよ」

「ふざけないで！ あなた自分がなにをしたか分かつてるの！？」

打ち所が悪かつたら死んでたかもしれないのよ！」

錐でえぐられるような衝撃が、僕の心臓へと響いた。山倉にはど

んな理由があるうと、死という言葉を口にしてほしくない。

「ゾツとしたわ。落ちた直後に階段を見上げたら、間宮さん笑って

た。人を突き落として笑えるなんて、神経を疑つちやう！」

間宮たち四人はお互いに顔を見合わせて、大口を開けて爆笑し始めた。

「な、なにがおかしいのよ！」「

「だつたらさ、証拠はどこにあるのさ？」

「しょ、証拠……」

山倉の動きが止まる。「こは僕の出番のよつだ。

「証拠はないが、証人ならいふ。山倉が間宮に突き落とされる瞬間を僕は見たんだ」

一瞬にして、間宮の顔色が変わった。

「み、見たつて証拠はないだろ？」

「ああ、だけど僕が現場にいたのは、あの場にいたものならだれでも知ってる。もしかしたら、僕以外にも間宮の残虐非道な行動を目についた人がいるかもね。三村に任せれば、その程度の情報、一時間で見つけてくれるだろ。知ってるよな？ 校内のニュースキャスターと呼ばれる三村だよ」

淡々と告げると、間宮がおびえた顔つきになり、助けを求めるよう他の三人の顔を次々と見やつた。

やはり山倉を落としたのは、間宮の単独行動ではなく、全員一致の謀略だつたようだ。

「いいが、一つ言つておく。今後、山倉に手を出したら、絶対に許さないからな」

「へえ、やけにその女に入れ込むんだね」

「もしかしてその女のこと、好きなんじやないの？」

締まりのない笑い方で、勝手に盛り上がる四人に、僕は頭に血が上つてしまつた。

「ああ、そうだよ！だからなんだつていうんだ！ お前らのやつてることは立派な犯罪なんだぞ！」

四人が同時に笑いを止める。相手の動搖が功を奏して、心中が余裕で包まれていつた。

「傷害罪って知ってるよな？人に傷を『与える罪』さ。確か十年以下の懲役、または三十万以下の罰金だ」

僕は昨日インターネットで得たばかりの知識を、四人にぶつけた。罪の意識のない奴らに罪の意識を生まれさせるには、正確な罪状を突きつければいいのではないか そう考え、前もって調べていたのだ。

「何を言つてるのよ！ その女は怪我なんてしてない！ 傷害罪になんてならないわ！」

慌てふためいた間宮が、必死の形相で僕に訴えてくる。それこそが僕の狙いだと、気づかずに。

「傷害罪にならない？ それって自分がやつたつて認めてるのか？」

「えつ……」

「だつて、そだろ？ 怪我をしてないから傷害罪じやないって言うなら、怪我をしてたら傷害罪だつて認めるつてことだろ？」

「……」

がつくりとうなだれる間宮。

仲間の失言に、亀山はいら立ちをぶつけるよう舌打ちをしていた。「それに、たとえ怪我をしなくても、怪我をさせようとした行為だけ立派な暴行罪になるんだよ。確か一年以下の懲役……」

「もういい

吐き捨てるように、亀山がつぶやく。女性にしては低く、ドスの利いた声だった。

「もう山倉には手を出さない。そつちも間宮のこととは黙つてこる。それですべてでは解決つてことだろ？」

「そうこうひとと」

「さつあと逆えろ。目障りだよ

「そうさせてもらつよ」

山倉を連れて、体育倉庫を後にしようとする。山倉も一度は足を進めるも、入り口付近で止まってしまった。

「なんだい？」

睨みつけてくる山倉に、亀山は不敵に微笑んでいた。

「わたしに手を出さなくとも、他の子に手を出すんでしょ？」

「さあね」

「とほけないで！　虐めなんてやつて、いつたいなにが楽しいのよ！　あなたも一度、いじめられる側の立場になつてみればいいんだわ！」

「くく、くははは！」

男のように、野太い笑い声だった。亀山は立ち上がり、ゆっくりと山倉に近づいていく。

「やめる！」

「心配するな。手は出さない」

間に入る僕を押しのけ、山倉の目と鼻の先にまで顔を近づける。

山倉は一步も引かなかつた。だが、足は震えていたし、涙も目に溜まりかけていた。それでも逃げずに、力強く口を一文字につぐんでいた。

「わたしに手を出してきたら、ぶちのめしてやるだけだよ」

「そ、そうやって、暴力ですべてを解決しようとして！」

「わたし達に虐められたくない奴は、強くなればいいのさ。男でも女でも。そうすれば誰からもいじめられずに済むって寸法さ」

「そんなに強いなら、弱い者の味方になつてあげればいいでしょー」「くつくつく、はつはつは！」

笑いながら、亀山は山倉の肩を叩く。周りの取り巻き達は分けも分からず、顔を見合せているだけだ。

「気に入つたよ、山倉優美。そんなに虐めをやめてほしいなら、お前がわたし達を監視したらどうだ？」

「わ、わたしが？」

「わたし達はお前には手を出さない。約束したからな。お前が体を張つて、いじめられている生徒を見つけて、止めればいいだろ？　わたし達はわからないように、つまくいじめる。おまえはわたし達がいじめないよう監視する。面白そうだろ？」

「そ、そんな。まるでゲームみたいに……」

「ゲームさ。わたし達は毎日が退屈なんだ。退屈だからいじめをする。ただそれだけなのさ」

「そんなの……絶対に許さない！」

「ああ、そうだろうな。じゃあ楽しみに待ってるよ。あなたがわたし達を止めるのをね」

元の位置に亀山は戻ると、僕達に向けて手の甲で何度も払つしぐさをする。もう帰れという意味だらう。

「行こう、山倉」

「いいわ、絶対に止めてみせるから！ 覚悟してなさいよー。」

山倉の宣告が終わるか終わらないかぐらいで、勢いよく扉が閉まる。

僕は緊張をほぐすために、ゆつくつと息を吐いた。心音は未だ治まるることを知らない。

「鷹野君。その、『めんね？』ありがと」

声をかけてきた山倉に、僕は返事の代わりとばかりに微笑んだ。

「どうつてことないよ。これくらい」

口とは反対に、足は震えていた。

自慢にもならないが、ケンカには自信がない。逆ギレでもされたら、たとえ女子が相手でも醜態を晒していただろう。

「そんなことより……あんな約束して、大丈夫だったの？」

「うん……ああでも言わないと、わたしのような目にあう子が増えていいくだけだから。大丈夫、なんとかなるよ」

苦笑いを浮かべる山倉に、自信という色は伺えなかつた。それでもうだるつ、これから毎日のように、海千山千の亀山たちと戦わなくてはならないのだから。

「鷹野君こそ、大丈夫？ あいつらに狙われたりしないかな？」

「そうなつたら、山倉に助けてもらつってことで……」

冗談交じりにいうと、一人の口から笑い声が漏れ始めた。僕は大口を開けて豪快に、山倉は口に手を当てた清楚な笑い方だ。

「じゃあ、帰ろうか。明日から大変だうけど、僕もできることは手伝うから」

「うん、ありがとう！」

山倉と二人で教室へと戻る。

教室内には一人の生徒がいたものの、僕たちと入れ替わるように外へと出ていった。

10月24日（3）

荷物を鞄へとまとめていると、すぐ横に山倉が立っている。僕と山倉の席は離れているはずなのだが。

「山倉、もう帰る準備できたの？」

「うん、鷹野君に一つ聞きたいことがあつてや」

「聞きたいこと？」

荷物まとめを一時中断して、山倉と向かい合つ。山倉は両手を背中へと回して、うつむいてくる。頬が少し赤らんで、いつも見えるのは氣のせいだろうか？

「さつを言つたこと、本当のかなつて」

「さつを言つたこと？」

「ほら、亀山さんたちにさ……」

その続きを唇を噛むだけで、山倉からは発されなかつた。

亀山たちとの言動を一つ一つ振り返る。

そして山倉の差している言葉がなにか気がついた瞬間、僕の顔が一瞬にして燃え上がつた。顔全体が湯たんぽになつたような、そんな感覚だつた。

「あ、あれは、その、売り言葉に買ひ言葉つてやつで」

「じゃあ、でまかせだつたの？」

「や、そういうわけじや……」

「」もつてこると、山倉は隣の席へと座つた。

「あのね、鷹野君」

「うん」

「わたし、今まで好きな人つて、いなかつたんだ」

山倉は僕と田を合わせようとしたはず、独白のよつてどんと続けている。

「何度も告白されたことはあつたけど、いつも断つてた。だれを信じいいかわからなくて。わたしが狙われることを知つて、きち

んと助けてくれるのか、本当にわたしを想ってくれているのかって。見せ掛けじゃない、本当のわたしをね」

狙われているというのは、亀山や間宮たちのことだろう。見せ掛けじゃない本当の自分とは、胸に秘めた苦しんでいる自分 病院での山倉に違いない。

「だから、ずっと、ずっとね、だれも好きにならなくていいと思ってたし、だれにも好かれなくていいと思ってた。一人で生きてけば、だれにも迷惑かけなくてすむから。だけど……」

一度口を塞いだ山倉は、顔を上げて僕の顔を見返してきた。

涙が、こぼれていた。

「今日、初めて人を好きになっちゃった」

流れる涙をそのままに、山倉は口元を緩めていた。僕の胸に、その笑顔が刃となつて突き刺さる。

「その人は足が震えるほどの恐怖をかかえながら、わたしのために戦つてくれた。わざわざ法律まで調べて、狙われてるわたしを、救つてくれたの」

一度だけ涙を拭い、なおも続ける。

「その人の背中をずっと見てて、すごく頼りがいのある人だと思った。本当にわたしのことを愛してくれてるんだって、感じた。きっとその人なら、わたしを苦しみから解放してくれる。本当のわたしを知つても、変わらず接してくれるって。初めて男の人を信用できただの」

山倉が席から立ち上がり、おぼつかない歩みで僕の方へと近寄つてくる。

僕が山倉の肩を支えてあげる。

山倉の体は震えていた。今度は手だけではない。全身に渡つて震えていた。

「その人つてだれか、わかるよね？」

無言のまま頷くと、山倉は僕の胸に顔をうずめてきた。

山倉の体は、病院の時よりも華奢だった。少なくとも、僕にはそ

う感じられた。

「好きなの、鷹野君。できたらわたしと付き合つてほしい。あのときの言葉がでまかせでも本当でも、わたしの心は変わらない。だつて、こんなにも胸が苦しい。こんなにも鷹野君が愛しいから……」山倉が両手で、制服を力強く握り締めてくる。だが、僕にとつては制服ではなく、心臓を握り締められたかのような感覚だった。僕が山倉の支えになれば、靈安室の再現になる。もつ結論は出でいたはずだ。

だが、今回は病院のときは違う。僕が山倉に告白したのではなく、山倉が僕に告白してきたのだ。

「ここで告白を無碍に断れば、それだけで山倉は傷つくなつた。場合によつては泣き叫ぶかもしれない。

心の葛藤が、繰り広げられる。いつたいどうすれば、山倉も僕も救われるのだろうか。

そのとき結論を出したのは、心の空洞だった。頭ではわかっていても、心では山倉との思い出がほしかつた。  
そんな想いが、背中を強く押していた。

「うん、いいよ」

「鷹野君！」

「いつもからお願ひしたいくらいだよ。わざと僕が亀山たちに言つた言葉は、嘘でもなんでもないんだから」

山倉の手から力が抜けて、今度は僕の背中へと回してきた。僕も同じように、山倉を抱きしめる。

「ありがと、鷹野君……わたし、わたし」

「山倉を支えてみせる。山倉の笑顔が好きなんだ。絶対に悲しい顔なんてさせないから」

「わたしも鷹野君に悲しい顔なんてさせないよ。だからずっと、ずっと一緒にいてね」

「すつと一緒に、それは僕にとって、重たすぎる言葉だった。

だからといって、ここで山倉を突き放すわけにはいかない。

どうにかして、僕が死んでも山倉が泣かずに済むよう、思慮を張り巡さなければ。

「そうだ！ 良かつたら今日の夕飯、わたしの家に食べに来ない？ これから一人を祝して手料理を『駆走するよ！』

「えつ、いいの？」

「もちろん。家にはだれもいないから、遠慮しなくてもいいよ」快く承諾すると、山倉は僕の手を引っ張った。早く家に向かいたいのだろう。

「あつ、山倉」

「なあに？」

「荷物、持つて帰らないの？」

尋ねると、山倉は口を大きく開けた後に、照れ笑いをした。

「いけない。ちょっと待つててね」

自分の席へと戻ると、あたふたと鞄に荷物をまとめ始めた。僕も途中までだつた荷物の整理を終わらせる。

「それじゃあ、行こつか

再び僕の手をつかみ、足早に教室から飛び出していく。まるで貨物列車のように、僕は引かれるだけだった。昇降口で靴を履き替えて、さらに引っ張られる。男性としては情けないが、山倉は僕よりもパワフルだった。

そして山倉の家までたどり着く頃には、僕は肩で息をしていた。山倉のペースは、僕よりも数段はやいペースだったのだ。

「さつ、ついたよ……鷹野君？」

ようやくそこで、僕の異変に気がついたのだろう。怪訝な面持ちで顔を伺つてくる。

「やま、くら、足、速いね」

息も絶え絶えながら、できるだけ微笑みつつ尋ねる。頭を搔きながら、申し訳なさそうに答えてきた。

「毎朝五キロ走ってるから。ごめんね？ 嬉しそうで前しか見えなかつたの」

「いや、いいよ。大丈夫、だから」

ふらつきながら、山倉宅の塀へと寄りかかる。普段から周囲に気を配っている山倉が、

僕しか見えなくなる。それだけ愛されているという氣概が感じられた。

「それじゃあ入るっか」

山倉に続いて、僕も中へと入つていく。家の中に入るのは、当然のことく初めてだ。

アコー「ティオンドアを抜けると、玄関へとのびる道を木々が囲っている。

「庭は全部森なの？」

「そんなことないよ。木で囲まれてるのは入り口の両脇だけ。庭は芝生が張つてあって、田向ぼっこすると気持ちいいんだよ」

「へええ」

感心しながら、木と木の隙間に目をやる。確かに奥のほうには緑のスペースが広がっていた。野球場の外野を思い出させる。

「鷹野君」

振り向くと、山倉が腰をかがませて、上目遣いで微笑んでいた。

「一緒にひなたぼっこしようよ」

「いいね、しようしよう！」

「決まり！ 今日はもう口が暮れるから、また今度ね！」

それだけ言って、玄関へと向かつて再び歩みを進めた。

また今度……山倉の何気ない言葉が胸に刺さるのは、これで何度目だろうか。

僕に今度はあるのか？ そんな想いが脳裏をよぎる。

それを打ち消すように首を振ると、僕は山倉の後を追いかけていった。

林道を進んでいくと、目の前に噴水が姿を現した。その周りをぐるっと回つて、ようやく玄関が姿を現す。

玄関から家の中に入ると、中は洋風の屋敷だった。両脇に伸びていく道は、その先がどこへ通じているのかすら分からない。

正面に見える一階へと上る階段は、大人が五、六人、並んで歩けるような広さだ。

間取りという点では僕の家に似てるかもしれない。もちろん、スケールは段違いだが。

吹き抜けになつてゐる天井から、下がつてゐる電灯は、どうやら

シャンデリアをモチーフとしているようだ。

火は使つてないが、ろうそくの形をした電灯が、玄関を照らしている。

「ひつちだよ、鷹野君」

山倉が靴を脱いでスリッパを履くと、左の通路へと入つていく。僕も同じようにして、一步を踏み出ると、ふわふわの絨毯が僕を出迎えてくれた。

山倉の行つた先は、どうやら談話室のようだつた。革張りのソファー、巨大なテレビ、数百冊はゆうに並ぶであろう本棚、厚さが布団並みのカーペット どれをとっても一般人である僕には無縁のものだ。

「すぐ作るから、ちょっと待つてね」

制服の上から赤いエプロンをまとい、髪をゴムで結んだ山倉が姿を現す。ただの制服姿とは違い、母性的でおしとやかな魅力を感じさせた。

「鳥のから揚げだけど、大丈夫?」

「うん、大好きだよ」

「よかつた。テレビでも見て待つてね」

制服の袖を捲り上げてから、部屋を出て行く。どうやらその先にはキッチンがあるらしい。

言われるままにテレビをつけた。どのチャンネルを見ても、同じようなニュースをやつてゐるだけだ。

僕はテレビを消してから、ソファーに体重を預けた。ソファーの柔軟さが、張り詰めていた疲れを吸収していく。

「そうだ。電話貸してくれない?」

山倉に声をかけると、すぐに山倉は僕の前へと姿を現した。

「電話? 別にいいよ。すぐ持つてくるね」

山倉はそそくさと、姿を消してしまった。

待つてゐる間に近辺を探すと、電話はすぐ側にあつた。レトロ風

の黒いダイヤル式の電話だ。

わざわざ今の時代に使っているのは、お金持りとしての道楽なのだろう。

とほこつものの、勝手に使つてはいけないだりつと、山倉が戻つてくるのを待つた。

すぐさま戻ってきた山倉の手には、電話の子機が握られていた。こちらは普通の、特に特徴もない市販されている子機だ。

「はい、これ使って」

「これじゃダメなの？」

そばにあつた電話を指差すと、山倉の口がへの字に曲がる。

「それはお母さん用の電話機なの。わたしの家は電話番号一ひとつてね。一つがお母さんの、もう一つがわたしのなの」

「山倉が電話するときは、自分の電話機じやないとダメなの？」

「そう。お母さんの電話を使うと、すぐ怒られるのよ」

「ふーん、滅多に帰つてこないのに？」

山倉の顔が一瞬にして凍りつき、その場に嫌な沈黙が流れる。

その沈黙の意味に、僕はまったく気がつかなかつた。山倉の言葉を聞くまでは。

「お母さんが滅多に帰つてこないなんて、よく知つてるね」

背中に走る冷や汗と、髪を逆撫でする寒気が、あつとこつ間に全身を襲つた。

形容しがたい衝撃が脳裏を貫き、僕の意識を飛ばそうとする。それにからうじて耐えながら、どうにか相槌を打つた。

「うん、まあね」

「だれにも話してないはずなんだけどな。それも三村君からの情報

？」

「そんなとこかな。それより料理大丈夫？」

今の話題を一段落させるべく、話を別の方向へと向けようと試みた。

企みが功を奏し、山倉の質問攻めは中断された。

「いけないっ！ 火に油をかけっぱなしだった！」

それだけ言い残して、山倉は台所へと走り去つていった。

「ふう、骨折した山倉から聞いたなんて、言えないもんなあ」

山倉から受け取った子機に、自宅の電話番号を入れる。

すぐに呼び出し音が聞こえてくる。五度のホールのあと、受話器

の外れる音がした。

相手はミリアだった。

「はい、ミリアです」

「鷹野です……」

第一声から、頭痛が始まるポ力をやつてくれる。頼りになるのかならないのか、まったく分からぬ困った相棒だ。

「信也君？」

「ああ、母さんいる？」

「いや、まだ帰つてきてないよ。信也君こそまだ帰らないの？」

だらけた口調から、退屈なミリアの現状が伝わつてくる。

そういえば今日、ミリアは外出禁止を命じられていた。

「できるだけ早く帰るよ。とりあえず母さんに晩御飯はいらないとだけ伝えておいて」

「もしかして……優美ちゃんのところ？」

ミリアの勘の鋭さに、僕は息を呑んだ。昨日の今日で仲良くしているなどとは言いつらかつたが、嘘をつくわけにもいかない。

「ああ、そうだけど……」

僕が恐る恐る話すと、突然にミリアは声を荒げていた。

「ダメよ信也君！ 優美ちゃんと仲良くなっちゃダメ！」

明らかに昨日とは違う。僕と山倉が仲良くすると悪いことが起ころといった、確信を得ている言ひ方だった。

「なんでダメなんだよ？」

「そ、それは、その……理由はエンドマ様に喋るなって言われてるから

「なんで喋つちやいけないんだ？」

「う

「ハンマ様の判断だから、ダメなものはダメなの。」(めんね、信也君)

ローリーもミリアは、なにかを隠している。それは間違いないだろう。

だが、ミリアの言い分にて、僕は従うしかなかつた。

エンマ様の言い分なら、ミリアも従うしかない。僕が直接エンマ様に聞こづにも、中界へと行く術を知らないのだ。

「理由を言えないのは分かつた。だけどミリア、山倉を放つておぐわけには、いかないんだよ！」

「信也君！――

僕はミリアの反論を聞かずに、電話を切つた。ミリアが隠すこととなると、きっと未来に関係している事象なのだろう。

僕と山倉が仲良くすると、山倉を救える可能性が下がるのかもしれない。

だからといって、いま山倉を拒絶するなどできるだらうか？ 僕に救いを求めてきている山倉を、見捨てるなんて……。

「どうかしたの？」

ミリアの制止と僕の意見が、脳裏で水掛け論を繰り返していると、心配そうに山倉が声をかけてきた。

「いや、なんでもないよ

「本当？」

「

不満げに顔を曇らせながら、再び台所へと戻つていった。

すべて話せたら、どれだけ楽だらうか。

そんな無意味な想いが、ふつふつと生まれてくる。  
「おまたせ！」

次に台所から、山倉が戻つてくると、ウーハイトレスのよひこ、お盆に乗せた料理を持っていた。

皿の上にはレストランで並んでそうな鳥のから揚げと、付け合せにレタスとブチトマトが乗つていた。

塩コショウの匂いが、鼻の奥を刺激する。

「おいしそうだね」

「へへっ、腕によりをかけて作ったんだよ。味にはあんまり自信ないけど」

焼き立てのご飯を茶碗に盛つて、僕の前へと置く。

「それじゃあ、いただきます！」

「どうぞ、召し上がれ！」

鳥のから揚げに、僕は遠慮なくかぶりついた。口の中に生臭い、異様な味が広がっていく。

「どう、おいしい？」

「う、うん、おいしいよ」

山倉に聞かれ、僕はとつそに頷いた。くじくじした皿を輝かせ、山倉が胸を弾ませる。

だが、正直に言つと、山倉の手料理は壊滅的にまずかつた。

見た目も匂いも完璧なのに、なぜこんなに味が悪いのか。

疑問に思つていると、鶏肉の骨が真っ赤に染まっているのが分かった。

「どうやら火が通つていないうしー。

「本当においしい？」

「うん、もちろん」

「本当に、本当においしい？」

「大丈夫だつて。よくできるよ」

少し躊躇していた山倉の面持ちが、太陽のように明るくなつていつた。

「よかつた！ まずいつて言われたらどうしようかと思つてたよ」  
山倉は皿に盛られた鳥のから揚げを、躊躇なく食べ始めた。平気なのだろうか……。

そういえば何かの本で、毒物でもごく少量ずつ摂取していくと、その毒物に対する耐性ができるという話を聞いたことがある。

火の通つていらない鶏肉も、同じ原理なのだろうか？

「あの、鷹野君？ おなかいっぱいだつたら残してもいいからね？」  
突如山倉が申し訳なさそうに述べた。思考中に手を止めていたので、お腹いっぱいだと思つたらしい。

「大丈夫。おなかはペコペコれ」

「そう……」

山倉はそのままつづみにしてしまつた。心なしか山倉の皿が、潤みはじめた気がした。

「どうかしたの？」

「い、いや、なんでもないよ。美味しいって言われて嬉しかったからさ」

「大げさだな、山倉は」

「そ、そんなことないよ……」

山倉はそれ以上何も言わずに、食事を続けた。僕も負けじとから揚げを食す。お腹がペコペコだと言つた上に、美味しいと宣言したのだ。残すわけにはいかない。

ご飯を同時に食べることで、どうにかして口中の生臭さを緩和させながら、無事に完食する。もちろん、無事だというのは今の話であつて、これから先はどうなるか定かではないが。

「ん」「ごちそうさま」

安堵感からか、自然と息が漏れていた。

「お、お粗末さまでした。すぐに片付けてくるからね」

来たときと同じように皿を持ち、山倉は台所へと戻つていった。

そんな後姿を見ながら、僕は不意に笑みが溢れる自分に気がついていた。

確かに料理はおいしくなかつた。だが、不思議と失望はない。むしろ山倉をもつと好きになれた氣がする。

今まで山倉は、なんでもできる女の子だといふイメージがあつた。

スポーツは万能、勉強は良くはないが決して悪くはない。容姿も端麗で、非の打ち所がない。僕にとって山倉は、まるで雲の上の人のような存在だった。

そんな山倉の意外な一面を、覗くことができた。なんでもできる人間なんて、この世には存在しない。山倉も僕たちと一緒になんだと実感できた。

それがたまらなく、嬉しかつた。

「少し、話でもしようか」

山倉はすぐに戻つてきていた。手にはコップとお茶を持ってきている。食器はきっと食器洗い機でも設置されているのだろう。

「うん、何の話をしようか?」

「そういえば、お母さんの話をしてたね」

「コップにお茶を注ぎながら、山倉が呟く。

先ほどで終了したと、安心していた話題だけに、思い切り不意をつかれてしまつた。

「さつき言つてた通り、お母さんはいつも家にいないの」

「ずっと一人暮らしみたいなもの?」

「そんな感じかな。銀行の口座に生活費が振り込まれるだけで、まったく連絡ないし。たまに帰つてくるみたいだけど、顔を合わす機会もほとんどないよ」

お茶を注ぎ終わった山倉が、隣へと座る。

想像していたよりも、山倉の母と山倉のわだかまりは、ずっと大

きこりし。

「お金なんかより、お母さんと一緒にいる時間が欲しいんだ。広い家があつても、一人で生活するんじゃ、まったく樂しくないもの」山倉の言ひとおりだと思つた。こんなに広い家に一人暮らしどなれば、寂しいことこの上ない。

「いつか、お母さんがわたしの気持ちに気づいてくれれば……つて、暗い話になっちゃつたね！」

「いや、凄く嬉しいよ。苦しみがあつたらどんどん吐き出していくんだから。山倉の気持ちが少しでも楽になるよう、力の限り協力するし」

「鷹野君ならそういう言つてくれると思つた。だから話したんだよ」はにかんでうつむく山倉を、そつと抱き寄せる。一瞬こわばつた体も、すぐに僕へと寄りかかってきた。

「こんなに心が安らぐなんて、初めての経験だよ」

僕の肩へと頭を預け、目をつぶる。山倉の髪から、以前とは違うスミレの香りが漂ってきた。

「このままずっと、鷹野君と一緒にいたられればいいのに……まだ。山倉に悪気はないのは分かつていて。だが、現実に引き戻されるのは確かだ。

「山倉……」

「んっ？」

瞳を開き、僕を見上げる山倉。信頼を得た相手にだけ向けられる、安らぎの眼差し。

僕は最終的に、この瞳を裏切らなければならぬ。そつ思つと、胸が急激に締め付けられた。

「山倉、よかつたら僕の家に来ない？」

「えっ？ いまから？ でも迷惑なんじゃ」

「こんなに広い家で、一人の時間を過ごすなんて、ほとんど拷問じゃないか。僕の家に来れば、母さんや姉さんもいるし」

「えっ？ 鷹野君ってお姉さんがいたの？」

言われて一瞬だけ、思考が停止する。ミコアについて、言わないほうがよかつたのだろうか？

どちらにしろ、家に連れて行けば分かる事実だ。僕は隠さず貫き通した。

「年上の割には役に立たないんだけどね」

「そりなんだ。仲良くなれるかな？」

「大丈夫さ。何も考えてないから」

「ひ、ひどい言われようだね……」

半ば呆ながらも、山倉は楽しそうだった。

姉妹がいない山倉にとって、軽口を叩ける存在というのは、憧れなのかもしね。

「それじゃあ行こうか」

「ちょっと待つて。着替えてくるから」

言われてみれば、山倉は制服のままで料理をしていた。

談話室から出て行つた山倉は、五分程度で戻ってきた。黒いシャツと紺のジーンズの上に、薄手のコートを羽織つている。

精悍な顔立ちと調和が取れており、まるでやり手のキャリアウーマンのようだ。

「鷹野君、行こう！」

山倉は僕の手をつかんで、家から出た。ただ、今回は引っ張るわけではなく、普通に歩いている。

外はすでに真っ暗になつていた。街頭の光が、帰る家をなくした螢のようにたたずんでいる。

「山倉の家と比べると豆みたいに小さい家だから、覚悟しておいてね」

「そんなの全然、気にしないよ。それだけ温かいと思つし」

狭いという感覚しかない僕にとって、山倉の考えは斬新だった。確かに山倉の家は広いが、一人でいれば寒すぎる。

それは体感的なものだけでなく、精神的にも言えるだろう。

その点、僕の家は狭いが、温かみがある。

口が悪い母さんも、決して僕を見捨てはしなかった。いつも僕のそばにいてくれた。

強い風が吹き抜け、山倉の黒髪をたなびかせる。髪を押さえながら山倉が、苦笑いを浮かべている。

「寒い？ 走って帰ろうか？」

提案するも、山倉は首を振った。

「つうん、ゆっくり帰ろう」

腕と腕を絡ませ、山倉が寄り添つてくる。

暗闇のおかげで助かつた ひそかに僕はそう思っていた。首から上だけが、焼けるように熱い。

そのまま僕と山倉は無言のまま、自宅へとたどり着いた。

10月24日 (6)

「ただいま」

玄関のドアを開けると、すぐ田の前にミコアの姿があった。

「あ、お帰り信也！ 優美ちゃんは？」

なんだか嫌な予感がする。

「この人が鷹野君のお姉さんか。大人の女って感じだね」

背後からひょいっと顔を覗かせて、山倉が耳元で呟く。

「そ、そうかな？ 根っからの子どもだとと思うけど」

そんな会話をしていると、ミコアが唐突に声をあげた。

「ゆ、優美ちゃんーー！」

嫌な予感はあつたりと的中していた。

頭の中で、頭を抱える自分の姿が浮かぶ。

「えっ？ わたしの名前、どうして知ってるんですか？」

「あ、そ、それは、その……」

当然の疑問を投げかける山倉に、これまた当然の反応をみせるミリア。

慌てふためくミリアを見るのは、これで何回目だろうか？

「ちょっと前に、山倉の話を姉さんにしたんだよ。どんな人かも話したから、想像通りの姿だつたんじゃないかな？」

仕方なくミリアに、助け舟を出す。

ミリアの目に輝きが灯り、何度も頷いてみせる。

「そうだったんだ。これからよろしくお願ひしますね、お姉さん。えっと、名前は……」

「み、美利亞です！ 初めまして！ よ、よろしくーー！」

ミリアが必要以上に、はきはきと自己紹介する。まるでエンマ様の前にいるかのような緊張ぶりだ。

「美利亞さんですね。こちらこそ、よろしくお願ひします」

一人は笑顔で握手を交わす。だが、なぜかミリアは顔を引きつら

せていた。

「お帰り。信也、そつちの子は？」

声が聞こえたのだろう。居間から母さんが姿を現す。

「ただいま。えつと、付き合ってた女の子なんだ。山倉優美さん」「は、初めて！ 山倉です！」

今度は山倉が硬くなっている。初対面でも畏怖を与えるほど、母さんの迫力はすさまじいものなのだろうか？

「初めてまして山倉さん。で、こんな夜中に女の子を連れ込んで、どうするつもりだ？ まさか……」

指の関節を鳴らしながら、不敵に口元を緩める。このままでは命が危なかつた。

「それでちょっと話があるんだ。姉さん、山倉を僕の部屋へと案内してくれない？」

「わかった。」  
「よしそう」

ミリアと山倉は階段を上りて、僕の部屋へと入っていった。

僕は母さんの部屋である、居間へと移動した。母さんを納得させなければ、僕の命は風前の灯だ。

もつとも、すでに亡くなっている命なのだが。

「あの方、実は……」

「いいよ、言わなくても」

「へっ？」

こぞ説明をしようとするが、母さんはあつさつと受け入れてしまつた。呆気に取られる僕の肩に手を回し、母さんが引き寄せた。

「わけがあるんだろ？ 大体想像がつく」

「ほ、本当に？」

「伊達に三十年も生きちゃいないわ」

「母さん今年で三十五歳……」

言い終わる前に、肩に回っていた腕がヘッドロックへと変わる。数秒間の首絞めは、僕にとつて分単位に感じられた。

「とにかくだ。長い間じゃないんだろ？」「とにかくだ。長い間じゃないんだろ？」

「うん、まあ」

「変なことするわけでもないんだろ?」

「もちろん!」

「だつたらいいこ。その辺の常識はわきまえてると、母さん信じてるからな」

「ありがとう母さん!」

「いいや、気にしなくても」

少し照れながらも軽く微笑み、僕を送り出してくれた。

居間から出ると、僕は自分の部屋へと向かった。

一時はどうなるかと思った難関も、無事突破したといえる。

あとは山倉を楽しませてあげればいい。今後どうするか、話してみるのもいいだろ。

「大丈夫だった?」

自分の部屋に戻ると、山倉が顔を曇らせながら尋ねてきた。

母さんの説得は難しそうだと、山倉の目にも映つたらしい。

「うん。なんとか」

「よかつた、大喧嘩になつたりしたらどうしようかと思つてたのよ」「そうなつたら、母さんに全身殴打されて、部屋に戻る気力も無くなつてるよ」

「冗談まじりに言つと、山倉から細かい笑みが何度もこぼれた。

「あれ? 姉さんは?」

「会わなかつた? 飲み物を持ってくるつて言つて、部屋から出て行つたんだけど」

と、山倉が説明した直後、狙つていたように、なにかが割れる大きな音がこだました。

部屋の外に出てみると、ミリアがグラスを落として割ってしまった。していた。

立ちつくすミリアの周りに、大小まばらなガラスの破片が散乱している。

「し、信也君……」

ミリアが田元に涙を浮かべながら、僕に何かを訴えている。

散乱しているグラスの破片を、ミリアと一緒に拾う。いつの間にか側にいた山倉も手伝い、三人で破片を拾い集めていると、

「いま、なんか変な音しなかつたか？」

母さんの部屋にまでグラスの碎ける音は聞こえたようだ。居間から母さんが出てきたのが階段から見える。

「ど、どひょ！」

赤子のような怯えた田で、ミリアが助けを求めてくる。

僕はミリアの肩にそっと手を乗せてあげると、ミリアに安堵の表情が生まれた。

そんなミリアの期待を裏切るよつ、笑顔で言い放つ。

「しつかり怒られきなよ、姉さん

「えつ、えええ！」

最初は嫌だと首を横に振っていたものの、実際に割ってしまったのは事実だ。

ミリアはしづしふと母さんに報告へ向かった。哀愁漂う背中を向けて。

「鷹野君、ちょっとお姉さんにひびくない？　お姉さんと仲悪いの？」

「そんなことないよ。大丈夫だつて。母さんも鬼じやないから、正直に謝れば許してくれるよ」

怒られているでもないのに、せつせと床に散らばつ

た破片を掃除する。

すっかり床が綺麗になつた頃、ようやくミコアは新しいコップを持つて上がってきた。

今度は紙コップだつた。

「はい、信也君」

「ああ、ありがとう」

ミコアはコップを僕に渡すと、おずおずと自分の部屋へと戻つていった。

母さんにこいつひどく、怒られてしまったのだろう。それならば、そつとしておいた方がいいかもしない。

僕と山倉は部屋へと戻り、しばらく談笑をした。それは何気ない好き嫌いや趣味などの会話から、小、中学校のアルバムによる思い出話になつていった。

楽しい時間は過ぎていき、時計は一十三時を回つた。

僕と山倉は、必然的にそろそろ寝ようといふ話になつた。僕は普段使つているベッドを、山倉へと譲つた。僕は居間から運んできた、布団を敷いて、中へと潜り込む。

「電気、消すね」

「うん」

部屋の電気を消して、僕は布団の中へともぐりこんだ。辺りを暗闇が支配し、静寂に包まれていく。

「鷹野君……」

「んっ？」

突如静寂を破つた山倉の呼び声に、慌てて相槌を打つ。

息を吐きだすような、か細い声がベッドから聞こえてきた。

「今日は本当にありがとうございます。こんなに楽しい夜は本当に久しぶり……いや、初めてかも」

「楽しんでもらえたのなら、僕も嬉しいよ」

家に連れてきた目的の一つは、山倉を楽しませることだ。

そう考えると、今日の一日は大成功だつたといえる。

「本当に、鷹野君と出会えてよかったです。これからもよろしくね。鷹野君もつらい時があつたら、遠慮なく言つていいくから」

「うん、やうやせてもらひますよ」

「約束だよ。それじゃあ、おやすみなさい」「おやすみ」

再び静寂に包まれ、ベッドから早くも寝息が聞こえてくる。  
僕もゆっくりと目を閉じる。ふと脳裏に、電話越しのコトアの言葉が、思い浮かんだ。

『優美ちゃんと仲良くなっちゃダメ!』

あの言葉には、いったいどんな意味が含まれているのだろうか?  
僕と仲良くなると山倉がサークル会場から逃げられないという意味なのか、それとも別の何かが。

いろいろと考えしていく内に、僕の意識は自然と薄らいで……心地よい睡魔が、体を包みこんでいった。

十月二十五日 土曜日

鉄扉のようすに重かつたまぶたが、ゆっくりと開く。目の前には、愛しい山倉がやんわりと微笑みながら、僕を見つめていた。

「なんだあ、夢かあ」

「なにが夢なの？」

夢の住人に声をかけられ、一瞬で意識が覚醒する。勢いよく飛び起きたと、僕はベッドの上にいた。

山倉が口元に手をやりながら、小さな声でこつと笑っている。

「や、山倉？」

「どうしたの？ もしかして寝ぼけてる？」

寝癖のついた髪の毛を押さえながら、頭の中を整理する。よつやくそこで、昨日山倉が泊まつたことを思い出していった。

「あれ？ どうしてベッドで……」

「わたしが運んだんだよ。そんなに遠い距離じゃないし、体力なら自信あるからね」

山倉は力瘤を作りつつ、おどけてみせた。

彼氏よりも彼女が頼もしいといつのは、少し複雑な心境ではある。「鷹野君のお母さんが怒つてたよ。さつと朝ごはん食べててくれない」と片付かないつて

「そつか。いま何時？」

「九時過ぎだよ」

「山倉は、もう食べたの？」

山倉は首を振つてから、恥ずかしそうに咳いた。

「まだだよ。鷹野君の寝顔見てたからさ」

これでいつたい何度もだろう。首から上だけがまるで別の次元に飛ばされ、炎で熱されたような感覚だ。

「それじゃあわたし、先に降りとくからね」

部屋を出て行つた山倉に続き、階段を下りていく軽やかな足音が聞こえてくる。服を着替えると、山倉の後を追つた。

ダイニングキッチンへと行くと、テーブルの上に朝食が準備され、その上にラップがかけてあつた。

どうやら今日の朝食はパンとハムエッグらしい。

「やつと起きてきたか、この万年寝太郎が」

奥から出てきた母さんから、第一声で罵声を浴びせられ、浮き足立つた気分がなえていく。

「優美ちゃん、こいつの寝坊癖、なんとかならないか?」

「いつも遅刻寸前ですからね。治らないかもしませんよ」

「山倉まで……」

がつくりとうなだれる僕を見て、二人が大声で笑う。

気分としてはあまり良くないが、山倉の笑顔は今までに見たことのないような、とてもすがすがしいものだつた。

「冗談だよ、鷹野君。今度から迎えに来るから、一緒に学校に行こうよ」

「それはいいアイディアだ。信也、まさかお前、女の子を待たせるなんてデリカシーの欠けたこと、しないよな?」

母さんから脅威のプレッシャーをかけられて、僕はおずおずと頷いていた。

般若のような眼差しで凝視され、否定などできるわけがない。

「それじゃあ、月曜日から迎えに来るね」

「そうしてくれるか、優美ちゃん。悪いな、信也が迷惑かけて」「迷惑だなんてとんでもない。鷹野君がいなかつたら、わたし……」

「口」もる山倉に、僕は胸が苦しくなつた。

少しずつ恐れていた事態へと向かつている。

山倉が僕に依存しそうになると、僕が死んだときの苦しみが増すだけだ。

山倉の支えになれる、心からの友達を作つてほしい。もちろんそれは、僕以外のだれかでなければ。

僕のことを見れてほしくはない。だが、僕だけを想い続けないでほしい。

それが僕の、正直な想いだった。

「鷹野君、今日はどうするの？」

不意に聞かれて、我に返る。

「えっと、今日は……」

考えつつ、ふとカレンダーを見やる。十月二十五日 自分で言

うのもなんだが、今日は僕の命日だ。

山倉を迎えて行く途中、僕は子どもをかばつて 。

「まずい！」

「んふ？」

「どうした、信也？」

勢いよく立ち上がった僕を、目を丸くした二人 山倉はパンをくわえたまま が僕を見上げる。

「ごめん、山倉。ちょっと用事があるんだ。悪いけど待つてくれるかな？」

「信也……」

母さんの冷たい視線が突き刺さる。だが、これだけはどつあっても譲れなかつた。

「いいよ。わたしも着替え持つてきてなかつたから、一度家に帰ろうと思つてたし」

「じゃあ、用事が終わつたら山倉の家に行くよ。ごめんね！」

「うん、じゃあ家で待つてる」

山倉と別れ、僕は急いで外に出た。目指す場所は一つ、病院前の交差点だ。

秋空にしては強い日差しを浴びながら、記憶を簡単に整理する。初めて体験した今日、僕は一人の少女を助けた。その結果として、命を落としてしまつたのだ。

一度目である今日、少女は同じように横断歩道へと飛び出すだろう。その場に僕がいなければ、少女の運命は 考えただけでも鳥

肌が立つ。

全力で住宅地を駆け抜け、吉沢総合病院へと向かう。件の横断歩道にたどり着いた時、幸いにも少女の姿はまだなかつた。僕は横断歩道を渡つた。反対側から飛び出すよりも、そばにいた方が助けやすい。

十分ほど経過して、少女とその母親が姿を現す。

僕の記憶どおり、そこで少女の母親は知人と出会い、立ち話を始めた。

少女はよたよたと横断歩道へと進み、道路に飛び出す直前で、僕は少女を引きとめた。

「子ども、危ないですよ?」

「あっ、す、すみません」

その直後、横断歩道へ突つ込んでくるトラック。僕にとつては一度目でも、少女の母親には、壮絶すぎる光景だつた。

トラックは交差点を横切つた時点で、急ブレーキを踏んでいた。辺りの人影から、ざわめきが起ころ。

刹那、僕の両手をがっちりとつかみ、少女の母親が涙目で僕に訴えかけてきた。

「あ、ありがとうございます! 娘の命の恩人です!」

「あ、いや、そんな大した……」

「あなたがいなれば、娘は今頃あのトラックにはねられていました!」

「いや、まあ、そうかもしませんね……」

母親の必死の形相にうろたえつつも、なんとか返事をする。少女は何が起こつたのかいまいち分かっていないらしく、きょとんとしていた。

母親は知人への挨拶もそこそこに、僕を引っ張つた。

「ぜひともお礼をさせてください!」

「いや、別に、そんな気を使つていただきかなくても」

「いえいえ、娘の命の恩人ですから。ただで返すわけにはいきませ

ん

「いえ、本当に大丈夫ですから」「でしたら、喫茶店でコーヒーでも。せめてそれぐらいはさせてください！」

母親は僕の手を引く力を、まったく緩めようとしなかった。仕方なく僕は了承し、近くの喫茶店まで移動した。

駅前にあるレトロな雰囲気をただよわせる喫茶店『チュ・ターク』へと入る。

わざと焦げ目のような模様をつけた木造の内装と、流れるクラシックが、店内を落ち着かせる役目を担っている。

「あれ？ 信也じゃない」

カウンターに座ろうとした僕たちの背後から、不意に声をかけられ振り向く。

そこにミリアの姿があった。

「ミコ……姉さん……どうしてここ……」

「どうしてつて、デートに決まってるでしょ、う？」

「デートって……」

確かにミリアの向かいには、あたふたと慌てふためく男性が座っていた。ただ、年齢的には僕と同じぐらいで、ミリアの恋人としては不釣合いな気がする。

そもそも、僕のサポートとして来ているはずのミリアが、なぜ無責任にもデートを楽しんでいるのか 少しいらだつ僕へと、ミリアの恋人は挨拶をしてきた。

「は、初めてまして。竹下聰史です」

丁寧に挨拶をして、頭を下げる竹下聰史。

軽く会釈を返すも、ミリアへの不満が爆発しそうだった。

「あのね、姉さん……」

「わたしよりも、信也こそどうしたの？ まさか優美ちゃんをほつたらかにして、不倫でもしてるんじゃ……」

側にいる親子に目をやつながら、ミリアがきつい視線で睨みつけてくる。

「ま、まさか！ やよつといの子を助けたから、お礼にコーヒーでも……」

「それで、優美ちゃんをほつたらかしにしてるわけだ  
「そういうわけじゃ……」

「あーあ、信也君の愛情なんて、そんなもんだったのね  
お別れの挨拶を無駄だと表するミリアに、愛情がどうのこうのと  
語られたくない。

だが、ミリアの言ひ通り、いまの僕は山倉の元へと向かつたほづが  
いい気がする。

僕の到着を、家でいまかいまかと待ち続けているのだから。

「あの、すみません……やつぱりいいです。僕はちょっと用事があるんで」「そうですか……」

ミリアと僕の会話を聞いていたらしく、母親は先ほどほづって  
変わつて、あつさりと引き下がつた。

「よかつたら、そこの一人にご馳走してあげてください。僕の姉と  
その彼氏で、初デートらしいんです」

「わかりました。では、やつさせてもうります。今日は本当にあり  
がとうございました」

「お兄ちゃん、ありがとうございます！」

母親の真似をしたのか、可憐らしげな仕草で、少女も僕に頭を下  
げた。

「もう道路に飛び出しちゃダメだよ？」

「うん！」

少女の頭を撫でてから、僕は喫茶店チュ・ターグをあとにすると、  
すぐに山倉の家へと向かつた。

日が昇つてきたせいか、じりじりとした暑さが体を包んでいる。  
僕はハンカチで汗を拭きながら、早足で進んでいった。

おかげで予想よりも早く、山倉の家へと着いた。インターホンを  
鳴らすと、山倉の声が聞こえる。

「どなたですか？」「鷹野だけど」

「待つてたよ！　すぐに開けるからね！」

山倉の活発な声に続き、アコーディオンドアが開く。家の中のスイッチでも開くのだろう。

林道を進み、噴水を回って玄関前まで行くと、山倉が手を振っていた。

「やつほお！」

「お待たせ」

「ううん、そんなに待つてないよ。わたしの部屋に行つて、少し話でも……」

今までにこじかだつた山倉の顔が、突然に曇つた。僕の背後へと視線が移る。

振り向くと、玄関から一台の車が入つてきていた。

ドラマやドキュメンタリーなどで見かけるお金持ちの象徴確かにロールスロイスとかいう車のはずだ。

「行こう、鷹野君」

山倉は僕の腕をつかむと、引っ張つて玄関の中へと入つた。

昨日と同じ豪壮な家具たちが、僕を迎えてくれる。

「早く、わたしの部屋に行こう！」

なぜか慌てる山倉に、僕は首をかしげながらも従つ。だが、僕の疑心暗鬼が、すべての行動を鈍らせていた。

背後の扉が開き、若作りをした女性が入ってくる。手にはビー玉よりも大きな宝石の指輪が、バッグや服装はブランド品が、そして周りを包む空気には、えも言えぬ香水の匂いが漂っている。

顔に塗りたくられた厚化粧に、紫がかつたレンズのメガネ。あきらかに成金といった、そんな風貌だった。

「優美」

「何よ……」

山倉を呼び捨てにする女性と、普段の山倉からは考えられない仏頂面。

この女性が山倉の母親だと理解するのに、そう時間はかかるなかつた。

山倉よりもお金大事にするといつ、山倉の母親は、葉巻に火をつけながら山倉をにらみつけた。

「この子はだれなの？」

僕を額で指し、山倉の答えを待つ。山倉は僕のそばへと寄り添い、強引に腕を組んでみせた。

「わたしの彼氏だよ。文句ある？」

「あるに決まってるでしょ」

「そう。でもわたしには関係ないわ。わたしが愛しているのは鷹野君だけなんだから」

普段の僕なら必要以上に照れて、顔を真っ赤にしていただろう。だが、その場の雰囲気が、僕を更なる緊張の領域へと運んでいった。

「あなたにはすでに婚約者がいると、何度も言つたはずです」

「いやよ！ 会つたこともない男と結婚するなんて！」

「いやなんて言葉は言わせません。これは山倉コンシヨルンの未来

のために必要な結婚なのですよ」

「ようするに政略結婚でしょ！」

食に入るように向かい合ひ、田をぎらつかせる。

山倉の母親が先に田をそらすと、そのまま僕に近寄り、睨みつけてきた。

「あなたがどこの誰かは知りませんが、優美はすでに婚約者がいるわ。すぐにお引取り願います」

「うそ！ でたらめだよ！ 鷹野君！」

一人に挟まれて戸惑う僕に、母が吐き捨てるように言い放つた。

「どうせ財産田当てでしょ！ うが」

「へつ？」

完全に思考になかった意見に、僕は反応できなかつた。代わりに山倉が田を吊り上げ、母の胸倉を強くつかみあげる。

「鷹野君はそんな人じゃない！」

「なぜ断言できるの？ 人間なんてみんな、お金の前では本性を現す。この子もすぐにそうなるわ」

「な、なりませんよ！」

慌てて否定する僕に対しても、母は平然としていた。

「お金田当てではないと？」

「も、もちろんですよ…」

「先ほどからどもつてますが、それでも違うと言ひ切れるのかしら？」

「当然ですよ…」

半ば苛立ちで我を忘れながら、僕は強い調子で怒鳴つた。山倉も母から手を離し、僕に同意していく。

「そうよ。鷹野君はお母さんとは違うのよ」

「どう違うのかしらね」

「お母さんには、お金で得られない友情なんて、分からぬのよ」

片方の眉毛だけを吊り上げ、僕を見下していく。山倉の母を嫌う

気持ちも、いまなら嫌というほどよく分かつた

「鷹野君、わたしの部屋に行こつよ」

山倉が僕の手を引つ張る。背後から重いものが動く、低い音が聞こえた。

振り返ると、玄関においてあつた装飾用の壺を掴んだ、山倉の母親の姿があつた。

「危ない！」

僕の声はわずかに遅かった。振り下ろされた壺は、的確にターゲットへと振り下ろされた。鈍い音が耳を襲う。

だが、直後のつぼが弾け飛ぶ乾いた音で、その音は辺りには響かなかつた。

そのまま山倉は、床に散らばる破片と一緒に沈んでいった。

「山倉……山倉！」

慌てて山倉を抱き起こす。

壺で殴られた山倉のこめかみから、ドロッとした赤い鮮血が染み出でくる。その液体は頬を伝つて、床へと滴り落ちていつた。

肉体から力は消えうせ、目を閉じたままピクリとも動かなかつた。延々と血を流していくだけの山倉を、冷たい視線で見下ろす母親。「ふう、高い壺なのに……」

手に残っていた壺のふちを床へと捨て、母親は平然と立ち去るうとする。

「どこへ行くつもりですか！　早く、救急車を呼んでください！」

「自分で呼べばいいじゃない」

「な、なんだつて！？　アンタの娘が死ぬかもしれないんだぞ！」

慌てもせず、母親はポケットの中から、葉巻を取り出す。

「必要なのは、大手業者の御曹司と結婚できる道具よ」

「道具！？」

「反抗なんてされたら、先方に悪い印象しか与えないわ。もつと聞き分けのいい道具を養子として迎えたほうがよさそう。だから、その子はもう用無し」

「ふざけるな！？」

「ふざけてないわ。それじゃあ会議があるから、あとはあなたの好きにしてちょうだい。

救急車を呼ぶなら優美の電話でね

高笑いしながら去っていく母親を、追つていって殴るのはたやすいだろう。

だが、そんな暇はなかった。一刻も早く山倉を病院に連れて行かなければ、その先は考えただけでも背筋が凍る。

山倉の母親の言葉を当たり前のように無視して、食事をした部屋に備えられたレトロ風の黒い電話から、一一九番へと通報する。

僕は救急車の到着までに、知りうる限りの応急処置を施した。出血部位に布をあて、指で骨に向かつて圧迫する。これで大量出血を防げるはずだ。

「鷹野、君？」

かすれ声に反応し、山倉の様子を伺う。意識を取り戻してはいるが、顔面は蒼白で目も虚ろだった。

「救急車は呼んだから。喋らなくていいよ。ゆっくり、落ち着いてね」

「ありがとう。鷹野君にはお世話になりっぱなしだね」

山倉が再び目を閉じる。そこによつやく救急車が山倉邸に到着した。

救急員が慌てて山倉を運び、僕も一緒に救急車へと乗り込む。山倉の生死が問われている今、山倉を救つために来た僕が、放つておけるわけがない。

山倉と僕は、そのまま近くの病院 吉沢総合病院へと運び込まれた。

一時間ドラマでよく見かける、緊急治療室に運び込まれる光景を目のあたりにする。

そのまま手術中の赤いランプが、煌々と灯る。騒々しかった病院内は、瞬く間に静かになつていった。

手術室の前に備えられた長いすに、腰を下ろす。組んだ手の上に

額を乗せて、がっくりとつなだれた。

もしかしたら、このまま死んでしまつかもしれない。頭をよぎつた仮定と沸き起つる悪寒を、打ち消すように何度も首を振る。とにかく早く結果を知りたかった。もしも山倉が死ねば、念願の山倉救出は当然、失敗となる。

そうなれば、僕は史上最悪の罪人だ。愛する人の死期を早めてしまったのだから。

その時、ふと頭にミリアの顔が浮かぶ。人の失敗を哀れんでいる悔しくも、そんな表情だった。

ひょっとして、ミリアに中界へと戻つてもらえば、山倉の生死が分かるのではないか？

わらにもすがる想いで、病院内に設置された公衆電話を探し、自宅へと電話をかける。

残念なことに、電話に出たのはミコアではなく、母さんだった。

「はい、鷹野ですけど」

「母さん！ ミリアは帰つてきた！？」

「美利亞？ いや、まだ帰つてないぞ。それよりお前、なんで姉さんを呼び捨てにしてるんだ？」

水が下流を流れていくような音で、頭から血の気が引いていく。

「そんなことより！」

「そんなこと？ 年長者を呼び捨てにする無礼が、どうでもいいことだつてのか？」

「ああ、もう！ 訳はあとで説明するから、姉さんが帰つてきたら、すぐ吉沢総合病院へ来るよう言つて！」

母さんの返事を聞く前に、電話を切る。手術室の前へと戻り、再び長いすに座つた。

手術中のランプはまだ消えていない。山倉の無事を祈る、それしかできない自分がはがゆかつた。

何度もランプを見上げては、赤い光を確認し、すぐに顔をうつむかせる。

時間は淡々と過ぎているだろう。だが、僕にとつてその時間は止まっているように感じていた。

灯りっぱなしのランプ、人影のない手術室の前、聞こえてくるのは、自分の呼吸と鼓動の音だけ。手足が、意に反して震えだす。こぼれそうな涙をこじらえるのに、僕は必死だった。

時が動き始めるきっかけを作ったのは、手術中のランプの消灯だつた。

手術室から、医者と看護士が数人、姿を現す。山倉はベッドで寝かされたまま、どこかへ連れて行かれた。

まさか、靈安室へ？

おぼろな足取りで、山倉の後を追おつとすると、背後から肩を叩かれた。

「もう大丈夫ですよ。命に別状はありませんから」

振り向くと、看護士が微笑んでいる。

ようやく、僕の心に余裕と安らぎが生まれた。後を追うと、三六号室へと山倉は運ばれていった。時計を見ると、すでに十四時を回っている。

いつたい何時間ほど手術をしたのか 逆算しようとしたが、すぐによめた。

手術が何時間続いたのかなど関係ない。大事なのは、いま山倉がこうして生き残っている嬉しい事実だ。

ベッドに寝かされ、落ち着いた寝息をたてている山倉は、死の恐怖など微塵も感じさせなかつた。

病室に配備された緑色の丸椅子に座り、胸をなでおろす。あとは山倉が目覚めるのを待つだけだ。

山倉の寝顔を、頬杖をついてみつめる。山倉の痕に巻かれた包帯が、事の重大さを物語つていた。

「鷹野君？」

「うわっ！」

声を掛けられ、椅子ごとひっくり返りそつとなるのを、どうにか踏ん張る。

山倉は丸い双眸を大きく見開き、僕の顔をまじまじと眺めていた。

「大丈夫？」

「な、なんとか。山倉の方」」や、「気分はどうだい？」

「うん……大丈夫だよ」

顔をそらし、口を一文字に結ぶ。山倉特有のから元気が、ふつふつと伝わってきた。

「無理しなくていいよ。」」には僕しかいないんだから」「

「そうだよね、やっぱり、鷹野君しかいないんだよね？」

山倉は自分の体を起こそうとしていた。

「まだ寝てたほうがいいよ」

「ううん、大丈夫だから」

僕の制止も徒労に終わり、山倉は上半身を起こす。

大量の涙が溢れ出す山倉の瞳。そのまま涙を拭うことなく、山倉はぽつりと呟いた。

「道具、だもんね」

息が一瞬止まり、鼓動が速度を上げる。

「聞いてたの？」

「殴られた後も、かるうじて意識はあつたからね」

「そつか」

できれば聞かないでほしかった。あんな言葉を実の親から聞いたら、僕もショックで立ち直れないだろう。

「悪い夢だつて思いたかったけど、やっぱり夢じゃなかつたんだ」

わななく体を押さえ込むように、両手で自分の体を包んだ。

「わたしが、わたしがね、今までやつてこれたのはね……」

震える体をそのままに、山倉が語りだす。

「希望があつたからなの」

「希望？」

「昨日、話したよね？　わたしはお母さんと一緒に時間がほしいって。お金なんか要らないんだって。いつか、わたしの気持ちに、お

母さんが気づいてくれるんじゃないかなって、そんな願望があつたの」

僕は無言で耳を傾けていた。余計な口を挟むよりも、いまは山倉

の告白を受け止めるべきだと判断した。

「だけど、認識が甘かつたんだって身をもつて知ったよ。お母さんはまったく気づいてくれてなかつた。当然だよね。わたしは道具なんだもん。愛情なんて『えてもらえない』。今まで、そしてこれからもね」

山倉は青い顔色で、腕にさらなる力を込めた。山倉の白い肌に、爪が食い込んでいく。

「それにもし、気づいてくれるような人だったら、お父さんだつて……」

「山倉、もういいから、今はゆっくり休むとこよ」

山倉の腕を体から引き離すと、今度は両手で僕を抱きしめてきた。

「もう、ダメ。もう限界だよ。もう、もう生きたくない！」

絶叫は僕の耳元で叫ばれた。山倉の頭を逆に抱きしめて、頭を撫でる。

「山倉、落ち着くんだ」

「いやだ、もういやだ！　わたしはなんで生きてるの？　ただお母さんに利用されるためだけ？　道具としての価値しかないのに、どうして生きなきゃいけないのよー！」

「山倉ー！」

「みんな、みんな気がついてよー。張り裂けそうな苦しみで、今にも心は碎ける寸前なのに！　どうしてわたしの苦しみに誰も気づいてくれないのよー！」

山倉を抱える腕に、力を込める。山倉の感情が伝わり、胸に激痛が走った。

「山倉……死ぬなんて、もつたいないこと言ひつなよ  
「だつて！」

反論しようとした山倉の口を、手で塞ぐ。落ち書きを取り戻すのを待つてから、僕は手を外した。

「死んだら、みんなとお別れなんだぞ」

「いいよ、わたしが死んだって、だれも悲しまない」

「そんなことないさ。僕はもちろん、三村や吉沢だって悲しむよ」頭を撫でながら、なだめるように諭す。

だが、山倉は小さく首を振った。

「ダメだよ、やっぱり。いつだって、わたしは一人なんだ。誰もわたしのこと、友達だなんて思つてないよ。本当の友達なら、わたしの苦しみを、分かつてくれるはずだもの」

山倉は一人で苦しみ続けていた。それが痛いほどよく分かった。だれにも頼らず、自分一人で解決しようと躍起になり、うまくいかないのもすべて自分ひとりで抱え込む。その悪循環が、山倉の心を八つ裂きにしてしまったのだ。

「ねえ、山倉」

山倉が顔を上げる。

「友達ってどういう人だと思う?」

「わたしを信頼してくれて、分かつてくれる人。わたしを友達と思つてくれる人だよ」

山倉の定義に、僕は小さく首を振った。

「僕の考えは少し違うかな?」

「じゃあ、信也君にとつての友達ってなんなのよ?」

少しいらついているのか、荒々しい口調で聞いてくる。

僕は一呼吸おいてから、山倉へと話した。僕にとつての友達の定義を。

「僕にとつての友達は、僕が友達だと思える人だ」

「何よそれ。わたしと一緒にじゃない」

「違うよ。山倉は友達だと思つてくれる人と言つた。僕は友達だと思える人だ。相手から友達と思つてもらえるかどうかは関係ない。大事なのは、自分が相手を友達と思えるかどうかだ」

「じゃあ、鷹野君にとつて友達つて、相手が自分をどう思つても関係ないってこと?」

「そうだよ」

「そんなの、おかしいよ。友達つてお互いに助け合つてしまふ?」

「もちろん」

「だったら、相手から嫌われても友達なんておかしいじゃない」「山倉の言つことはもつともだよ。だけど、それは結果だけを求める。安易に友達を手に入れようとしてるだけだ。それじゃあ本当の友達は手に入らないよ」

山倉の瞳に、再び脅えが生まれていく。

僕の言葉は山倉にとつて厳しいものかもしれない。だが、山倉にいま必要なのは、僕の存在よりも、信頼しあえる友人のはずだ。「相手が山倉をどう思つているかなんて関係ないだろ？ 山倉が友達だと信じることが大切だと思う。そうすれば、みんな友達のはずだろ？ そして僕たちの周りに、信じてくれる山倉を、見捨てる人なんていないさ」

「確かに、鷹野君の言つ通りかもしれない。だけどどうすればいいのか、わたしには分からないよ」

下唇をかみながら、山倉は顔をしかめた。心なしか瞳に涙が浮かんでいる。

「信頼してるので、口で言つのは簡単だと想つ。だから僕は、本当の信頼は行動で示すものじゃないかなって」

山倉は黙っていた。聞いてくれているものと判断して、僕は続ける。

「山倉は今まで、苦しみや悲しみを胸の内に溜め込んでいた。自分の本音を伝えるのを怖がつていた。本性を出すと、嫌われるんじやないかって脅えてた。僕たちは魔法使いじゃない。話してくれなければ、山倉の本心なんて分からないんだ。じゃあどうして、山倉は僕たちに、悩みを打ち明けられないのか。それは、相手を心から信頼していないからじゃないか？」

首を左右に振り、山倉は僕の言葉を否定した。だが、反論はしてこなかつた。

「確かに自分の悩みを、他人に打ち明けるのには勇気がいるよ。だけど、僕はその勇気こそが信頼だと思ってる」

「勇気が……信頼?」

「勇気を出して、悩みを告白するということは、その人を信頼しているからだろ? 僕に悩みを話した時だって、かなりの勇気が必要だつたと思つ。だけど、僕はそこに山倉の信頼を感じたんだ」

今度は頷いてみせる。僕も自然と、頭を下げていた。

「悩みを話したからって、すぐに解決するとは限らない。だけど、山倉には思いつかなかつた解決方法を、誰かが思いつくかも知れないだろ? 山倉が勇気を出せば出すほど、その可能性はあるんだ」細かく震えていた山倉の体が、ゆっくりと落ち着きを取り戻し始めた。

ベッドへと腰掛けて、山倉の肩に手を乗せる。顔を上げる山倉に、僕は精一杯の笑顔を送つた。

「僕の言つてること、分かつてくれた?」

涙を拭いながら、山倉は首を縦に振つた。

「鷹野君、わたしが間違つてたよ。回りのことにしてるつて言いながら、一番に自分のこと 自分が傷つかずにする方法ばかり考えた。鷹野君の言葉で目が覚めたよ。だけど……」「だけど?」

「もうみんな、呆れてるんじゃないかな? 誰も信頼できないわたしに、愛想を尽かしてくるんじゃないかな?」

山倉の頭を抱えて、僕は優しく教えてあげた。

「間違いに気がついたのなら、それを直せばいいだけさ。いまならまだ間にあう。山倉は幸せになれるんだ。だから死ぬなんて……生きたくないなんて言わないでくれよ」

しばらく僕たちはそのまま動かなかつた。山倉のすすり泣く声だけが、僕の耳を捉えて離さなかつた。

先に動きがあつたのは、山倉だつた。抱きしめる僕の手を優しく振り解き、につこりと微笑んでみせる。

「鷹野君に出会えてよかつた。鷹野君がいなかつたら、わたし、絶対にダメになつてた」

「山倉の力になれたなら、僕も嬉しいよ。だから、元気出して。もう……」

「うん。死にたいなんて言わなくて済みそうだよ。みんなにも全部話してみる。果歩ちゃんにも、すごく心配かけてると思うし、三村君は……」  
「ユースキヤスターだからなあ」

「大丈夫だよ。三村がいくらユースキヤスターでも、本当に苦しんでる人の悩みを、暴露したりなんかしない。そんな奴なら、僕は最初から友達になつたりしてないよ」

「そうだね。鷹野君の親友だもんね」

山倉は大きく背伸びをしてみせた。目の前を見据えた瞳は、燐然としている。

「なんだか、すごく世界が輝いて見える。今まで濁った泥水のような世界だったのに」

僕の肩を引き寄せる、山倉は明るい声で笑っていた。

「もう大丈夫だよ、信也君！ わたしの中には、あつたわだかまりが、薄れていってる気がする。わたしは一人じゃない。一人で苦しむ必要はないんだよね！」

山倉にほおずりをされてしまい、慌てて僕は山倉から離れた。

「あはは、真っ赤になっちゃってる。そんなに照れなくていいじゃない」

「て、照れるよ……」

口<sup>ノ</sup>もる僕に、山倉は口元を緩ませた。

映える微笑みに、僕は確信する。山倉はもう大丈夫だ。

「それじゃあ、そろそろ帰るよ。明日また来るから」

「うん、待ってる」

山倉に手を振り、部屋を出ようとすると、

「鷹野君……」

背後から山倉の声が聞こえ、振り返った。

山倉は僕から視線をそらしつつ、なにやら手をもじもじさせていた。

「あのね。果歩ちゃんにも三村君にも、全部話すつもり。だけど、やっぱりわたしの一番は鷹野君な」

「ありがとう。山倉にそこまで想つてもらひえるのは嬉しいよ」

「うん。だから……ずっと側にいてくれないといやだからね？」

山倉が齧えた表情で、僕を見つめてくる。

動悸が一度だけ高鳴る。それでも、後戻りはできなかつた。

「当たり前じやないか。山倉が僕を必要としている限り、ずっと一緒にいるよ」

「本当に？」

「嘘なんていわぬ。山倉をえよければ、僕の家に住んだつていいく」

「えつ、いいの！？」

「もちろん。自宅にいたら心が休まらないでしょ？ 僕の家だつたら狭いけど、母さんもいるし。ちよつと怖いけど、悪い人じやないからさ」

「ありがと、ありがとう鷹野君！」

ベッドの上で何度もお礼を言いながら、頭を下げ続ける。

僕はそんな山倉に軽く手を振り、病室を後にした。

部屋の扉を閉めると、すぐさま僕の元へと人影が近づいてきた。ミコアである。

「ミコアか……遅かったな」

「そんなことより、ちょっと話があるの」

「話？」

「いいからついてきて」

淡淡と、まるで怒ったように述べると、ミコアは僕の手を引っ張り、足早に病院を出て行こうとする。

「どこ行くんだよ」

「いいから」

仏頂面でそれだけ言うと、あとは無言で手を引っ張り続けた。外はまだ日が照っている。雲ひとつない晴天は、まだ変わらない。

ただ、秋場にしては強い日光の影響か、少し暑苦しかった。

そんな僕の愚痴を聞いていたかのように、冷たい風が吹き抜けていく。

ミコアが足を踏み入れたのは、子どもが遊ぶために作られた児童公園だった。

最近の子どもは、あまり外で遊ばないらしく、時間の早い今の段階でも、誰もいない。

風に吹かれてわずかに揺れるブランコが、蚊の鳴くような金きり音を、ため息のように漏らす。

ミコアは乱暴にベンチへと座ると、きつい眼差しで僕を睨みつけてきた。

「どうしたんだよ、ミコア」

「優美ちゃんを助けられたのは、さすが信也君といったところね。おめでとうと言つておくわ」

「ああ、ありがとう……」

ドスの聞いた声で称賛されても、あまり嬉しくはなかつたが、一応お礼を告げる。

だが、ミリアの機嫌は一向によくなる気配を見せなかつた。

「問題はその後だよ。信也君、優美ちゃんになんて言つた?」

「えつと……僕の家に住んでもいいって」

「その前よー」

「な、何をそんなに怒つてるんだよ?」

「いいから!」

赤く染まつた顔色と、口めかみに浮かんだ青筋からは、容易に怒りを読み取れる。

ミリアの感情を逆なでしないように、落ち着いて山倉へと言つた言葉を振り返る。

確かに、ずっと山倉の側に立つてゐるよつて

「それよー!」

勢いよく立ち上がつたミリアは、僕の胸倉をつかみあげていた。

「は、放せよミリア!」

「信也君は来週の火曜日には死ぬのよー。もつ分かつてゐるはずでしょー!」

「とりあえず、落ち着けつて!」

腕をつかみ、力ずくで振りほどく。ミリアは息を荒げて、涙を瞳に溜めていた。

「ずっと一緒になんて不可能なのよー。どうしてあんなことを言ったの!」

「じゃあなにか? 火曜日に死ぬから、ずっと一緒にいるなんて無理ですって、答えればよかつたのか? そいやつて山倉を絶望に追い込めてっていうのかよ?」

「そうじゃない、そうじゃないけど……あんなふうに断言しなくてもよかつた! こままじや信也君が死んだら、優美ちゃんは信也君の後を追うかもしねー!」

「大丈夫だよ。吉沢や三村がなんとかしてくれる。僕がいなくたつて、山倉は……」

ミリアに手を振り解かれて、僕の言葉が止まる。そのままミリアは、僕の鼻先を指差してきた。

「じゃあ聞くけど、信也君が逆の立場になつたとしたら、平穏にやつていける自信があるの？ 愛する優美ちゃんを失つても、励ましてくれる友人がいれば、それで満足だつていうの？」

ミリアの設問に、僕はあっさりと言葉を失つてしまつた。

山倉がいなくなり、そばには三村がいる。

三村は僕を一生懸命に、励ますうとしてくれるだろう。だが、僕の心はそれだけで癒されるのか？ 山倉のいない隙間を埋められるのか？

答えは……ノーだ。

「ぜ、絶対に自殺なんてさせない！」

苦し紛れの言い訳に、ミリアが鼻で笑う。

「どうやって？」

「それは……今から考えるわー。」

大きくため息をついてから、ミリアは僕を思い切り突き飛ばした。転倒した僕を見下しながら、吐き捨てるよつに述べる。

「話にならないわ。やれるもんならやつてみなさいよー。もしも優美ちゃんが後を追つたら、信也君なんて地界行きなんだから！」

目に涙を溜めたまま、ミリアは公園から走り去つてしまつた。昼間会つたミリアとは、別人ではないかと疑うような変わりようだった。

「なにがあつたんだ、ミリア……」

ぼやきつつ立ち上がり、お尻についた砂を拭う。とりあえずミリアの後を追つて、家の方角へと向かつた。

「ただいま

「ああ、お帰り」

帰宅すると、母さんが仏頂面で、僕を迎えた。そばには同じ年ぐ

らこの男子が、僕に頭を下げる。『チュ・ターク』でミリアと一緒にいた 確か、竹下聰史だ。

「お邪魔します」

「ああ、どうも……姉さんに用事?」

「ええ、だけど、会つてもらえないみたいなんで、帰ります。夜分遅くにすみませんでした」

もう一度頭を下げてから、男子は玄関を後にしていった。悲しげな背中が、小さくなつていく。

「母さん、姉さんは?」

「泣きながら帰つてきたみたいで、すぐに自分の部屋へと入つていった。ノックしても泣き叫ぶ声しか聞こえないし、鍵もかかってるからな。そつとしといでやれ」

「うん……」

母さんの言つ通り、今は放つておくのが最善だらう。たとえ顔を含ませたとしても、落ち着いた会話などできないまま、また口論になるのがオチだ。

お風呂に入つてから、大人しくベッドに入る。ミコアのよつすが気になりつつも、僕の意識は緩やかに遠のいていった。

十月二十六日 日曜日

午前九時過ぎに起きると、いさ早くミリアの部屋へと向かった。三度ノックをするも、まったく反応はなかつた。

玄関へ降りる。ミリアの靴は昨日と変わらず、乱雑に転がつたままだ。どうやら外には出でていないうし。

昨日のようすは、明らかに尋常じやなかつた。腕を組んで、ミリアと話す手段を考えてみる。

火事だと言つてドアを叩く、おいしそうな食事の匂いで部屋からおびき出す、エンマ様の真似で部屋から出でてことと怒鳴る 正直、どれもうまくいきそうにない。

ダイニングキッチンへ入ると、母さんが朝食の支度をしていた。もちろん、ミリアの姿はない。

「母さん、姉さんは？」

もしかしたら、母さんなら何か知つてゐるかもしね。そんな淡い期待に賭けてみたのだが、そう上手くはいかなかつた。

「美利亞か？ まだ起きてきてないぞ。昨日から様子が変だつたが……彼氏にでも振られたんじゃないか？」

そういえば喫茶店で、竹下聰史と名乗る男の子にあつた。彼ならに分かるかもしね。

同じくらいの年齢だった彼なら、もしかすると三村が分かるかもそんな想いから三村に連絡を取つてみる。

だが、返事はノーだった。竹下聰史といふ名前自体、三村は知らなかつた。

「ところで、信也

僕が家の受話器を置くと、待つていていたかのよつて母さんが声をかけてきた。

「なに？」

「なに？　じゃないだろ。昨日病院から電話してきたじゃないか。

何かあつたんだろ？」

「そういえば後できちんと説明すると、約束して電話を切つたんだつた。

「あ、あれは、大した用事じゃないから」

「たいした用事じゃないならどうしてどもるんだよ。大体だな、病院から電話なんて普通しないだろ？　お前は元気そだだから、優美ちゃんの身にでも何か起こつたのか？」

「こんな時の母さんは、妙に田ざといというか、勘がいい。

「いや、それは……たまたま姉さんに用事があつたんだけど、近くにある田立つ建物が病院だつたから」

「ほう……じゃあお前は、待ち合わせ場所として駅よりも病院を選ぶんだな？」

がつくつとうなだれる僕を、勝ち誇ったような笑みで見下ろしてくれる。

やはり付け焼刃の言いわけでは、母さんに太刀打ちできるわけがなかつた。

仕方なく僕は母さんにすべてを話した。もちろん怪我を負わせたのが実の母親だという事実は伏せたが。

「まったく、最初からそつやつて説明すればいいんだ」

「うん、ごめん」

「なにかあつたら、いつでも言つんだぞ？　優美ちゃんに信也]がついているように、信也にも母さんや姉さんがついている。一人ですべてを背負う必要はないんだ」

「分かつてゐよ。ありがと」

頭を下げるとき、母さんは照れくさそうに頬を搔いた。

「それじゃあ今日も優美ちゃんのところへ行くのか？」

「もちろんだよ」

「そりゃあ。とりあえず朝食くらいしつかり食べていけ。信也が元気な姿を見せないと、意味がないんだからな」

「うん。分かった」

母さんに声をかけられなければ、いち早く山倉の元へ向かおうとしていただけに、するどこ指摘に田からひねりが落ちる。伊達に二十五年も生きていなー。

もつとも、母さんにそんなことを言はば、三十年だとこつシッロミと共に、首を絞められそうだが。

準備されていた朝食を食べていると、母さんは嬉しそうに僕の顔を見つめていた。なんだか照れくさい。

「いい顔になつたな、信也」

朝食を終えて玄関で靴を履いてくると、母さんはやう声をかけてきた。

「そうちかな？」

「ああ、昔の父さんこそつくりだよ」

正直に言つと、あまり覚えのない父さんに例えられても、褒められているかどうか微妙だった。

「あのせ、父さんつて……」

「ああ、やつぱり覚えてないのか？」

僕はこくりと頷く。すると、母さんは遠い田をしながら、僕に「いい男だったさ。わたしにはもつたいないくらいだね……

「母さん……」

寂しそうな田をしていた。そう感じた。

だが次の瞬間、機関銃のようにまくし立て始める。

「でも女たらしどう、浮氣をよくしてた！ まったく、こんないい女を嫁に迎えとい、しようがない男だよな！」

先ほどの言い分とまったく逆のことをいつている気がしたが、気づかないフリをしておく。

「その現場を見つけては、わたしのゴブシが唸つたもんだ。あと酒が好きだったね。リンゴ酒で作ったブランデーが、大のお気に入りだつたよ。でも飲み比べじや、わたしに勝つことなかつたけどね！」

父さんの話が、こいつの間にせりあひ母さんの武勇伝に変わつたつある。

「好きだつたんだよね？」

話の腰を折るよつだつたが、武勇伝がこつまでも続いてもいりつては困る。

母さんは頬を染めながら、小さな声で、

「ああ……」

言つた後で、両手で顔を隠すよつて覆つ。じつにこつた恋愛話は、じつも苦手らしこ。

母さんの性格を考えれば、分からなくもないが。

「お前も父さんも、母さんの血縁の親子だった。今までも、そしてこれからもな」

なんだかんだ言つても、やつぱり母さんは父さんが大好きなんだ。その父さんに似てるといつことば、間違になく褒め言葉なのだ。

「ありがと。じゃあ行つてくれるよ」

「ああ、気をつけとな」

玄関から出て行く僕に手を振りつつ、母さんが見送つてくれた。

10月26日(2)

病院内に入り、幾人かの病人や看護士とすれ違いながら、三六号室へと向かう。

ノックをすると、山倉の元気な声が聞こえてきた。

「どうぞ！」

ノブを回し、ドアを開ける。山倉は元気に手を振っている、以前にも見た光景だ。

ただ、あの時と違うのは、山倉の瞳に涙のかけらすら浮かんでいないことだ。

「おはよっ、信也君！」

「おはよっ！」

昨日と同じ丸椅子へと腰をかける。今日は特にこれといった用事はない。

そばにいて、談笑をかわすのが、一番の目的ともいえるだろう。

「そういえば、明日から修学旅行だよね。楽しみだなあ」

芸能人やドラマなどの話がひと段落ついたころ、不意に山倉の口から出たのは、そんな言葉だった。

「山倉……修学旅行に行けるの？」

「うん。先生に聞いたら大丈夫だつて。こんなところで一人落ち込んでるより、友達と一緒に遊んだほうが楽しいだろうって」

確かに事情を知っている先生ならば、そう言うだろう。

だが、それは表向きの事情だけ知っている者の意見だ。

裏の事情を知っている僕としては、修学旅行へ行つてほしくなかつた。

修学旅行に行かなければ、サークル会場にも行かない そういうれば、必然的に山倉の命が救われるという結果になるからだ。

「なんだよかたね」

僕なりに心情をうまくまかして、嬉しがっているつもりだった。

だが、山倉はすぐに顔を曇らせて、首をかしげる。

「あんまり嬉しくなさそう。わたしと修学旅行に行きたくないの？」

「そ、そんなことないよ！」

「フフツ、分かってるって。冗談だよ」

白い歯を見せる山倉に、必死になつてひきつった笑顔を返す。

「簡単に運命は変えられないって事か……」

「えつ？」

僕のぼやきに、素早く反応を示す。

「いや、なんでもないよ」

「本当に？ 苦しんでるんだつたらいつでも相談してよ？」わたし

だつて信也君の力になりたいんだから

「分かつてる。僕だつて無理はしないさ」

心配そうな山倉に、修学旅行の予定について話すと、山倉はすぐ  
に食いついてきた。

こうなつた以上、覚悟は決めなければいけない。未来は分かつて  
いるのだから、慌てる必要はない。

要するに、僕が山倉を死なせなければいいんだ……。

10月26日(3)

山倉と分かれて家に帰ると、母さんが出迎えてくれた。

「どうだつた？」

「うん、大分元気になつてゐみたいだよ。もつ大丈夫じゃないかな？」

靴を脱ぎながら、答える　　と、一階から玄関の方へと足音が聞こってきた。

「本当に大丈夫かしら？」

沈んだ面持ちで、僕を見つめ返すミコア。

「姉さん……」

「優美ちゃんは、信也君が側にいるから元気なだけ。あなたが側にいなくなつたら……」

「そ、そんなわけないだろ！？」

慌ててミコアの口を塞ぎ、階段を登る。そのまま部屋へとミコアを放り込み、急いでドアを閉める。

ミコアは僕の顔を真剣な眼差しで睨みつけていた。

「全部ばれたらどうするつもりだ！」

確実に反論していくだろうとの予測を裏切り、ミコアは素直に謝つた。

「ごめん。ちょっとしたやつあたりなの」

「やつあたり？　どうしてやつあたりなんかする必要があるんだ？」

僕の問いかけにミコアは答えず、ただ唇を噛み締めている。

湧き上がる憤怒を押さえつける僕へと、今度は逆にミコアが質問してきた。

「明日から、修学旅行だよね？」

「ああ……」

「優美ちゃんも？」

「残念ながらね。でも絶対に山倉を死なせはしない。もちろん後を

追わせたりもしない

根拠のない自信だつたが、ミリアに僕の気持ちは届いたようだ。

髪を軽くかきあげてから、潤んだ瞳を向けてくる。

「信也君、なんでそんなに落ち着いていられるの？ もうすぐ、好きな人とお別れだよ？ 次はいつ会えるか分からぬ。それなのに、どうして？」

一瞬戸惑いながらも、僕は考えてみた。確かにミリアのいつも通り、良くも悪くも明後日で山倉とはお別れだ。

それでも僕の心中は妙に落ち着いている。

「うーん、ミリアが前に言つてたる？ 今は自分がやるべきことをやれつて。多分そのおかげじゃないかな？」

「自分がやるべきこと？ そんなこと、言つたつけ？」

「言つたさ。だから僕は、自分がやるべきことを全部やつてゐる。それで山倉を助けられなければ仕方がないさ。それに『あなたは明後日死にます』って、急に言わたんなら落ち着いていられないけど、明後日死ぬのは、前から決まっていたからね。だから落ち着いてられるんだと思う。本当のところは自分でも分かんないけどね！」

そう言つて笑い飛ばす僕にも、ミリアは表情を変えなかつた。

「なあ、何があつたんだ？ 最近のミリア、ちょっとおかしいぞ？」

「なんでもない。なんでもないの」

ミリアは僕を押しのけて、部屋を飛び出しあととした。

「待てよミリア！」

声に反応して、ミリアが振り向いた。そのまままた、涙が浮かんでいる。

「信也君、頑張つてね。応援してるから。絶対に優美ちゃんを救わなきゃダメだよ？」

それだけ言つと、ミリアは僕の部屋から飛び出し、また自分の部屋へと引きこもってしまった。

ミリアも気にかかつたが、ノックをしても返事はない。

僕は明日の準備を終わらすと、早い時間から寝床へとついた。

布団に入り、疲れもあつたせいか、すぐに寝息をたて始める。

その眠りが途絶えたのは、夜の二十三時になつてからだ。全身を襲つた悪寒で、今までの熟睡が嘘のよう、あつたと田を覚ましたのだ。

寝汗で全身が濡れており、喉が異様な渴きを訴える。

ミリアの様子が気になつてゐるかもしだい。それとも他のなにかが。

渴ききつた喉を潤すためにベッドから起ると、僕は台所へとお茶を飲みに行つた。

階段を下りていくと、ダイニングキッチンから、廊下へと光が漏れている。

覗いてみると、母さんがなにやら書き物をしてゐるようだつた。中へと入つていくと、母さんは驚き戸惑つたようすで、慌てて背中へと隠した。

「何してたの？」

「いや、ちょっとな。赤字の家計簿つけてたんだよ。気にするな」

「ふーん」

母さんの背後に回つた家計簿に興味を引かれつつも、向かい側に腰を下ろす。

「なんだ？ 修学旅行が楽しみで眠れないのか？」

「いや、なんとなく目が覚めちゃつたんだ」

返事をして、ふと思いつく。明日から僕は修学旅行へと旅立つ。それはつまり、母さんとのお別れを意味していた。

なぜなら、修学旅行から僕が帰つてくることはないのだから……。

「そつか、それで目が覚めたんだ」

一人で勝手に理解を示すと、視察する母さんを背に、いったん台所へと向かつた。

冷蔵庫からお茶を取り出し、コップ二つと共に手中へと納める。テーブルの上に二つのコップを置き、お茶を注ぐと、一方を母さんへ渡した。

「おっ、気が利くな」

「そう? 当たり前じゃないかな?」

「その当たり前ができない奴が多いんだよ。世の中にはな」「コップに注がれたお茶を一気に飲み干し、空になつたグラスを勢いよく置く。

そのコップに再びお茶を注ぎつつ、僕は質問をしてみた。

「ねえ、母さん

「なんだ?」

「もしも、僕が死んだら悲しい?」

「お前、もうすぐ死ぬのか?」

「い、いや、そうじやないけどさ」

思わず聞いてしまつたが、やはり聞くべきではなかつた。

後悔の念に囚われている僕を、怪訝に見ながら、母さんがまたお茶を一口飲む。

「悲しくないさ。家計が浮いて逆に喜ぶかもしれないな!」

笑い出す母さん。冗談だつたのだろうが、逆に悲しみを増す言葉でしかなかつた。

あの時の母さんが泣く姿は、いまもまぶたに残つている。

「もし……」

「なんだよ今度は。もしの話ばっかりして」

「もし僕が死んで……」

先ほどと同じように話し始めると、母さんの顔から瞬時に笑顔が消えた。

「なあ、信也。冗談でも死んだらなんて話をするもんじゃないぞ? どう考へてもお前より母さんの方が早く死ぬんだしな」

『違うんだ! 先に死ぬのは僕なんだ!』

心の奥底から飛び出しそうになる絶叫を、グツと堪える。

「大事な話なんだ! お願ひだから最後まで聞いて!」

「死ぬ前の大事な話か。縁起でもない」

テーブルを両手で叩きつけ、母さんは自分の部屋へと戻るうつじ

た。

その後姿に向かつて、僕は力いっぱいに叫んでいた。

「僕が死んでも、山倉をここに住ませてあげてほしい！」

振り向かず、立ち止まる母さんへと、声をさらに張り上げる。

「自分の娘のように可愛がってほしいんだ！ 僕や姉さんを大切に思つ気持ちを、山倉にも向けてあげ……」

「それに合意すれば、気が済むんだな」

話に割り込むように、ボソリと母さんが呟く。

「うん……」

「わかった。お前の遺言として覚えておいてやるよ。その代わり、わたしの前で一度と死んだらなんて話をするな！」

僕に顔を見せないまま、母さんは出て行ってしまった。

渾身の力を込めて閉めた扉が、家全体を揺らす轟音を辺りに響かせる。

わずかに震える扉を前に、僕は深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。ごめんね！」

我慢できずにこぼれ出した涙は、止まる気配をまったく感じさせなかつた。

打ち震える体を無理やり押さえつけて、自分の部屋へと戻る。これで僕に残された仕事は、山倉の救出だけだ。

10月27日(一)

十月二十七日 月曜日  
のつそりとベッドから起き上がると、僕は制服に着替えた。  
部屋を出て、まずミリアの部屋にノックをするも、返事はなかつた。

この家の住人が僕だけではないのかと、錯覚するぐらい静かだつた。階段を下りる足音、ダイニングキッチンへとつながる扉を開ける音　僕の行動で生み出される物音以外に、耳に入つてくる情報はなかつた。

ダイニングキッチンに入るも、だれも見当たらなかつた。代わりのように、朝食だけは準備されている。

「一 ヤチャンブルにもずく、『飯は炊き込み』飯。嫌がらせのよう」、僕の苦手なものばかりだ。

だが、僕はそれらを残らず食べきつた。これが母さんの最後の手料理かと思うと、不思議と不味くはなかつた。

食器を流しに置いてから、母さんの部屋へと向かつ。ノックするが、こちらも返事はなかつた。

朝食が準備されていたのだから、どう考へても一度は起きているはずなのだ。

「母さん、起きてる?」

ドア越しに声をかけても、反応はない。

「いないの?」

もう一度ノックをしながら、声をかける。それでも返事はなかつた。

額をドアに付けて、大きく息を吐く。時計を見ると、そろそろ正倉が来てもおかしくない時間だつた。

「さよなら、お元気で……」

そう言葉を残して、階段を駆け上つた。

流れ出る涙は、なかなか止まらなかつた。

すぐに家のチャイムが鳴り響く。僕は涙を拭り去ると、無理やりに笑顔を作つた。

荷物を持って階段を下り、玄関の扉を開ける。

「おはよっ、鷹野君！」

そこにいたのはもちろん山倉だつた。長くてしなやかな髪の隙間から、ちらちらと覗く大きなガーゼが痛々しい。

制服姿の背中には、赤いリュックサックをかるつていて。

「おはよっ。それじゃあ行こうか」

「うん！ 楽しい修学旅行を満喫しよう！」

山倉に手を引っ張られ、僕は自宅を後にした。愛着のある家がどんどん離れていくも、僕は背後を振り返らなかつた。

未練を断ち切るため、そして山倉を救うといつ最重要事項に専念するために。

学校へと着くと、すでに多くの生徒がグラウンドへと集合していった。

「信也……お前」

山倉と一人で、整列場所へと向かつていると、血相を変えて震える指を、僕に向けてくる三村がいた。

「ああ、三村。おはよっ」

「おはよう、三村君」

二人で同時に挨拶をすると、三村が僕の胸倉を突然つかんだ。

「な、なんだよ、三村……」

「お前、なんで山倉と一緒になんだよ」

「えつ？ なんでつて……ああ！」

ようやく三村の驚嘆の意味が分かり、僕は何度も頷いた。

「山倉と付き合つてゐるんだ」

「マジか！」

三村の視線が、一瞬にして山倉へと移る。

山倉は少し頬を染めたまま、無言で頷いていた。

「良かつたじやないか信也！ もつと早く教えてくれればいいのに、  
水臭いじやないか」

「いろいろと忙しくてさ。悪かった」

「いいくてことよ。これからは一人の恋の行く末を見守ってるから  
な。何かあつたらすぐに相談してくれよ」

「ありがとう、三村君」

僕よりも早く山倉がお礼を述べる。三村は何気に照れながら、僕  
たちの元から離れた。

「修学旅行は学問の一環です。あまりはしゃぎすぎなによつに気を  
つけましょう」

全員が集合を終わらせて、先生が注意を促す。

だが、そんなものは全員、耳から抜けているようだ。

あきれ顔の先生が、各クラスごとにバスへと乗せる。そこで三村  
が再び近づいてきた。

「信也、山倉と席交換しといったからな

「えっ？」

小声でつぶやく三村に、僕は目を丸くしていた。本来なら僕は三  
村と隣の席で、山倉は吉沢と隣の席だったはずだ。

「俺も吉沢の隣のほうがいいからな」

「自分のためかよ！？」

「そう言つなつて。一人の仲を深めるチャンスだろ？」

「そりゃ、まあ……」

相槌を打ちながら、僕は内心ショックを受けていた。ここはでき  
れば、山倉と別々の座席がよかつたからだ。

本当なら、飛び上がって喜びたかった。だが、今は僕よりも、他の  
友人と友好を深めてほしかった。僕の存在を山倉の中で、大き  
くしすぎないように。

といつても、これは三村にとつても、吉沢と隣同士の席になれる  
という、利益に基づいた行動だ。逃れようのない事態だったのかも  
しない。

「どうかしたの？」

考え込んでいると、背後から山倉が僕に声をかけてきた。隣には吉沢の姿があり、僕の肩をポンと叩いてくる。

「優美をよろしくね、鷹野君」

それだけ告げると、手を振りながら、吉沢は自分の座席へと向かつた。三村もそれに続いて、積極的に声をかけている。

いつまでも車内で呆けているわけにもいかず、僕と山倉も座席へと座った。

「はい、鷹野君」

すでに買っていたのか、オレンジ色のキャップのペットボトルの緑茶を、僕へと渡してくれた。熱すぎず冷たすぎず、ちょうどいい温度になっている。

「ありがとう」

「どういたしまして！」

山倉に微笑まれて、僕の口元にも自然と笑みが生まれていた。バスがゆっくりと動き出し、目的地へと向かう。

今から高速道路へと上がり、六時間かけて目的地へと向かう。バスの中では目的地につくまでの間、バスガイドさんによる挨拶と予定の説明があった。

目的地についた後は昼食を済ませ、歴史的建造物をいくつか回る。それが今日の大まかなスケジュールだ。

それが終わると、生徒の間でカラオケ合戦が始まる。

盛り上がる車内で、ただ一人僕だけはその場の雰囲気についていけなかつた。

残した母親、山倉の救出、そしてこの世から永遠に姿を消す自身。頭の中はすでに一杯で、処理し切れなかつた。

「鷹野君、マイクだよ」

マイクを目の前に差し出され、ようやく我に返る。

「ごめん、歌はちょっと苦手なんだ」

「そう？　じゃあ次はわたしが歌うつよー」

マイクを高々と掲げる山倉に、車内から歓声と口笛が巻き起る。

「曲名は『いつもそこに』で！」

それを聞いて、バスガイドさんが準備を始める。山倉の歌声は、まるで地上に舞い降りた天使のよつて、甘く柔らかい歌声だった。歌の内容は、ふとした瞬間に恋心を抱き、愛し合つようになつた二人は、いつまでも幸せに暮らすといった内容だった……。

歌い終わり、一礼をすると、山倉は歓声に包まれながら、次の人にもマイクを渡す。

「ふう、久々に歌つたから緊張しちゃった」

「」苦勞様

「へへっ、どうだつた、わたしの歌」

「うん、すごくよかつたよ」

「そう？ その割にはあまり楽しくなさそうだけど……」

とつさに僕は、田をそらしてしまつた。怪訝そうに、僕の顔を覗きこんでくる山倉。

「気分でも悪い？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「本当に？ 無理しないで休んでたら？ 着いたら起こしてあげるから」

「うん、ありがとつ……」

田を閉じて、山倉の姿を視界から消す。

あの歌の内容に、山倉の意図が含まれている。それはほほ間違いないだろう。

僕は山倉の想いが伝わるたびに、心に重しをつけられている気分だつた。喚起と悲痛が交じり合い、今まで味わつた試しのない感情が沸き起こるのを、抑えきれない。

覚悟していたはずなのに、いまは恐怖に震えている。山倉と離れになる恐怖だ。

まぶたの隙間から、涙がこぼれ落ちる。

それを拭うように、柔らかな布の感触が伝わってきた。山倉がハ

ンカチか何かで、拭つてくれたのかもしれない。

それでも僕は目を開けなかつた。いま目を開けてしまつては、きっと止め処なく涙が溢れ出てしまうだらう。

目をつむつたまま、気持ちを落ち着かせていく。そうしていく内に、聞こえていたクラスメイトの歌声が薄れ、頭の中が暗くなつていつた。

10月27日(2)

「鷹野君、起きて。着いたよ」

肩を揺すられて、僕はようやく目を覚ました。変な体勢で寝てしまつたせいか、首筋が痛い。

「ああ、山倉……」

「大丈夫? なんだかうなされてたけど

「うん、なんとか……」

寝ぼけている頭をはっきりとさせ、席から立ち上がる。

少し離れたところで三村と吉沢が心配そうにこっちを覗き込み、他のクラスメイトはすでにバスを降りていた。

「何をやってんだよ信也。彼女をほつたらかしにして眠るなんて

三村のもつともな意見を受け、耳が痛い。

「三村君、わたし気にしてないから。信也君ちょっと疲れてたみたいだつたし」

「まったく、先に行つてるからな

あきれながら三村が去り、それに吉沢が続いていく。

「ごめん、山倉」

「気にしてないって。ほら、行こつよ」

山倉が僕の腕を引っ張る。バスを降りた僕たちは、木造の古風な観光客用の食堂で、昼食を取つた。

その後はバスで所々の観光地を巡る。歴史の教科書でしか見たことのない威風堂々の建造物が、まるで僕を鼓舞しているように見えた。

今日のスケジュールを終わらせ、一日目の宿泊施設へと赴く。いかにも観光地らしい、和風の旅館だった。

黒色の瓦屋根に、板張りの廊下。室内に入ると畳のい草の匂いが、鼻をくすぐる。

さすがに部屋は男女別なので、僕は三村と話をしていた。どうやら

ら三村も吉沢と順調にいっているらしい。ただ、まだ付き合つとか告白するといった状況ではなさそうだ。

「まったく、信也がうらやましいよ」

そう言つてため息をつく三村が、妙に印象的だった。

夕食の時間になり、大広間へと移動する。食事も席がすでに決められており、山倉とは離れて座つていた。

目の前の食事は刺身、ステーキ、エビチリなど、和洋中のおかずが丹精込めて作られていた。

さすがは旅館の料理人というか、だれもが舌鼓を打ち、箸を進ませていた。

あまり食欲のなかつた僕も、ちょくちょく手を出していく内に、どんどん口の中へと食事が入つていく。

気がつけば、普段より明らかに量の多い夕食を、いつも簡単に完食していた。

食べ終わつた食器を片付けていると、山倉が僕の方へと小走りでかけてきた。

「どうかした?」

山倉に尋ねると、僕の耳元で山倉は一言だけ告げると、またそそくさと離れていった。「消灯五分前、部屋の前で待つてるね」それが山倉の言葉だった。

ついに修学旅行の初日も就寝を残すだけとなり、明日が僕にとって最後の一日となる。

悔いを残さないよう、明日は全力を尽くさなければならぬ。

「あれ？ 信也、どこ行くんだ？」

山倉に言われた時間、こつそり部屋から出ようとすると僕を、三村が呼び止める。

隙がないというか、妙に田舎っこ。さすがはニュースキャスターだ。

「いや、ちょっと自動販売機でジュースでも買つてこようかなってなぜだかわからないが、山倉に会いに行くとは言えなかつた。三村も何の疑いもなく、

「ジュースつて、もうすぐ消灯だぞ？ 寝る前に水分取つて、朝になつて布団を濡らしてもしらないからな！」

壮快に笑い飛ばす。適当な愛想笑いを返すと、すばやく部屋の外へと躍り出た。

部屋のドアを閉めて、ため息一つ漏らす。

瞬間、僕の腕は引っ張られていた。

「なっ！？」

慌てて引っ張られた方向を見ると、力の主は山倉だった。どこかに連れて行こうとしているのだろう。

黙つてついていくと、一階と二階をつなぐ階段の踊り場で、山倉は止まつた。

「ふう、だれにも見られなかつたね」

額に溢れた汗を拭つて爽やかな笑顔を見せる。実際は僕たちの疾走を前に、みんな呆気に取られていただけなのだがら……。

「修学旅行つて楽しいけど、一人きりになれないから嫌だよね！」

薄暗い踊り場に腰を下ろしつづぼやく。僕もその隣へと腰を下ろ

した。

「今日ははすつしよく楽しかった！ 明日も楽しみだね！」

「ああ、そうだね」

曖昧な返事をした僕の顔を、バスの時と同じように覗き込んでくる。

わざと気づかないフリをして、僕はそっぽを向いた。

と、僕の腕に突然激痛が走った。山倉が力いっぱいにつねつたのだ。

「いたつ！」

「もうつ、本当に大丈夫なの？ 心配で、食事も喉を通らなかつたんだからー！」

「ごめん、大丈夫だから。気にしないで」

山倉には悪いが、明日の対策で頭がいっぱいなのだ。

口をへの字に曲げ、今後は逆に山倉がそっぽを向く。

どうやつて謝ろうかと考えている最中に、突如、山倉が顔を近づけてきた。まるで何事もなかつたかのように。

「鷹野君、明日はなんの口か知ってる？」

「えつ！？」

飛び出さんばかりに田を見開き、僕は山倉の両肩を掴んでいた。

「ど、どうしたの？」

僕の形相に驚き、田をパチクリさせながら聞いかけてくる。

「あ、いや……なんでもないよ」

山倉から目を背け、曖昧に言葉を濁す。

知つてゐるはずがない。知つてゐるなら落ち着いてなどいられないとばつた。

「えつと、なんの口なの？」

明日の事件について、ふせたまま山倉に尋ねる。

すると、山倉はかなりのショックを受けたようだった。のけぞつて倒れそうな全身を、なんとか手で支えている。

「本当に？ 本当に知らないの？」

「う、うん。」「めん」

「別にいいけど、ショックだなあ。鷹野君なら絶対に知ってると思つてたのに」

深くため息をつき、山倉はがっくりとうなだれてしまった。

「で、結局なんの日なの？」

「もう、わたしの誕生日だよ！ 本当に知らなかつたの！？」

言われて初めて気がつく。そういうえば明日は山倉の誕生日だった。

「そ、そうだつた！ 「ごめん、忘れてたよ」

「忘れてた！？ ひどい、ひどすぎるよ！」

「そ、その、「ごめん！」

潤んだ瞳でうつむいた山倉に、頭を床にこすりつけて土下座をする。

だが、山倉は言つほど怒つてはいなかつたようだ。土下座する僕を見て、クスクスと微笑んでいる。

「大丈夫。全然怒つてないから。それで、誕生日に欲しいものがあるんだけど」

「も、もちろん！ なんでも言つてくれ！」

明日の事件で頭がいつぱいで、誕生日を忘れていた僕の、せめてもの償いだった。山倉の望む願いを叶えてあげたい。

そう思い軽く引き受けた山倉の望みは、予想を大きく超えたものだつた。

「……キス」

「えっ？」

思わず聞き返す。山倉はトマトのように顔を赤くし、もう一度つぶやいてきた。

「鷹野君のキスが欲しい

「えっ、なっ、そ、それは！」

慌てふためく僕の目を、山倉がまじまじと見つめてくる。

ただ、山倉の望みがそれだけなら、簡単に承諾したかもしない。僕も山倉が好きなのだから、キスで悩む必要などない。むしろこ

ちらからお願ひしたいぐらいだ。

だが、山倉の次の言葉が、僕の胸へと深々と突き刺さり、大きな圧力としてのしかかっていた。

「いまのところ、わたしの支えになってくれているのは鷹野君だけなの。もちろん、他の友達にも自分の本心を打ち明けようと思つてるよ。だけど、鷹野君以上に、わたしの心を癒してくれる人はいないと思う。それを考えると、心の隙間から不安が染み出でくる。いつか鷹野君が、わたしから離れていくかもしれない。それが怖くてたまらないの。だからずっと側にいてくれるっていう証明に、鷹野君のキスが欲しい」

言われて、瞬間的に頭へと浮かんできたのは、ミコアの警告だつた。

『このままじや、信也君が死んだとき、優美ちゃんは信也君の後を追うかもしれない』

このままでは、ミコアの言つた通りになつてしまつ。それではまたたく意味がない。

「ダメかな？」

無言で考え続けていた僕に涙れを切らし、山倉は問い合わせてきた。こちらの返答も聞かず、山倉はすでに、潤んだ唇を近づけようとしていた。

「いや、ダメじゃないけど……」

四苦八苦していると、山倉は愛想をつかして、無言で立ち上がつた。

「山倉、待つてくれ！」

どう弁解すればいいか悩みつつ、山倉を呼び止める。きっと怒っているだろう。

だが、振り向いた山倉の表情は、予想に反して笑顔に包まれていた。

「急いで決断しなくてもいいよ。わたしの誕生日は明日なんだし。それに、断られたとしても、嫌いになつたりしないから。わたしに

は、鷹野君しかいないからやー！」

山倉が三段飛ばしで階段を上つていいく。自分の部屋へと帰るつむりなのだろう。

「それじゃあお休み！ 明日も一緒に楽しもうね！」

階段を昇り終わった後、もつ一度僕の方を向き、そつそつて山倉は走り去つた。

「山倉とのキス……か」

自分の部屋に戻りながら、腕を組んで考える。ミコアの言つた通りにならないようにするには、そして山倉を救うこまびらすればいいのか……。

部屋に帰ると、三村が目を丸くして僕を見ていた。

「ジュース、もう飲んだのか？」

「あ、うん。買ったその場で」

「なんだよ、少し分けてもらおうと思つてたのに。まったく、山倉と初旅行だからって、緊張しそぎなんだよ」

僕の背中を思い切り叩く三村。よく考えたら、三村とも明日で別れなのだ。

初めて出会つたときから馬が合ひ、僕が山倉を好きだという事実を、唯一知つていた親友だつた。

そして、自分の情報網を駆使して、僕に協力してくれたのだ。

「三村、吉沢さんとうまくやれよ」

「当たり前だ。お前こそ山倉とうまくやるんだぞ？」

応援するつもりが、逆に応援されてしまつたようだ。せめて三村だけでも、本当のことを告げたかった。

もちろん、それを言つたが最後、僕は中界へと呼び戻されてしまうだらう。

最終日を前にして、整理しなければいけない事象は山ほどある。だが、無常にも時間は待ってくれなかつた。

10月28日(一)

十月二十八日 火曜日

ついにこの日が来てしまった。山倉にどんな結果が降りかかるか、僕は今日でこの世を去る。

今日の予定としては、午前中はサークスを見学し、午後からは自由行動になっている。

当然、サークス以降の時間帯は僕には関係ない。今日の正午には、僕の運命も山倉の運命も決まっているだろう。

ほとんど睡眠が取れないまま、僕は朝を迎えていた。うつすらと田の下に隈が浮かんでいる。

山倉を救う術、山倉に後を負わせないようにする激励、三村への御礼、そして山倉の願い。どれも結論が出ないまま、今といつ時間を迎えていた。

「おはよー。」

あぐびをしながらも、頭をフル回転させていると、元気一杯に山倉が挨拶をしてきた。

「おはよう」

「なんだか眠そうだね。あまり疲れなかつたの？」

「うん、ちょっとね……」

チラチラと覗くように、僕の顔色をつかがう山倉。顔を曇らせて、心配しているのが手に取るように分かる。

全員がバスに乗り込み、サークス会場へと向かう。目的地が近づいていくのが、僕には死への階段を登っているように思えた。

ずっと窓の外を見つめていると、僕の袖が引っ張られた。振り返ると、口を一文字につぐんだ山倉が、うつむいていた。

「鷹野君、昨日のこと……忘れていいから」

「えっ？」

「それで、悩んでるんでしょ？ 楽しめないんでしょ？」

どうやら山倉は、僕が物思いにふけっている原因が、山倉の願いにあると思っているらしかった。

間違いではないが、真実でもない。だが、山倉をこれ以上落ち込ませるわけには行かなかつた。

「分かつたよ、山倉」

「えつ？」

「全部教える。何に苦しんで、何を悩んでいたのか。サークスが終わつたら、全部包み隠さず話すから」

「本当だね？ 絶対だよ」

「ああ、約束する」

僕と山倉は指切りをした。すべてが終わつた後なら、何を話しても問題ないだろ。

もちろんそれが原因で、僕は地界へと落とされるかもしれない。それも覚悟の上だ。

僕のせいでの山倉を苦しめてしまつた。それぐらいの罰は当然だ。怖くないといえば嘘になるが。

サークス会場に着くと、そこはだだつ広い空き地だつた。その中央に、巨大なテントが張つてある。

「ちょっと待つて」

僕は山倉を待たせると、駆け足で三村の元へと向かつた。

「三村」

なにやら忙しそうに駆け回つていた三村を捕まえて、僕は話しかけた。

「鷹野か。どうかしたか？」

「いや、なんていうか……」

三村に一言残したいと、勢いだけで声をかけてしまつた。少し後悔の念がよぎる。

ただ、今を逃せば三村と話すチャンスはないだろ。会場に入つてからは、僕は山倉に付きつ切りだ。

「何か聞きたいなら言えよ。水臭い」

「いや、俺たちも長い付き合いだなってな

「な、なんだよ急に、気持ち悪いな」

本気で気味悪がっているらしく、全身を震わせながら答える。僕は自然と、笑みが漏れていくのを自覚していた。

「中学一年の時に初めて会つてから、ずっと親友だった

「そうだな」

「その親友に、頼みがあるんだ」

「そうこなくつちや、何が聞きたいんだ？ 山倉の情報ならいろいろ揃えてるぞ？」

かぶりを振つて、三村の申し出を断る。

「んじや、なんだよ……」

「もし僕に何かがあつたら、山倉をよろしく頼む」

「はつ？ お前の代わりに俺が付き合つてことか？」

「別に付き合うとか、そういうんじやなくてさ。親友として、山倉を支えてあげてほしいかなつて。吉沢と一緒にさ。僕が見た限り、山倉の親しい友人はお前と吉沢だから」

「一番はお前だろ？」

「だから、僕の身に何かが起こつたらの話だよ」

しばらく無言で考えてから、三村が恐る恐る尋ねてくる。

「お前、自殺でもするのか？」

「どうして？」

「もしかとか言つてる割に、間違いなく自分の身に何かが起こるつて断言してるような、そんな言い方だからや」

三村の勘は鋭かった。

単に、僕の言い方が悪かつただけかもしれないが、そういうたゞマと真実に対する嗅覚がなければ、ニュースキヤスターといつ異名は付かなかつたのも確かだ。

「そんなわけないだろ？」この幸せの絶頂の時に

「だけどな……」

「ちょっと神経質になつてるんだよ。山倉が大好きだからさ」

三村は突然、噴出し笑いを発していた。口元を押さえながら、待つてくれと手で合図を送つてくる。

「なんだよ」

「照れもせずによく言えるな、そんな言葉

「べ、別にいいだろ。事実なんだから」

「へえへえ、俺にもその勇気の十分の一でもあればなあ

視線をずらす三村。その先には吉沢の姿があつた。

「よし、サークルの間に告白する！」

「はつ？」

「いま信也に勇気をもらった気がする。今なら言える気がするんだ

「そつか、頑張れ」

「ああ、サークルが終わったら報告するからな。楽しみに待つとけ  
よー」

三村はそう言つと、吉沢の元へと駆けていった。すぐに告白をするわけではなく、なにやら世間話に花を咲かせているようだ。

「頑張れよ、三村……」

結果を僕が知ることはない。それでも親友の恋路に心からエールを送りたかった。

10月28日(2)

山倉の元へと僕が戻ると、ようやくサークัส会場内へと、順番に入つていった。

「鷹野君、前に行こうよ」

「えっ？ 後ろでいいんじゃない？」

「ダメだよ！ ちゃんと見える一番前に行かないとね。ほらほら、早く行かないと他の人に取られちゃうよ！」

山倉に手を引っ張られて、進んでいく。望みどおり、一番前の席を確保して、山倉はほくほく顔だ。

まるで僕が山倉を救おうとしているのを、誰かが見ていて、妨害されているような感覚だった。

山倉の隣に座ると、手足が小刻みに震えだす。

恐怖からではなく武者震いなのだと自分に言い聞かせながら、時間が過ぎていくのを待つた。

視線を感じて山倉をチラリと覗き見ると、すばやく僕から目をそむけた。後で話すという約束を背に、聞くのを堪えているようだ。

「大丈夫だから」

声をかけると、山倉は僕を見て、きこちない微笑みを見せた。

「レディス、アンド、ジョントルマン！ ようこそソーリストへー！」開演のアナウンスが流れ、颯爽と舞い降りてくるピエロたちに、どよめきが起こる。

初めの頃は空中ブランコ、玉乗り、綱渡りなどによくある演技だったが、どれもハイレベルなものばかりだった。

空中ブランコでは飛び移るときに三回転ひねりを入れ、三つ重ねた玉の頂点に乗り、綱渡りではバック転で綱を渡つていく。

だが、僕にそれらを直視する暇はない。

僕の視線はサークัสの演技よりも、会場の出入口へと注がれていたからだ。

「鷹野君、どこ見てるの？」

当然聞こえてくる山倉の疑問にも、僕は聞こえない振りを決め込んでいた。視界の隅であきれた山倉が、サーファスに視線を戻すと、その時だった。テントの出入り口の一つが突然開かれて、外の明かりが入り込んでくる。

「山倉、逃げよう！」

「へっ？」

呆気に取られる山倉を、必死に引っ張つて入り口へと向かおうとするが、よく見ると仲の良さそうな親子が入ってくるだけだ。

「なんだ、驚かせるなよ……」

がっくりと力が抜けて、座席へと腰を下ろす。山倉は僕の奇行に首をかしげながら、

「鷹野君、熱もあるんじゃない？」

と、僕のおでこに手をやる。ひんやりと冷たい山倉の手が気持ちよく、高ぶる僕の心を落ち着かせてくれた。

「やっぱり、今から話を聞いたほうが……」

「大丈夫だから。サークัสが終わった後で

口を尖らせて、仮頂面を見せる山倉。僕は背もたれへと体を預け、一時の休息を得る。

こんなことなら、開演の何分後に事件が発覚するかを、ミリアから聞いておけばよかつた。そんな想いがふと頭をよぎり、ミリアの存在を思い出す。

昨日、今日と、結局ミリアの顔を見ていない。最後のほうはなにか悩みがあつたのか、暗い表情で口を濁すことが多かった。

すべてが終わつたら、それについてもミリアに聞かなければ……。と、再びテントの出入り口が開き、明かりが差し込んでくる。僕は山倉の手を握り、いつでも飛び出せる準備を整えた。

「鷹野君……」

声をかけてくる山倉に対し、口元で指を立てる。すると、慌てた声の場内アナウンスが流れ始めた。

「会場の皆様！ 落ち着いてください！ ただいま場内に爆弾が仕掛けられているのを発見いたしました！ すぐさま避難してくださいよう、お願い申し上げます！」

一瞬だけ静まり返った会場は、次の瞬間には悲鳴と罵声に包まれていた。

係員の指示に従い、次々とお客様が逃げていく。  
山倉はといふと、茫然自失の状態だった。口をポカンと開いたまま、動こうとしない。

「山倉！ 今の聞いただろ？ 逃げよ！」

「う、うん！」

声をかけながら体を揺らすと、ようやく山倉が我に返つて行った。  
山倉の手を握つたまま、起き上がりせる。そのまま僕たちは出入り口へと向かつた。

「まだ時間はあります！ 落ち着いてください！」

団員の指示に従い、観客は次々と会場から避難していく。  
僕たちもしかりだ。

だが、なぜか緊張がさらにもよみがえていくのを感じていた。  
山倉は骨折していない。両足でしつかり床を踏みしめ、僕の後についてきている。

中界で見た映像だと、普通のお客さんで逃げ遅れている人はいない。この流れに乗つていけば、僕たちも難なく逃げられるはずなのだ。

それなのに、いまだ治まらない動悸は、さらにその速さを増している。

胸を押さえつけながら、山倉の手を引っ張り出入口へと向かつ。  
そしてその悪寒は、見事に的中した。

山倉を握つていた僕の手に、撫でるような感触を残し、山倉の重みが離れていった。

「山倉！」

背後を振り向くと、山倉は出入口へとつながる通路を逆走して

いた。

山倉の意味の分からぬ行動を田の当たりにして、半ばいはつきながら叫ぶ。

「何をやつてんだ、山倉！」

僕の怒声に反応した山倉が、こちらを振り返つて答えてきた。  
「だつて、泣き声が……子どもの泣き声が聞こえるんだよ！ 放つ  
ておけないよ！」

それだけ言つて、山倉は逆走を再開した。

刹那、僕の脳内に電流が走る。ミリアの何気ない一言が、唐突に復活を遂げていた。

「偶然とはいえサークル団員が、爆弾を見つけてくれたおかげで、死者は『三人』で済んだんだけどさ」

一人が自殺願望の男、一人が山倉だとしたら、もう一人だれかが死んでいたはずだ。

その一人とは、もはや考へるまでもない。

「くそっ！」

自分のふがいなさに、沸き起つていらだちを抑えられない。

「全員避難したか？」

「はい！ いや、あそこにまだ男の子が！」

出入り口周辺から、声が聞こえてくる。

「何をしている！ 早く逃げるんだ！」

逆光で顔もはつきりとしない男性が、僕に向かつて声をかける。  
タイムリミットはあとわずかだ。

「僕は大丈夫です！ 先に逃げておいてください！」

「おいっ、待つんだ！」

背後から聞こえてくる声を無視して、僕は山倉の後を追つた。このまま山倉を放つて逃げるわけには行かない。

『十、九……』

記憶が正しければ、出入り口付近の団員が逃げ出してから、約十秒後に爆発した。頭の中で数を数えながら、僕は山倉の元へと向か

つた。

『八、七……』

幸いにも山倉は、すでに泣き喚く子どもの姿を発見していた。だが悠長にも、泣き止ませようと説得している。

『六、五……』

「山倉！ その子を抱き抱えろ！」

カウントダウンは続けながら、山倉へと叫ぶ。

「抱えるって、こう？ う、うああ！」

子どもを抱えた山倉を、僕が抱える。そのまま入り口へと引き返し、僕は全速力で走り出した。

普段なら山倉一人でも抱えられるかどうか微妙だろうが、いまは火事場のなんとやらといつやつで、まったく苦にならなかつた。

『四、三……』

「鷹野君！ 下ろして！ わたしは自分で走れるから！」

山倉からの申し出を無視し、僕は走り続けた。山倉を下ろす時間を作れば、その瞬間に爆弾は破裂するだろ？

『四、一……』

「頼む、もう少しだけ待つてくれ！」

出入り口へと足が差し掛かった瞬間、思わず口から嘆願が漏れる。だが、その願いはあっさりと却下された。

背後で破裂した爆弾から、鼓膜を引きちぎるような爆音がこだまする。

生み出された熱風が、僕たちの体をあっさりと吹き飛ばしてしまつた。まるで丸めて投げ捨てられたゴミ屑のように。僕たちはそのまま、地面へと叩きつけられた。記憶の隅に追いやられていた、交通事故の瞬間がまたまた甦つてくる。

ボールのように転がっていく全身に、傷みが広がつていった。ようやく体が止まり、僕はうつすらと目を開けた。手の中には、山倉の姿がある。

だが、山倉は目を閉じたまま、眠ったように動かなかつた。

「山倉?」

声をかけても、山倉は反応しなかった。心音が、頭の中へと響いていく。

もしかしたら、ひょっとしたら。

そんな想いを打ち消すために、僕は何度も頭を振った。

「山倉、山倉!」

体を揺する両手も、心なしか震えていた。

「しつかりしろよ、山倉!」

肩をつかみ、何度も揺する。何度も、何度も。

頼むから、目を開け……

「う……あ……」

半狂乱にならつゝ、必死に叫んでいる僕の耳に、かるりうじて聞こえたうめき声。

「やま、へり?」「？」

確認するよつづぶやくと、山倉のまぶたがゆっくりと、ゆっくりと上がつていった。

一、二度まばたきをしてから、僕の顔を見上げる。その表情は、力なくも笑顔だった。

「鷹野、君……」

「山倉!」

僕は山倉を抱き起こすと、力いっぱい抱きしめていた。

「鷹野君、苦しいよ……」

山倉の口から漏れる。慌てて僕は力を抜いて、山倉と顔を向かい合わせた。

10月28日(3)

「大丈夫？ どこか怪我をしてない？」

「足が、痛い」

言われて山倉の足を見た。脛の部分が見るからに腫れあがっている。

「骨折か……」

「うん、そうみたい」

「そつか、良かった……」

「良くないよ。せっかくの修学旅行なのに、みんなに迷惑かけちゃう……」

「いや、これで、いいんだ。これで何もかも元通りだ」

「元通り？」

返事の代わりに、微笑んでみせる。山倉は知らなくていいことだ。ふと気がつくと、周りにはだれもいなかつた。山倉が抱いていた子どもも、今はどこかに姿を消している。

あれだけの騒ぎが起こった後で、これだけ人影が少ないのはおかしいなどと考えていたら、すぐ背後から声をかけられた。

「信也君、優美ちゃん救出おめでとう」

振り返ると、ミリアがやんわりと微笑んでいた。僕の姉の姿ではなく、すでに中界での本当の姿へと戻っている。

「ミリア……」

「えっ、だれ？」

首を傾げる山倉の横で、僕は全てを察知していた  そう、僕の

役目は終わつたのだ。

「山倉、言わなきゃいけないことがある

「えっ？」

きょとんとしている山倉を前に、僕は口をもじもじと動かすだけで何も言えなかつた。

離れたくない、ずっと傍にいてあげたい。

そんな想いが、僕の中で渦巻いている。

と、ミリアが僕の肩に軽く手を置いた。まるで僕の言葉を止めるかのよ<sup>ウ</sup>。たゞ

そして僕と山倉との間に割りいると、一礼してから、唐突に自己紹介を始めた。

「わたしの名前はミリア＝ミリス。中界という場所で働いているわ

「ミリア！」

思わず叫んだ僕に、ミリアは指を一本立てて、口元にあてた。黙つていろと言わんばかりに。

「中界っていうのは、天界と地界の仲介をする場所。わたしはそこで、死んだ人を案内する仕事をしているの」

「死んだ人を案内する？ ジャあわたしと鷹野君は死んじゃったんですか？」

ミリアは小さく首を振った。

ちらりと山倉が、よ<sup>ウ</sup>すを伺つてくる。僕はやりきれなくて、目をそらしてしまった。

「死んだのは信也君だけ。あなたは生きてるのよ

「えつ？ だつて……」

「信也君が死んだのは先週の土曜日、本當はこいつちやいけないのよ」

「えつ？ 意味が分からないです。どうこいつことですか？」

山倉は混乱する頭を、一生懸命整理しようとしていた。傍へと腰掛けたミリアが、優しく微笑んでみせる。

「本当なら今日、今の爆発であなたは死ぬはずだった。だけど、それを知った信也君は、優美ちゃんを助けたいって懇願したのよ」

力いっぱい話すミリアから、不意に安らぎと温もりを感じた。今までどこか違うミリアだった。死んだらどうしようもない。

生きている人に対し、死者は無力だ そう言っていた残忍なミリアとは違うミリア。

「結果はどうあれ、信也君は今日の爆発が終わった時点では、また死ぬことになる。それは前から決まってた事実なの」

「そ、そんなのでたらめでしょ？ 嘘に決まってる……」

「嘘じゃないわ、本当よ。信也君もそれは分かっていたの」「だつて、だつて！ 鷹野君、ずっと一緒にいてくれるって、一緒に暮らすんだつて約束してくれたよ！」

再び山倉が、僕に目線を向けてくる。今度は目を逸らすわけにはいかなかつた。

「ごめん……」

ようやく口から生まれた謝罪は、山倉を容赦なく切り刻んだ。手元にあつた砂を拾い上げると、僕に向かつて投げてくる。

「何よ！ 嘘つき！ 鷹野君の嘘つき！」

砂をつかんでは、山倉は投げてくる。何度も、何度も。それを止めたのは、山倉の頬を襲つたミリアのビンタだった。

「な、何するのよ！」

山倉の標的が、ミリアへと変わる。だが、ミリアは砂つぶで放たれる前に、山倉の腕をつかんでいた。

「放してよ！」

「分からぬの？ 本当につらいのは信也君の方だつて、信也君だつて優美ちゃんと別れたくないんだよ？」

「知らない！ 聞きたくない！」

「あなたはまだ生きていられる。周りには友達だつている。だけど、信也君はもうあなたにも、同級生の友達にも会えなくなる

「そんなの、そつちの都合じゃない！」

「そんなことないわ。信也君は死ぬより苦しい目にあう可能性があつたのに、自分よりもあなたの一生の方が大事だつていつて、一時的に生き返らせてもらつたのよ！ そんな信也君の言葉を、あなたの大好きな信也君の想いを裏切るつもり！？」

山倉は耳を塞いだまま、首を左右に振り続けていた。ミリアが再び手を振り上げようとしたので、僕は慌てて止める。

「ミリア、やめろよ」

「信也君、止めないでよー。この子さつきから自分のことばっかり考えて、信也君の気持ちを完全に無視してるー。ひっぱたいてやらないと分からないのよー。」

力を込めて引き離そうと、ミリアが暴れ始める。それでも僕は手を離さなかつた。

「ミリア、山倉と一緒に話がしたい」

「こんな分からず屋の自己中心的な奴、放つておけばいいのよ！」

「そんなわけにもいかないだろ？ 僕は今でも、山倉が大好きなんだから」

僕の言い分に納得していないのか、ミリアは不満げに顔を膨らませる。

そして次の瞬間には、その場から姿を消えていた。

改めて山倉を視察すると、耳を塞いたままうつむいていた。地面へと大量の水滴が、こぼれ落ちている。

「山倉、顔を上げて」

無理やりに顔を上げさせると、顔はぐしゃぐしゃだった。頬には滝のような跡を残し、徐々に幅が広がっていく。

「うそつ、つき……鷹野君の、嘘つき！」

山倉が僕の体を、容赦なく殴打する。僕はそれを黙つて受け入れた。

この痛みが山倉の痛みだと、無抵抗に受けることが、懺悔の代わりになればと思った。

十数発ほど殴られて、ようやく山倉の攻撃が止まる。山倉を抱き寄せた僕は、耳元で囁いた。

「ごめんね、嘘について。だけど、別に山倉が嫌いになつたわけじゃないんだ。ミリアの言う通り、僕は一度死んだ身なんだ。だからもう、死者の世界へといかなきゃ」

「嫌だよ。鷹野君と一緒に生きたいんだ！」

「僕は死んだ。山倉はまだ生きてる。だから一人一緒にいられない

い。分かるだろ？

「だったらわたしも死ぬ。わたしも死ねば一緒にいられるんでしょう！」

潤んだ瞳を、僕の肩へとなすりつけて、懇願してくれる。

「山倉、それは無理だ」

「どうして！」

「詳しく述べ言えない。だけど山倉が自殺したら、僕とは一生会えないくなる」

「そ、そんな……じゃあもう鷹野君とは一度と会えないってこと…？」

？

僕はうつむきながら、横に首を振った。

「山倉が天寿を全うすれば、また会えるぞ」

「つまり、一生懸命に生きて、その上で死んだらってこと？」

「そうだよ。今までびおりに生きていれば、山倉は天国にいけるんだから」「だから！」

微笑みつつ、山倉との間合いを広げようとする。だが。。

「いやだ、やっぱりいやだよ。お願ひだから行かないで。お願ひだから！」

から！

足を引きずりながら再び間合いを縮め、泣きついでくる山倉。涙が流れそうなのを、必死でこらえる。

一緒に泣いてはいけない。僕が泣いてしまえば、山倉はもう笑えなくなる。そんな気がした。

「微笑んでくれるだけでいい！ 他には何もないよお！ わがまだつて言わないから！だから、だからお願ひ！ 信也君にそばにいてほしいの！」

「無理なんだ、分かつてくれ」

「どうしてよ！ わたしを一人にするつもりなの！？ そんなにわたくしを一人、ぼっちにしたいんだ！？」

やけになつてまくし立てる山倉に、僕は首を横に振った。

「山倉は一人じゃない」

両肩をつかみ、山倉を押さえ込む。震えていた山倉の体が、次第に治まつていった。

「わたしが……一人じゃない？」

「三村も吉沢も、きっと山倉の力になつてくれる。母さんにも山倉を頼むつてお願いしておいたから。山倉は僕がいなくても、もう一人じゃないんだ」

「だけど……」

「僕だって、山倉と一緒にいたい。だからって、山倉が死ぬのを望むのは違うと思う。山倉には生きていてほしい。僕にとつて、最愛の女性だからこそね」

少しの間、山倉は考え込んでいた。鼻をすすりながら、か細い声で、

「うん……分かった」

そう、言つてくれた。

山倉の頭を抱き寄せて、僕は目頭が熱くなるのを感じていた。

「それじゃあ、もう行くよ」

僕は立ち上ると、山倉に背を向けた。今度は山倉も追つてこない。代わりに……。

「待つて、待つてよ……」

すすり泣く山倉の声が、聞こえてくる。

振り向くと、山倉は頬を震わせながら、無理やりに微笑んでいた。

「なにか、忘れてるんじゃない？」

「えっ？」

「誕生日プレゼント。もらつてないよ？」

喉の奥で違和感が沸き起こり、胸が圧迫される。

山倉の元へと引き返し、膝を地面へとつける。山倉が目を閉じて、僕の元へとそつと顔を近づけた。

震える手を無理やりに押さえつけて、唇を合図させる。触れた瞬間に伝わる、柔らかい感触が、一瞬にして僕の意識を支配していた。どれだけ時間がたつたか、僕には分からなかつた。山倉から、唇

が離れていく。

「ありがとう鷹野君。今日ここで口を、絶対に忘れないから……」

「いひちひな……」「めん」

謝る僕の肩を、山倉が思い切り叩く。

「いてつー！」

「寂しそうな顔しないでよー。いつまでも悲しくなつけやつじやないー！」

「いー」「ごめん」

微笑んでいる山倉の瞳から、再び涙があふれ始めた。ボロボロとじめどなく流れるそれを、僕は直視できなかつた。

「鷹野君、元気でね……」

「元気でねつて、死んでるんだけどね」

「フフッ、そうだったね。でも、元気でいてね。わたしを忘れちゃダメだよ？」

「当たり前だろ？ 絶対に忘れない。山倉がいつか来る日まで、ずっと待つから」

「うん」

僕が手を差し出すと、山倉は快くその手を握ってくれた。妙に暖かいのは、山倉が生きているせいなのか、それとも……。

「それじゃあ行くよー！ できるだけ長く生きてよ。僕の分までね」「分かってる。次に会うときには、よぼよぼのお婆ちゃんになつてから、覚悟してよよねー！」

こんな冗談を飛ばせるなら、もう心配ないだろう。ミリアの危惧も無事、解決したといつても、過言ではないはずだ。

「それじゃあー！」

「うんー！」

お互に手を振つてから、僕はその場から走り去つた。

もう振り返ることはない。なぜなら、僕の瞳も限界だつたからだ。

10月28日(4)

「お疲れ様！」

走っている僕の服をつかみ、動きを止めさせる。その手の持ち主は、ミリアだつた。

「うわっ、すごい涙。ほら、ハンカチ貸してあげる」  
無言でミリアから、ハンカチを受け取り瞳にあてる。顔全体に広がった水分をくまなく拭うと、大きく深呼吸をした。

辺りを見回すと、赤く巨大な扉のある中界の入り口だつた。辺りにミリア以外の人影はない。

「よかつたね！ 優美ちゃん助かって」

ミリアはまるで、自分のことのように、はしゃいでいた。はつらつとした笑顔に、ハンカチを返す。

「山倉、平気だよね？」

自分の仮定を認めて欲しくて、尋ねる。

今までのミリアならきっと、わたしには関係のない話で終わらせただろう。だが、

「きっと大丈夫だよ。上手な説得だつたし、最後には微笑んでたしね」

望む答えを出してくれた。ありがとうミリア　お礼を言う前に、

ミリアが嫌らしげな笑みを浮かべる。

「キスだつて、見てるこっちが赤面しちゃつたわ」

「なつ、もしかして……見てた？」

「もちろんよ。中界の姿に戻つただけで、あの場所にはずっといたからね」

腰に手をやり、勝ち誇るミリアの前で、僕はがっくりと膝を落とした。響き渡る高笑いで耳が痛い。

「でもさ、これで一件落着でしょ？」

「そうだね。安心して天界へと行けるよ

「うん、これからは楽しい毎日……ではないかもしないけど」「ないの！？」

鋭い僕のツッコミを、愛想笑いでかわすミリア。

「まあ、それなりに楽しいはずだよ。よかつたら案内人の仕事にも本当につけば？」

「うーん、どうしようか……」

「迎えに行つた場所に優美ちゃんがいれば、また優美ちゃんの姿が拝めるかもよ？ わたしが頼めば、すぐに雇つてもらえるんだけどなあ……」

ミリアの囁きは、僕に選択の余地を与えたかった。

「お願いするよ。ミリア」

「お願いします、ミリア様……でしょ？」

「くつ……」

お互いの顔を見合させ、一人で笑い出す。

無事に助け終わつた安堵感から、頬が緩むのを抑えられなかつた。

「じゃあ、いこっか！」

僕の手を引き、ミリアは門をくぐろうとする。そこで僕は足を止めた。

「ちょっと待つた。最近ミリアのようすが変だつたけど、もう大丈夫なのか？」

「えつ？ ああ、うん。もう済んだから」

「済んだ？ いつたい何があつたんだよ？ だいたい、僕のサポートなんてほとんどしてないじゃないか。一人で何やつてたんだ？」

いたずらを成功させた子どものように、にやけた笑みでミリアが答える。

「教えてあげない！」

「な、なんだよそれ！ 教えてくれたっていいだろ！」

「フフツ、簡単に言うとね、わたしもこの一週間、色々とあったのよ！」

簡単にと言つても、さっぱり意味がわからなかつた。

「さあ、行こう！ エンマ様が待つてる

「ああ……」

僕は再び巨大な門をぐぐり、エンマ様と対峙した。今日も機嫌は良いらしく、青くてひょろ長い体は変わっていない。  
僕のすぐそばには、事務所で会ったミリアの同僚 カルバドスがいた。

「お疲れ様。よくやつたな。鷹野信也君」

「はい！ ありがとうございます！」

お辞儀をすると、エンマ様は拍手をしてくれた。そばにいたミリアとカルバドスが、間を置かず続けてくれる。

「んじゅミリア、しつかり天界へと案内してやるんだぞ」

「言われなくても分かつてゐるわよ！ それじゃあ行きましょうか！」

ミリアが元気よく声を上げた。

「それではエンマ様、今回は本当にありがとうございます！」

「疲れただろうから、ゆっくり休むといい。死後の世界を楽しむのは、その後でも遅くないだろ？」

「ええ、そうですね。そうします」

これから先は、僕も死後の世界の住人なのだ。慌てる必要はまったくない。

エンマ様とカルバドスに頭を下げてから、僕はミリアと一緒に部屋の外へと出た。

上方へと伸びる階段の先には、輝く光に包まれた空間が、僕の来訪を心待ちにしているように見えた。

その階段の途中で、ミリアが思い出したように手を打つ。

「そうそう、エンマ様が今回の信也君の行動に、すごい感激してね。何かご褒美をくれるって言つてたよ！」

「えつ？ 本当に？」

「本当だよ！ 一年に一回だけ、特別になにかを許可してくれるって言つてた。まったく幸せものだねえ。天界で信也君みたいな、優遇を受けてる人なんていないんだからね？」「

「褒美とはなんだらうか？一年に一回だけでも生き返らせてく  
れれば、ありがたいのだが……。

「わたしもね、今回の信也君の行動とか、いろいろな面で感動した  
し、得るものがあったから。晩御飯でも奢つてあげるよ！」

「おっ、サンキュー！なんでもいいのか？」

何度も頷くミリアに、僕は忍び笑いをしながら、望みのメニュー  
を告げた。

「じゃあ、おでんにしようかな」

「えぎやつー！」

先ほどまで意氣揚々としていたミリアの顔色が、顕著に曇つてい  
つた。

「なんでもいこつて言つたのはミリアだからな。約束は守つてくれ  
よ

「ううう、ううー！」

ふくれつ面でもくれるミリアを、爽快に笑い飛ばした。  
その頃になつてようやく、実感がわいてくる。

そうだ。山倉を救つたんだ。本来なら分かるはずのない、未  
来の山倉の運命をこの手で打ち破つたんだ。

「どうか、お幸せに」

ミリアにも聞こえないほどの小声だが、山倉には確かに伝わった  
そんな気がした。

## エピローグ

「それじゃあね、優美」

「うん、また明日！」

親友の果歩と別れて、わたしは家路へとついた。雲ひとつない赤い空から、太陽が照らしている。

わたしは歩みを駆け足へと変えて、家へと向かつた。

といっても、別に見たいテレビ番組があるわけではない。

今日はわたしの誕生日だつた。そして、最愛の人とのつながりを感じられる、特別な一日なのだ。

そうなると、必然的に三年前の事件を思い出す。

それは、一度死んだ鷹野君が、わたしを救うために生き返るという、誰もが信じがたい事件だつた。

サークス会場の爆発後、鷹野君が消えた広場には、人が大量にあふれていた。

わたしの周りを大量の人間が囲み、様態を確認してから、病院へと連れて行かれた。

死者は一名。怪我人はわたしだけといつ、爆弾が爆発したにしては奇跡的な結果。その一端を担つたのが、他ならぬ鷹野君だつた。

病院から退院したわたしは、すぐにいろんな人物へと、鷹野君について尋ね回つた。

だが、二人を除いて全員が、鷹野君は先週の土曜日に亡くなつたという返答だつた。

返答が違つた二人とは、三村君と鷹野君のお母さんだ。

三村君は土曜日に、鷹野君が死んだと知つていた。だが、告白しようという決心を、サークス前に鷹野君からもらつたという。

鷹野君のお母さんも同様に、土曜日の結果を知りつつも、修学旅行前にわたしをお願いすると鷹野君に懇願されたらしい。

一人とも夢でも見たのだと考えていたらしいが、わたしが事情を

説明すると、納得してくれた。

あれから三年、わたしは鷹野君の家で暮らしている。本当の家は何度か訪ねたけど、ある日突然、家の鍵を変えられていた。それがお母さんの出した結論だと、すぐに察したわたしは、それ以降、実母の家には近づかなくなつた。

「ただいま！」

「おう、お帰り、早かつたな」

家に帰ると、鷹野君のお母さんがわたしを迎えてくれた。鷹野君との約束どおり、わたしの面倒を見てくれているのだ。

「雪絵さん、今日の仕事は？」

雪絵さん　それが鷹野君のお母さんの名前で、わたしの呼び名だつた。

お母さんといふ言葉は、あの大嫌いな実母を思い出してしまい、雪絵さんを憎んでしまって使いたくなかったのだ。

「サボつた。大事な娘の誕生日だからな」

「もう、また？」

「大丈夫。こう見えて、仕事場では頼りにされてんだ。クビになつたりしないわ」

そういう問題でもない気がするけど、あえてわたしは黙つていた。機嫌のいい雪絵さんの気分を、逆なでしたくはない。

「ご飯までもう少しはあるから、待つてろ」

「うん、勉強でもして待つてるよ」

階段を登り、自分の部屋へと入る。間取りは鷹野君の部屋となんら変わらない。

この部屋の存在が、わたしに鷹野君の存在を近くに感じさせてくれる。

「さてと、今日も頑張ろうかな！」

教科書とノートを取り出し、今まさに勉強を始めようとした、その時だった。

インターホンの高い呼び出し音が、家中へと響き渡る。

わたしはすぐに玄関へと向かおうとするのを、ぐっと堪えた。それが今しがた現れた来客との約束なのだ。

「優美！ 美利亞ちゃんだぞ！」

「はあーい！」

雪絵さんに呼ばれて、わたしは駆け足で階段を下りていった。すでに雪絵さんの姿は消えている。その代わりに玄関先で、わたしに手を振っている女性がいた。

「お久しぶり！ 優美ちゃん！」

「うん、一年ぶりだね、ミリア」

そこにいた少女は、爆発事故の後に姿を現し、中界と鷹野君の運命を語つた、案内人ミリア＝ミリスだった。

再会したのは二年前の今日 つまり、鷹野君が死んだ一年後の、わたしの誕生日だ。

それ以降、わたしの誕生日になると、ミリアはここへ来てくれる。わたしにとつて最高の、心の支えを持つて 。

「じゃあ、はいっ、これ、今年の分ね！」

「うん、ありがとう！ あの、鷹野君は元気ですか？」

「もちろんよ。わたし達に病気なんてないんだから。今頃は三年前のビデオでも見てるんじゃない？」

それだけで、ビデオの大まかな内容は想像できた。そんなビデオがあるなら、わたしも少し興味がある。

「そういえばこの間、優美ちゃんを見たって言つてたよ」

「えつ？ どこで？」

「大学病院の通路を歩いているといふ。たまたま信也君が、死んだ人の迎えに行つた時に見たんだつて。昔より断然かわいくなつたつて、のろけられちゃつたよ」

ミリアがウインクを飛ばしてきた。頬着々と、熱が集まっていくのが自分でも分かる。

「どう？ 勉学の調子は？ 医者になるつて樂じやないんでしょ？」

あれ以来わたしは勉強に精を出し、医者を目指していた。

あまり勉強が得意でなかつたわたしは、果歩の協力もあつて、浪人生をどうにか一年で抑えることに成功した。

今は医学部の一年生。ようやくスタート地点に立つことができた。

医者を志した理由はたつた一つ、シンプルなものだ。

「自分のように大事な人を失う悲しさを、だれにも味わつて欲しくないなんて、普通言えないよ？　すごいよねえ、優美ちゃんつて」

「あんなにつらい思いを味わうのは、わたしだけで十分だから。他の人にはできるだけ幸せになつて欲しい。少しでもその助けになりたい。ただ、それだけだよ」

「簡単に言つてるけど、それってすごいと思うよ」

わたしは照れ隠しに、頭を搔いた。ミリアがフフッと小さく微笑む。

「それじゃ、もう行くね！　なにか伝えておきたいことは？」

少し考えた後、顔を熱く燃やしながら、ボソボソと答える。

「これからもずっと、わたしと雪絵さんを見守つてくれとい……つて伝えておいて」

「今年もまた同じじゃない。今回は『わたしのハートはいつだって、あなたのものよ』とかどう？」

まつたく照れずに言えるミリアは、ある意味すごい。鈍感なだけかもしれないけど。

「じゃ、じゃあそれも伝えておいて」

「了解！　それじゃあまた一年後にね！」

「うん、ミリアも頑張ってね！」

「ありがとう！　じゃあね！」

手を振りながらミリアは去つていった。手元に残つたのは一通の手紙。いつもと同じ封筒には、住所も名前も書かれていらない。

これが、一年に一度だけ訪れる、誰にも想像がつかないわたしの幸せだ。

その手紙を自分の部屋へと持つていいくと、ベッドの上に身を投げ出し、封を開けた。

内容はわかかっている。毎年同じだから。

だけど、この手紙がわたしの支えになつていてる事実に違はない。  
封筒の中には一枚の手紙。その手紙には鷹野君の筆跡で一言、こ  
う書かれていた。

『ハッピーバースデイ 山倉』

## Hペローゲ（後書き）

『未来のキミを救いたい 鷹野信也編』を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。水鏡樹です。  
では早速ですが、鷹野信也編だけを先に呼んだ方へ。  
ミリアの涙の訳は？ 信也と一緒に居ない時、ミリアは何をしていったのか？

鷹野信也編を読み終わり、それらに興味が生まれた方は、ぜひミリア＝ミリス編も読まれてください。

お互の行動や細かい思考のすれ違いなど、鷹野信也編を読んだ後でないと分からぬ楽しみがあると思います。

そして鷹野信也編と同時に読んでいる方、鷹野信也編を読んでからミリア＝ミリス編を読まれた方。

長い時間をお付き合いいただき、本当に感謝の限りです。これにて未来のキミを救いたいは完結です。

一つの話をあわせると、400字詰め原稿用紙700枚を越えていたりします。そんな長編小説を最後まで読んでいただいた皆様には、本当に頭の下がる想いです。

長い間お付き合いくださって、本当にありがとうございました。

また、全ての読者の方へ。感想などありましたら、ぜひお聞かせください。その際はどういった読み方をしたか（鷹野信也編を先に読んだ、両方同時に読んだなど）も併記していただければ幸いです。それでは、また違う作品で

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5026b/>

未来のキミを救いたい 鷹野信也編

2010年10月8日14時04分発行